異形の神々の森

藤田　泰彦　Yasuhiko Fujita

青山ライフ出版

森の中に 4
精霊の店 20
来臨 64
叡巫の塔 75
移住 101
帰還 108
夢の光明化 143

異形の神々の森

森の中に

春の彼岸が終わった頃に、仕事で急遽東北M県の外れにあるM郡へと赴くこととなった。自分の仕事は家屋のリフォームや新築などを請け負うものである。私自身は都下の西東京市支社の所属だが会社の都合というか、折悪しくとでもいうか、M県の中心のS市支社の社員が一人病気で倒れてしまって、そういう事情から『五輪建装』の横浜本社の意向で派遣的に赴くことになったのである。いわゆる単身赴任でもあるのだが、私はもともとシングルであり身軽な立場でもあるので、そういう次第となったのであった。

同僚の小川は、「抜擢だから、会社がそっちの価値をしっかりと認めてくれた訳さ。来年からは係長だな」と言ってくれたが、でもそれは絶対にありえず、私は大学も中退でありここの会社に入ったのは三十四の時で、以来十五年経ち今は五十間近である。そんな自分が役付きになることはまずないのだが。まあそれは、彼のやさしさによるものでもあるが。もっとも、小川は会社では同期だが歳は六つも下である。が、とにもかくにも、私は東北のM郡に仕事で約三ヵ月間逗留をすることとなった。

二つの旅行鞄を携えて東北新幹線でS駅に夜の六時過ぎに着けば、改札口の傍でそこを出這入りする男女を凝視するみたいにして佇んでいる自分と同世代風の人物がいる。改札口を抜けて、ひょっと

してS市支社の係長の山村氏かと想っていると、「そちら様、島崎さんでしょう」と私に視線を向けて言う。それで、その方が山村氏であることを確認したのであった。

それからはまず、これからの自分の住居にと案内される。それはS駅から車で一時間くらいの割合沿岸部の近くにあるワンルームマンションである。ベッドのほかに狭いがユニットタイプのバスとトイレが備えられており、書き物をするテーブルもある。スタンドも据えられていて、ここでどうにか原稿を書くことはできそうではある。

「島崎さんは本を出されているとか」山村氏は私が本を出しているのを知っていてか、そんなことを言う。それで、「はい、まあたった二作だけですけどね」と控えめに応じていた。自分はホラー系のものが好きであり、仕事以外の時は、その関係の資料を読んだり原稿を書いたりしている。まあ、ほとんどお金にはならないのだが。が、いずれにせよ、明日からここ東北のM県の外れの場所で三棟の住宅を建てる業務に、補佐的にだが従事することになったのであった。

山村氏は、そのマンションから離れたところあるすし屋で晩を振舞ってくれて、当座の食料として二日分のパンとミネラルウォーターを置いていってくれた。外に出て彼を見送ってから、あてがわれた部屋で本を読む。毎日二時間くらいは神秘学関係の資料を読んでいる。事実、独り者の私は仕事を終えればそんな生活振りである。そういう日頃の習いで一時間半ほど本を読み、歯を磨いてから、瞑想をする。瞑想は日頃の習慣みたいなものであり、必ず一日の始まりと終わりにおのおの二十分は

行(おこな)っている。それからそこにしつらえられたベッドで眠りに就く。

翌朝、迎えに来た山村氏と一緒に彼の運転するスズキアルトで仕事現場に向かう。およそ十分で、三棟の家屋の土台が出来ている場所に着いた。これを約三ヵ月で完成に至らせるのであるが。周囲には数人の職人さんがいる。私は名前を告げ、名刺を手渡し、一人ずつに丁寧に一礼して挨拶の言葉を述べる。こういう家屋の建築やリフォーム施工などの業務は職人さんがいて初めて成り立つものであるから、勢い礼を尽くすのである。

それから少し経ってから山村氏は、「あの……、わざわざここ陸奥(みちのく)まで来て頂いたのだから、あんまり仕事の方は熱心にというか、気を入れてくれなくてもいいですから。それで土曜は職人さんたちも半ドンだから、週休二日として、連休にはここいらの自然を楽しむようにしてはいかがですか」と言う。何か、ふと感じもしたが、山村氏は意図的にそう言っているのかと、そんな印象さえもわずかに受けたのだったが……。

が、その日は、取りあえず二時過ぎまでそこの現場にいて、それからまた彼の運転で自分がこれから利用するあのマンションに向かった。陽のある中で改めて観ればかなり古めのマンションである。昨今ではまだまだ使えそうなマンションでも積極的に壊して、新しく建て替えるという風潮がある。だからこの建物も先は短いかなとも感じた。

だが、とにかく、仕事でこの住居で三ヵ月ほど過ごすこととなった。

「この辺りには食い物屋がありませんので。それで一応冷蔵庫も電子レンジも備えられていまして、比較的ですが近くに雑貨店がありますから、そこで食料や生活の必需品などを購入されては」と山村氏は言う。何でも、その店は月曜以外は営業しているらしい。

想えば、自分は『五輪建装』に入社して以来、こういう地方での単身赴任という業務は初めてである。いつも中野区にある住居、それはアパートだが、そこから毎日西武線で田無駅前の雑居ビルの二階にある『五輪建装』の支社に赴き、それがもう十五年も経っているのである。これまで二度横浜本社に挨拶に行ったが、主に都内の物件などの施工の業務に立ち会ったりしてきたが、こういった地方の仕事をするのは初めてなのである。地方に一時的であるにせよ定住するので、勿論ここの住居費は会社持ちであり、加えて必要経費に多少は上乗せもあるのだが。まあ私は気楽な独身者であり、アマチュアだが著作があることから、今回の地方巡業めいたことを有効に活かせばそれでよいかなどと受け止めてもいるのだが。

そんなことを思っていると、外でエンジンの音がする。山村氏は、「大野君だな」と言い、彼がドアを開ければ程なく三十代半ばくらいの人物が入ってきて、「はじめまして。東京から来られた島崎さんでしょう」と愛想のいい笑みを浮かべ、一礼する。

山村氏の説明では、彼がここまで乗ってきた原付スクーターが私のこの地での乗り物であると。大野氏は、「本当は四輪でもご用意すれば理想なのですが、でも、今は景気がしっかり悪いですからね」

と言い、「ここの建築現場に来られる際に雨でも降りましたらこれをご利用されては」とヘルメットに雨合羽を差し出す。山村氏は、明日からはこのスクーターで現場に来て頂きますのでよろしく、と丁寧な口調で言う。

そういう次第で、私は仕事をしながらも、余暇に東北の自然を楽しむこととなった。無論仕事の方がメインであるのでそれはある程度ではあるが。

そのマンションに住み始めてから翌々日の、この地での最初の土曜日に、スクーターでそこから出発して、内陸部に向けて都合三十分くらい走った。

だが、何か、不可解だが心に働き掛けるものがあって、それでとにかくスクーターを停める。その辺りでは森が拡がっている。私はそこへと分け入っていった。幸い、細いが小道がつけられている。数分ほど進めば、程なく木々がまばらになり、それまでよりも道がやや広めとなり、やがて狭いが広場のようなところに来た。そこからまた前のよりも更に細い道がつけられていて、それを辿って十数分ぐらい経ったか、茶色の小振りの堂宇を思わすみたいな物が建っているところに出る。そこは結構広い広場になっている。

気が付くと、向こうの木々の間に、白髪を腰まで長く伸ばした着物姿の痩せた小柄な老人が佇んでいる。くたびれたみたいな草履を履いており、さながら昭和の時代に山奥で俗世から身を引いて独り暮らしを貫徹している仙人をも想起させる。そんな印象を抱いているとやがてゆっくりとこちらに近

付いてきて、「どこから来られましたか?」とその独居老人とも思える人物は割と明瞭な声で言う。

彼のそんな問い掛けに、手短に東京から仕事で来て、今週からここM郡に逗留している事を伝えれば、「ああ、そうでしたか。それでは折角こちらに来られたのですから、ここにありますお堂にお参りされては」と穏和な表情を湛えて言う。私は老人の言葉に、何かそれまでの自我意識が緩やかに森に引き込まれ消えていくみたいになっていって、同意してしまっていた。

そこにはかなり奇妙な掛け軸があった。茶色の壁に貼られた縦が一メートル半くらいで幅一メートルほどの絵図には、着物を着た立ち姿の三つの蛇の頭を持つ人身の像が描かれている。

「これはあの弁財天様の亜形なのです」と老人は小振りの堂宇内で説明をする。それから「この森は遠い大昔に異形の神々が漂着した土地でもあるのですよ。ですので、ここでは混淆的と申しますか、言わばハイブリッドな神霊が創られてもいくのです。自然と」と言う。

私はその老人が今し方述べた事にいささか驚愕もしたが、比較的だがそういう方面には詳しいので、「そうなんですか……」と如才ない対応をしていた。

「まあ、この森の中の異界と、それはあなた方から見てのものですが、とにもかくにもここ異界の住人である私とこうしてご縁があったのですから、こちらのお堂で少し瞑想などをされましては」と言う。内部には、人工の照明とも違うが淡い光が程良く射している。

それで私はそこの堂宇の床に座ってしばし瞑想をする。すぐに扉は静かに閉められる。

数分くらい経ってから開眼すれば、扉は開けられたらしく、先程の老人が後ろから声を掛ける。

「本日ここに来られたのですから、お仕事がお休みの日に、またこちらに脚を向けられては。この森一帯には、通常の生活ではなかなか体験できないような事柄がかなりありますからね」と言う。私はもともとスピリチュアル系なので、「はあ、そうですか」と多少嬉しいみたいな気持で応じていた。すると、その老人は静かな口調で、

「実はこの森自体が古(いにしえ)の神々の棲む異界でもあるのですよ。ですので、こちらに関わった方々は次第に心が変容してくるのですよ。そうして、やがては意識が〝虚無〟へと向かっていくのです。そういう作用すらある一帯でもありますので、これまでの暮らしや娑婆での人間関係などに未練がおありでしたら、ここにはあえて参入されない方がよろしいかと想うのですが」

私は生まれて以来全く良い事などなかったので、苦しまずに死ねれば本望、至上の喜びといつも感じてきたのであるが。そんな己(おのれ)でもあるので、その類(たぐ)いの、言わば全ての過去が忘却の彼方に運ばれるようなものは大いに歓迎でもあるのだが。

「あの、私は今建築やリフォームなどを請け負う会社の仕事をしているのですが、これまで人生で良い事は全くなくて、もう五十近いので、いつも苦しむことなく平和な想いを抱いて死ねれば最高であると感じていますので、今し方そちら様が言われた心、意識の変容などがもし出来れば、本当にありがたいのですが」と、思わず眼前で佇む老人に言ってしまっていた。

考えてみれば、自分は二作ホラー系の作品を出版しているが、ほとんど売れず、その原因が日頃のまとわり付くみたいな雑念であると感じるのである。それらが緩和されれば、案外少しは売れる作家になれるのではと思うのだが。するとその老人はそういった私の言葉に、「ですが物事は、とりわけ神秘色の強い事柄は、太古からの叡智をも継承しておりますので、そういうことから、まあ、かなり修行的な側面があるのですが。でも、そちら様がお望みでしたら、今度の土曜日、本日から七日後にまたここに来てください。先程見つけられました最初の狭い広場から始まるあの森の中の小道を辿ってきますと、やがて堂宇が建つこの場所に至りますので」と、穏やかな口調で応じるのであった。

私はその老人にそんなことを言われて、とにかくお礼をしてからその広場を後にした。

そこの広場に来た時の細い道を辿り進むようにして歩き続ければ程なく、先刻通ってきたと記憶する狭い広場にと至り、またそこから小道を行けばやがてスクーターを停めている森の手前に出る。私は少し高揚感をも抱きながら、スクーターに乗って帰途に着く。

翌日は日曜日なので朝早く起きて、短い瞑想などをして、それからコーヒーを淹れて飲む。私は滅法コーヒー好きであり、今回の地方での定住にもコーヒーを点てるドリップの器具などや挽いた豆を旅行鞄に入れて持参してきたのであった。マンションの部屋には寝具一式に洗濯機も備えられており、自分は都内の安アパートでの生活ではコインランドリーでの洗濯であり、多少戸惑ってもしまう。その操作方法などが慣れないので。が、都合二十分ほどで把握できた。それから、外に出てみる。

山村氏の話ではこのマンションには住居人は私を除けば二人らしい。こういう田舎では、ウィークリーマンションという形態での利用など皆無に近いはずで、また、会社や大学などが一帯にあるわけでもなさそうなので、マンション自体もほとんど無用のものである。山村氏は、借り賃はかなり安価でもあったんですよ、と言っていたのだが。だが、実際この地に来てから、奇妙ともいえる意識状態になってしまっているのを感じる。

しかし、これからの生活のための食料を購入しなくてはならず、山村氏は割合近いところに雑貨店があると言っていたので、まず、それを見つけなくてはならない。それでスクーターは利用せず、脚で辿り歩いて近隣を散策しながらここの土地を把握するのが良いかと感じた。M県の外れに当たるここM郡の土地は、なかなか自然が豊富である。私は都会の騒々しさがないここら一帯に一年の四分の一の間定住できることに何だか嬉しくなってしまった。それから山村氏に教えられたようにして、マンションの門から丑寅の方角に歩いてゆく。すぐに聳えるような大きな樹があり、彼の言う目印であるらしいそこを過ぎて、どこか淡々とした気持で歩を進めてゆく。と、程なく、森を背景として小振りだが都会にあるスモールスーパーを思わすものが建っているのに気が付く。一戸建てであり平屋である。立て看板があり、そこには「エルフ屋」と記されている。エルフとは西洋では小さな妖精のことをいうのであるが……。多少奇異なものをも抱いてしまったが、取りあえず入ってみる。店内では一般のスーパーと大差ない物が並べられている。パンやレトルトカレーやコーヒーや日用品などと。

私は少し安心した。と言うのは、コーヒーは己の生活必需品であり、ここの地で入手できなければ遠く離れたS市の方にでも脚を運ばなくてはならないのであり、その手間が一応だが省けられた訳である。

店員の姿が見えなかったが、とにかく積み置かれているカゴを携えて店内を廻ってみる。わずかだが……、不可解なものを感じてしまった。商品自体に、どうにも見慣れないものが多いのである。自分が普段購入しているスーパーの商品とは違うメーカーの品ばかりなのである。一瞬戸惑ってもしまったが、考えてみればここはM県の外れのM郡でもあるので、同地のメーカーのものが積極的に売られていてもさして違和感はないはずなのだが。何か……気持が混濁してくる。心が揺らぐみたいな折に、「いらっしゃいませー」という声が。

声がした方を振り向いてみれば、若い二十代前半くらいの女が立っている。わずか前までの心の揺れは緩やかに収まってゆく。制服みたいなものを着用していないので、恐らくこの店は個人経営なのであると感じた。

「お客さん、見慣れない方ですが、最近こちらに引っ越されたのですか」と訊く。

そんな問い掛けに、「はい。まあ、仕事で三ヵ月ほどここに逗留することになったのですが」と割と忌憚なく自分の実情について述べ伝えていた。

女は、そんな私の対応に柔らかな笑みを表し、「そうでしたか。東京からここM郡にいらしたので

すね。この辺りは市街地と比べれば不便なところですけど、うちの店には必要な物は揃っていると想うのですが」と澄んだ声で言う。

まあ、確かに、自分が生活する上での物は大体あるとは感じるが。

「お客さん、この辺りにはうちのほかにはスーパーや商店がありませんので、車で遠くに行かれる時以外にはここエルフ屋をご利用くださいね。何だか商売気丸出しですが、でも、うちの商品はそんなに悪くはないですよ。お値段もお客様の立場に立たせて頂いておりますし。それに、お客さんの本当の幸福に、そう、貢献できるものと、少なくとも私は想うのですよ」と、そのスーパーというか雑貨店の店員の女性はそんなことを言う。

私は女の一連の発言などに多少ならず奇異な思いを抱きながらも、一方では何か温かいものを感じてしまっていた。それからパンやレトルトのライスとカレーなどを買い、レジでお金を支払って店を後にし、十五分くらいか歩いて自分のこの地での住居に着く。

明日からまた仕事なので、今日のうちにある程度原稿を書いておかなくてはならない。それで資料を読み、ここにはパソコンがないので、横書きのレポート用紙に書き連ねる。それらを縦書き原稿用紙に改めて推敲しながら書くのである。この土地の近辺には図書館はなさそうなので、来る前にできるだけ資料に該当する本を携え、また、三週間後に一度東京に戻る予定でもあるので、その折には、必要と想われる書籍などをこちらに宅急便で送るつもりでもあるのだが。が、ここら一帯にはほとん

ど個人邸宅の家屋がないのである。いわゆる過疎地なのかとも感じる。それはあの震災の影響によるのかもしれないが。でも、工場や倉庫などは結構あるようではあるが。

想えば、昨日脚を向けたあの森の中で出会った老人も、自らを異界の住人と名乗ってもいたが。東北のここの地に来てから、どうにも奇妙な事が起こっている。先刻のあのスーパーにも、どこか不可解なものがあったと感じる。だが——。

自分の心が、ある種変容しているのを感じてくる。しかし、現実に、私は日々の仕事に従事しなければならず、あまりそういうことばかりに感けていることはできず、とにかく読書をし、それからまた原稿を書く。

夜も十時を回ったので、また、瞑想して寝床に就く。

翌日の月曜日から、また私は建築現場で工事に立ち会う。ここでの自分の仕事は職人さんたちが施工をされるのを見守る事が主だった業務である。建築の工事を行う際に、事前に近隣の人々への挨拶があるのだが、山村氏は二週間前にそういうことはすでに遣り終えていると言っていたが。そもそもここらには一般の個人邸宅はあまりないらしくて、あとは工事車両の誘導やそれらとの連絡業務全般であるのだが。都会だとこういう家屋を建てる工事にはほぼ必ず警備員が一人は付くものだが、ここはしっかり田舎でもあるのでその必要はなく、私と山村氏がそういう役割を果たすのである。自分がここの現場に来るまでは彼一人でその業務を行(おこな)っていたのであるが、これから以降は私と二人でそ

の任に就くのである。まあ、それでわざわざ自分が西東京市支社から派遣されたのでもあるが。もっとも、これからは私がここの現場の中心となり、山村氏はほかのM県の現場も担当しているらしい。「島崎さん、あとはよろしく頼んだよ」と言い、彼はその日は正午前にアルトで立ち去った。

昼になったので、私は昨日あの小さなスーパーで買ったパンを食べ、ジャーに入れてきた水を飲む。山村氏に振舞われたすし屋は自分の居住しているマンションから車で十分くらい離れたところにあったが、この周辺にはほかには飲食店などはないのである。職人さんの方々は、かなり遠くから来るので、全員が弁当持参であるらしい。私は、建築現場のコンクリートの土台に腰を下ろして、ささやかな昼食の後、しばし瞑想をする。

あの森の中で出会った老人は、そこは異界であると述べていた。すると、老人のほかにも幾人かの居住者があの森の周辺に定住しているということなのか。老人は、意識の変容などが起きると言っていたが。まあ、その際に彼に伝えたように、誕生以来全く良い事がなかったので、日頃からそれらにまつわる記憶が一掃されれば、もっと心は軽やかになり、自由闊達に物事を行うことができるようになると感じているのであるが。が、とにかく、週末の前の日の金曜まではこちらの現場の業務に連日従事しなくてはならないのである。

そうこうするうちに金曜日となり、夕方に現場で山村氏は、「島崎さん、ウィークエンドはゆっくり過ごしてね」と言う。彼は、私がまだアマチュアだが一応作家でもあるので、恐らく土、日は自然

の多い場所を散策したり、原稿を書いたりしていると思っているのであろうが。

翌日、朝の九時頃にスクーターであの森へと赴く。やはり、森の始まりの辺りに先週見つけた小道がある。丁度一週間前に、私はここから、あの小さな堂宇が建っている場所にまで行ったのだったが。……奇妙な想いがしてくる。ふと、ここを今日再び通りゆけば、かつての、これまでの自分自身の意識が消滅してしまうのではとの危惧さえも抱くのであった。だが、もともと己はそれを望んでいたのでもあるのだが。

私はスクーターを停めて、ヘルメットをフロントバスケットに入れて、躊躇（ちゅうちょ）しながらも森の中へと分け入っていった。

二十分ほど歩いたか、あの堂宇が建つ広場へと出る。やはりそこには老人が佇んでいる。

「やあ、またこちらに来られましたね」と静かな笑みを浮かべて言う。

「はい、堂宇で弁財天様の掛け軸を拝ませて頂きたいと思いまして」と、多少戸惑いつつも応じていた。

老人は、「そうですか。でも、本日新たにここに入って瞑想をいたしますと、最早これまでのそちら様であることはもう出来ませんが。それでもよろしければですが」

老人の今の言葉に怖れもしたが、何しろ物心付いてからほとんど人生が思い通りにならなかったので、あまり社会的な問題が起きなければそれもよいかと思った。それで己の実情などを、独身であり八十代も半ばの母親は、姉が大阪の河内長野市で面倒を見てくれていることなどを述べ伝えれば、「あ

あ、そうですか、大体分かりました。では、申し上げますが、基本的にそちら様はもう以前の、これまでの記憶を有したご自身であることはできませんが、一方、その肉体は娑婆でこれからも、そうですね四、五年ほどはあり続けるかと想われますが」と述べ、それから「それで先日私がお伝えしましたように、ここ異界はなかなか大変なところでもありますゆえ、そちら様の明確な意思決定が必要でもあります」と言う。

「そうですか……」

「つまり一度ここ異界に参入してしまいますと、それから以降はそちら様から見ての異界での生活と申しますか、そういう状態から離れることがもうできません。ですから、それなりの覚悟がいる訳なのです。全く仮にですが、一度約束をしてしまいますと、そちら様の心、意識はここ異界の森に留まってしまって、半永久的に置き据えられることになるのであります。悪く申し上げれば、捕虜なのであります。もっとも、なかなか高級な自由度が高い捕虜なのでもありますが」

私は眼前の老人のそんな言葉に何か嬉しいものをも感じて、「はい、自分はこれまで生まれてから良い事は少しもありませんでしたので。そういう異界の住人となるのは、願ったり叶ったりでもあるのですが」と言ってしまっていた。でも何か、自分の内で表面の思いとは別のものが動いて変心することが始まっているとでもいうか、そんな感じさえもしてくるのであった。

すると老人は、「了解いたしました。では、こちらの堂宇にお入りくださいませ」と言う。

私は、微かな喜悦にも似た思いをも抱きつつ、静かにその小振りの堂宇に入っていった。三つの蛇の頭を伸び表す着物姿の神像、老人は弁財天であると述べたのでそれは女性かと思われるが、その怪異な姿が描かれた掛け軸が掲げられる堂宇の床に座って瞑想をする。

老人は、この森には異形の神々が漂着したとも言っていたが。それらが融合した神霊がここの森林一帯に棲んでいるのかもしれないと思った。

精霊の店

翌日の日曜日に、小さな雑貨店にと足を運ぶ。そこにはあの女性がいる。改めて見れば割に大柄ではあるが、でも、なかなか可愛らしく、均整の取れた身体つきである。セミロングの髪に、ジーンズに青いエプロンを付けた仕事着だが、何か清楚な上に洗練されたものさえも感じさせる。……不思議と。

私は何となく生活必需品を買い入れようと思い、また立ち寄ったのだったが。女は気を利かしてくれてか、レジの傍にある椅子に座って本を読んでいる。

それから私は、一通りの品物を買ってレジの手前まで来た。

計算を終えてから「お客さん、東京の方から来られたんですよね」と言う。

「はい、そうですが」

「そちらではお独りなのですか」

女はそんなことを訊く。それで私は、「はい。自分は独り者でして、まあ気楽な暮らし振りですよ。名前は島崎映二（しまざきえいじ）といいますが」と名乗り応じていた。眼前の女は、自分と同様独り者であるのかと、そんな思いが過った。でも女は、どこか捉えどころのないものをも感じさせる。確かに、整った顔立

ちで良い雰囲気を放つ女性ではあるのだが。……不可解なものが募ってきている。私は仕事で、東京から田舎ともいえるここM郡を訪れたのであったが、以来、ある種奇妙な精神状態にもなってきているのだった。もっとも、すでにあの森で老人と出会い堂宇で瞑想をしているので、その影響なのかもしれないが。

「お客さんはこちらの方ではないので、私のこと少しお話しいたしましょうか」と唐突にその女性は言う。一般では、あまり親しくないしかも女性が、男性にそんなことを言うのはかなり特異でもあると感じた。しかも客と店員という間柄なのである。だが、何か、全てが動きだしているという思いがし、程なくそれにもさして違和感などはなくなってゆき、心を……穏やかな安寧が被い包んでゆくのを感じてくる。

「私は四年近く前に初めて娑婆、あなた方でいうここ顕界に現れたのです」

女は意外過ぎる事を言う。が、最早自分はあの老人との邂逅で異界に参入しているので、彼女の述べた事にさほどの怖れはもうなかった。

彼女は、「お客さん椅子にお座りくださいね」と言い、簡素な木製の椅子をレジの近くに持ってくる。それから店の隅に据えられた狭い台所でコーヒーを淹れてくれ、勧める。私はコーヒーが大好きなので、早速啜っていた。結構旨いコーヒーである。そんな思いを抱く私に、眼の前の女性は静かに語り始める。

「まず私の名前は叡巫（えいみ）といいます。叡智の叡（えい）と巫女さんの巫（みこ）を併（あわ）せた名前なのです。また、私は人間の父親と、自然界に棲んでいる精霊、女性のエルフとの間に生まれた半精霊の半人なのです」と実に怪異な事をのたまう。だが、私自身、一般人と比べて神秘学には明るい方なので、彼女のそんな話を、ある程度だが落ち着いて聞くこともできるのであった。

「私の父はここの土地の出身ではないのですが、でも同じ東北六県の福島で生まれて、その地で二十代の初めから中規模の雑貨店で仕事をしていたのですが、三十を間近にした時に自分の店を持ちたいと思い独立して、それでこの土地で雑貨店のエルフ屋を開いたのでした。ですが残念ながら成人病を患ってしまって、仕方なく店を閉じて入院して、結局亡くなってしまいました。それは今から四年半前の事です。父は表向き独身だったのですが、精霊、エルフである私の母とこちらの世界から見て異世界、精霊の世界で交合をして、女性の性を持つ自分が誕生したのでした。もちろん、それは精霊の世界での事でありますが。誕生以来私はずっと母と共に精霊の国で暮らしていたのですが、ある程度成長しましたのでそれで父の死を機にここ娑婆に立ち現れて、小さな雑貨店を継ぎ営むこととなったのです。先刻申し述べましたように父が亡くなり、一時（いちじ）は店を畳むことを考えたのですが、母が、私が娑婆で活動して何らかの経験を積む事に意義があると思って、それで私も同意いたしまして、エルフ屋の店長兼たった一人の店員さんになったのです。そういった事情で、ここらはほとんど過疎地ですので、わずかに残って定住されている方々やこうしてご縁のあったそちら様に、そう、私で何か出

来る事をさせて頂いているのです」

叡巫（えいみ）という精霊でもあるという存在は、私にそういうご自身の実情を忌憚（きたん）なく伝えるのであった。かなり怪訝（けげん）な感をも抱いてしまったが、しかし、すでにあの老人の誘いで奇異ともいえる弁財天の亜形の神像の掛け軸を祀った堂宇に参拝して瞑想をもしているので、それらがどこか自然界の一つの流れかとも感じてしまうのであった。つまりこれまでは、自分や多くの人たちが暮らし活動する日常の世界はそれ自体で全く閉じたというか完結したものでもあったのだが、前世紀末を境（さかい）にこちらから見てだが、異界の住人が関与してきているとも想われるのである。これは私の思い込みでしかないのかもしれないが、でも、どこか直観的にだが、そんなことをも感じてしまうのであった。

「ですが、私は地域社会に何か良くないことをするというのではありませんし、宇宙全体の〝法〟から見れば、こうして異なる世界の住人がそちら様の世界に関わることに何も問題はないと思うのです。そう、そちら様の社会の秩序を乱さない限りにおいては」

彼女はそんなことを言う。それは確かに事実であるのだが。その日、私はそういう内輪の話を聞かされ、どこか秘めやかな喜びめいたものをも感じながらも帰途に着いた。

会社にあてがわれたみたいなマンションの一室に戻ってから、原稿を書く。私は本日思いがけなく叡巫という名の女性、それも精霊、エルフとの間（あいだ）に生まれた言わばハイブリッドから、彼女の個人的実情などを聞かされる羽目となったのだったが。私はもともとファンタジー色の濃いホラー系の小説

本などをこれまで出版していることから、あまり驚愕めいた思いはなく、それも世界を構成している一側面であると感じてくるのであった。

翌日、また建築現場に赴く。山村氏が、朝礼で今週の目標などについて手短に述べる。

ここの三棟の建物は次第に出来つつあるのである。昨今の建築は二昔前と比べて完成するのはかなり早いのである。だが、私はわざわざ横浜本社の意志決定で、ここ東北の仕事現場まで来たのであるが、そういう必要性が現実にあったのかと少々疑問に思ってしまう。こういう建築現場は、山村氏一人でもどうにか取り仕切れるとも想われるのだが。仮に常時ここに彼がいなくても市街地ではないので、工事車両を停めた際の交通誘導における問題がほとんどないのである。が、M県のS市支社はそれほど社員が多くはなく、あの震災でほかの新しい建築の需要がかなり増えたためかもしれないのだが。いずれにせよ今週には上棟式もあり、私は親切な山村氏が言うように、程々仕事をすればそれでいいのかもしれないが。

そうこうするうちに金曜日には上棟式を地元の神主さんが執り行い、工事は更に進んでいくのであった。私はまた土曜日を明日に控えて、微かにだが、名状しがたい高揚感をも募らせてくる。

翌日の昼前に、スクーターで森の傍に着いた。やはり、森の端に小道が見られる。私はそこから、ゆっくりと森の中に入っていく。やがて、またあの堂宇のあるところにまで来た。

すると――、周囲の木々の間からあたかも引き出されるみたいな感で、あの老人が現れる。「また、こちらに足を運ばれましたね。それでは、これからある社（やしろ）まで参りましょう」

老人はそんなことを言う。だが、ここまで来れば、もう自分の意思が粗方なくなり、眼の前の老人についていくのが道理であると感じてくるのであった。ほとんど抵抗も無く。

それから一緒に森の中を通り抜け出、平原にも似たところを歩き進んで、幾ばくかの時が過ぎて気がつけば前方に、かなり大きな窪地と思（おぼ）しいものがある。

「あそこはすり鉢状になっていて、底に向けて堂宇や社が建てられてあるのですよ。無論そこに至る小道はつけられておりますからご安心ください」と言う。

それで、程なくそこの縁、降り口の辺りにまで来る。そこで見下ろせばそれは下方に向けてすり鉢状に掘り下げられて、あたかも抉（えぐ）られたみたいにもなっていて、おおよそ深さは七、八十メートルほどか。円周の方もそれくらいであると感じる。まるで小さな死火山の噴火口を思わすものである。

「ここから下に降りてゆきますので、自分の後について来てくださいませ」

老人はそう言い、それで私は彼の後ろを歩いてゆく。石と土の小道であるが、さほどの歩きにくさはない。老人は草履履きだが割に早足である。螺旋を描くみたいにしてやがてそこの中程辺りまで降りれば、あたかも斜面に据えられるみたいにしてここにも茶色の小さな堂宇があるのであった。森にあったあの堂宇よりは一回りは小さい。老人の霊力によってか、扉が自動ドアの如く静かに開く。

中には、怪異な風貌で一メートルほどの黒色の立像が佇んでいる。照明は、自然の光のようなものが天井から射していて、堂宇内には必要なだけの明るさはある。これは、あの森の中にあった堂宇と同様でもある。この世界では、全てが自然のもので程良く賄われているらしい。でも、今は、そういう現実にも全く違和感がなかった。安置されているその像を眺めれば、頭部は一つであるが腕は十本ある。仏像か、あるいは神像であるのか……。

「まあ、どちらにも解釈できるのでもありますが。仏像とも、神像とも。あなたもご存知のように、日本では本地垂迹説が平安期あたりから定着していて、それは自然界のまさしく真理である訳です。実際古代には、地球上の多くの土地で様々な優れた教えが、主にアニミズムを基調とする自然崇拝ですが、それらが奉じられてもいたのですが、あのおぞましい一神教がすっかり撲滅してしまって、結果それら自然界からの霊威を娑婆に伝えるものが途絶えてしまったのでした。ですが、東洋の地では、そういう原初的なものが今の二十一世紀においても継続されているのですよ。色々な宗教や神秘主義に言わば同化して、あるいは潜み入るようにして存続してきました。ですので、例えば仏像を拝めば、同時に不可視の神々、八百万を拝んだことにもなるというあの神仏習合の優れたる理念の確立は、事によりますと銀河系神霊の、あるいは宇宙大神霊の計画でもあったとさえ想うのですが」

老人は、そんなことを言う。実際それは事実なのであろうが。

「それでは次の、今度は社ですが、そこに参詣いたしましょうか」

私は彼の言葉に、従うみたいにして歩き出していた。再びそのすり鉢状の一帯につけられた道を巻くようにして降りていけば、やがて、先程の堂宇と同じく、更に底に向けての斜面のその途中に建立された小振りの社殿の手前まで来る。濃い茶色のそれは小さいがまさしく神社である。堂宇のあった辺りと比べて周囲は暗い。「これは、機前の社なのであります」と、そこで老人はそんなことを言う。〝機前〟という言葉は、一般人には全く耳慣れないものであるが、でも、古神道で世界、宇宙の始原の更にその前を表すものである。つまり、少なくとも我々が観測し得る宇宙の発祥以前とでもいうか。「ここの社で瞑想をしますと、これまでの記憶がかなり渾沌として、それで、まあ、ある種雑念がなくなるのであります。ですが、同時に次第に今まで有った個性の類いが希薄になり出し、没個性ではありませんが、単純にそれまでの自分自身の個性がやがてはほとんどなくなるのでもあります。でも一方では、別の、その個人が娑婆で生きるのに妥当な程良い個性を新たに自然と得ていくといいますか。いえ、それ自体になっていくと申しますか。が、それまでのご自分がほぼ消滅してしまいますので、それをご承諾して頂ければですが」と、老人はいささか説明的に述べてから「とにかく、取りあえずここに入られまして、それから最終的にお決めになってもよろしいかと思うのですが」と言う。

私は、そんな勧めに一瞬ためらいもしたが、もともとそれを望んでいたわけでもあったので、一応同意していた。実際、老荘思想で述べられている〝虚無〟に同化することが己の切なる、そう、至上の望みでもあったのだが。黒い格子で仕切られた左右の扉を開け、老人と私はその社に入っていく。

仄暗い社の中には神鏡が据えられている。「この鏡を眺め、それから禅定いたしますと、次第に意識が鎮静され、程なく変容していくのであります。そうして、あなたは回を重ねるごとに、最早これまでのあなたではなくなるわけです。もっとも、全ての自我意識が消失してしまうというのでは無論なくて、必要最低限のゲノム的な自我だけは遺して、それ以外は順次また新たに組み立てられていくのでありますが。結果、過去とは無縁の新しいご自身ともなってゆきます。ですので、以前にも申し上げましたように今までのそちら様の人間関係などに未練や執着がおありでしたら、これ以上の関与はされない方が最善であるかと存じますが」

老人はそう言ってから更に、「まあ、実際これまでの自我意識が消え去ってしまうというのは大変なことではあるのですが、世の男女の半分くらいはそれを望んでいるのではないでしょうか」と述べる。確かに、それは事実であるかとも思った。

「どういたします。もしそれをお望みでしたら、これから、こちらの社で禅定されては」と老人は穏やかな声で言う。

私はかなり戸惑ってしまった。だが結局、その老人の申し出めいたものに同意してしまっていたのだった。

翌日の日曜日に、私は、またあのスモールなスーパーのエルフ屋に赴く。店長で唯一の店員、叡巫

がいる。

「お客さんは本を出版されていますよね」

彼女は、私が伝えもしなかった事を把握している。さすがに精霊であると思った。

それから叡巫は精霊として、その帰属している精霊界で日々、活動をしているのであると言う。「ですので、私はお店を閉めてから、精霊界へと帰るのですよ。私の住んでいる家は精霊界にあるのです。そういう次第ですので、自分は精霊界と、島崎さんやここの土地に住むほかの方々が暮らす娑婆とを月曜以外は往還（おうかん）しているのですよ」

彼女の言葉にやはり奇異なものを感じてしまったが、すでに精霊であることを伝えられてもいるので、さほどの違和感はないのでもあった。思えば、私はここM県の外れの現場に来てから、精神が変容してきているのである。無論、通常のリアリティーを受け止めるだけの判断力や認知力はまだあるみたいなのだが、一方それ以外のある種の知覚のようなものをも併（あわ）せて発生してしまっているのである。いな、それが日々徐々にだが形作られてもきているというか。

「お客さん、どうでしょう。この次の日曜日にこちらに来られて、その日は昼の一時にお店を早仕舞いしますので、それから一緒に精霊界に行き、そこで半日を過ごされません」と、そんな嬉しいような怖いことを言う。だが、自分はもうすでにあの老人に案内されて怪異とも思えるすり鉢状の窪地の中に建立された意識を機前の状態にするという社で、禅定をしているのである。が、不可解なことに

そこで瞑想をしてからの記憶が全くないのである。確かに老人に連れられて、その機前の社でそこの社殿の床に座り、禅定に入ったのだったが。それは昨日の事であるが、気がつくと、私はスクーターを走らせていて、どこか習慣的に、現在借りている住居に向かっていたのであった。そうして、特に違和感もなく、古いマンションの手前に停めて、普段の日常に帰していったのである。

結局、自分が抱く恐れは、そういう神秘的な体験をした結果己が一体どのように変貌していくかである。未知への恐れとでもいうか。だが、叡巫という女性の精霊と人間の男性とのハイブリッドであるという存在の誘いに、とにかく私は同意をしたのであった。

その日は、それから店で日常に必要なものを買い、住居にと帰った。

夜に、私はしばし瞑想をする。次第に静謐（せいひつ）な意識状態になって、やがて、暗い平原を思わす場に佇む己を感じる。肉体から抜け出た意識としての私は、あの老人に連れられた森の中にいるらしい。そこから先に、実に大きな窪地があったと思うのだが。だが、今の時間は夜である。自分が日常で生きる生活圏ではなさそうなここには、全く照明の類いがないのである。だが、それでいて、周囲を歩くのに必要なだけの明るさはあるのである。奇妙な安寧が心を被っていくのを感じる。もう、ここの世界の住人であるという認知めいた思いが募ってくる。穏やかな融和をも感じてくるのである。やがてそれから、静かに日常の覚醒した意識状態に収斂（しゅうれん）をして、マンションの一室で開眼していた。

翌日から、また建築現場に赴く。建物は次第に出来つつある。すでに家の体裁は整えられている。

来月には外装などが行われると想われる。その後は外構が始まりそれが終われば完成である。私は地鎮祭の折にはまだこの地に来てはいなかったのだが、上棟式には地元の神主さんが訪れてお払いをし、その時には立ち会った。だが、この三棟には一体誰が住むというのか。この辺りには会社もなく、生活には至極不便な場所であるのだ。車を利用すればそれでよいわけではあるが。S市の市街地に住むお金持ちが、別荘として利用するのかもしれないが。例えば東京で、都内に住んでいる方が別荘として都下の自然の多い奥多摩などに家を建てたりすることは割合あったりもするが、でも、己のこれまでの仕事から考えてみても、こういう場所に別荘などというのはどうにも解せないのである。しかし、これもうち『五輪建装』に依頼があったことによるのだが。が、工事の方は順調に進み週末となる。だが、少々不可解なことに、工事の内容を示す確認表示版に、建物の依頼者である建築主の名前が記載されていないのである。また私自身にも、会社からそれについて何も知らされていないのである。

土曜日の朝、また私はスクーターであの森にと赴く。森は以前にもまして、まるで私を迎い入れるような風情を放っている。最初にここに来た時と比べて明らかに変化している。森自体が変貌を遂げてきているとでもいうか。何か、一層有機的なものを感じさせる。

だが、私はまた静かに森の中へと入っていった。薄暗い中を通り行けば、やがてあの堂宇の手前にまで来た。今日は、老人はいない。だが、とにかく堂宇に入ってみることにした。扉をゆっくりと開

けて、「失礼いたします」と断るみたいにしてから中に入る。と――、そこは前に来た時とは全く様子が違うのであった。何と言うか、その掛け軸の絵図であったはずの三つの蛇頭の弁財天であるというその神像は、今、立体感をもってあたかもホログラムの映像の如く堂宇の中に臨在している。私は恐れを感じたが、でも、どうにか合掌をして弁財天の真言を唱えていた。

　すると「ありがとう。私を祀り敬うその気持、とてもとても嬉しい」という女性の声が届いてくる。一瞬驚愕したが、この森は異界でもあるので、どこか自然にその現実を受け止めてしまっていたが、とにかく少しあわて気味に三度礼をしてからその堂宇を後にする。

　それからの私は、慎重に歩を進めていった。以前に来た際の道案内人のようなあの老人もおらず、森の中をしばしさまようみたいに歩いてゆく。程なく森は尽き、そこからまた、あの平原のようなものが続いているのだ。私はその先にあったと思われるあるすり鉢状の窪地の底へと、前回来た時には降りていったのだったが。だが、しばらくそこら一帯を淡々とした思いで辿り進んでいれば、中年と言うか、ほぼ自分と同じくらいの年代の人物が、前方からこちらに向けて歩いてくる。弱いが、まだ陽が射しているので、その人物の風貌が大体は見て取れる。

　やがて対面する位置にまで近付きあった。お互い歩を止め、自分と向きあった男性は、「やあ」と言い、「そちらはひょっとして森の方からここに来たというか参入したんじゃないですか」と訊くみたいに言う。

私はここ異界で一般人らしい者にようやく出会ったことから何やら安心してしまって、「はい、そうなんです」と、ここに参入した経緯とこれまで起こった出来事について手短に伝えていた。すると彼は、「ああ、なるほど。その老人が、そちらをあのすり鉢状の窪地のある場所に連れて行ったんだね」と言う。それから、眼の前の人物の服装をよく見れば、灰色の作務衣姿である。中振りのリュックを背負っている。彼は自ら(みずか)を神秘行者(しんぴぎょうじゃ)と称して、程なくしてから、

「私は安徳(あんとく)という僧侶名の黄檗宗(おうばく)のボンサンだったけど、でも、禅だけでは飽き足らず、結局修験道や古神道の行法などにも首を突っ込んで、結果こんな生活をするうちにこの異界に関わってしまったのですよ」と、ご自身の実情を述べるのであった。

その人物はそれから、「まあ、それでそちらが出会ったという老人、それはどうやらここ異界のぬしでもあると思う。だからそちらは、その老人の言わば跡継ぎみたいな立場になってしまった訳だね」と実に意外なことを言う。

「そういう実態だから、もう老人はそちらの前にはこれからは現れないと想うよ。でも問題は、そちらはこの異界に存在の一部を置き据えられてもしまったことですよ。だから、やがては娑婆の方の意識が引き寄せられるみたいにしてここの異界に言わば収奪され、半永久的に森の住人、森自体を構成するものになってしまうと思われるね」

安徳さんというお坊さんはそんなことを続けて言う。確かに、自分は、日々多くの雑念に覆われ囚

われてしまっていて、それらを一掃出来ればと単純にあの老人の申し出に応じてしまったところもあったのだが。

「まあ、それは大変困った事でもありますけど、でも、ある意味では大いに意義のある事柄でもあると、少なくとも私は思うのですよ」と、彼は述べるのであった。

実際、それはある程度は事実でもあると。現実にこうして、ここ異界に参入してしまったのも、己の深層心理が願った事でもあるのかもしれないと思う。

「現実にそちらはここ異界にすでにご自分の一部が置かれてしまったので、もうこちらの世界、言うなれば異世界の住人としての存在になってしまいますね。それは時間の問題ですけどね」

「すると、その……、早晩娑婆における肉体の方も消滅してしまう訳なのですか」私は愕然とした思いで訊いてしまっていた。

「まあ、残念ながらそうではないかと思いますね。でも、ある種の必要性において、そちらは一定の年月は、これからも此岸（しがん）にも同時的にい続けるとは想いますけどね、恐らくは……」

それから安徳さんは、「結局、二十一世紀になって精霊の世界から、何人かの精霊がこちらに移住してくるとも想われるのです。これは自分の予想でしかありませんが、年ごとにわずかずつですが精霊界や我々の世界から見ての異界の方から、異形の存在たちが参入してくるものと。ですので、そちらや、また自分のここ異界での体験と活動もきわめて二十一世紀的なものでもあると思うのですよ」

と、いささか説明的に言うのであった。

だが彼の推測では、私はやがては異界の森に囚われてもしまうと。するとそんな自分の想いを感じてか彼は、「ですが、そちらについてのこれから先の事は、それは結局私の予想でしかなく、上手くすればですがその大変困った状況からご自分を解き放つこともできるかと、そんな風に想ったりもしますが」

「そうですか……」私は茫漠とした思いで言っていた。でも、それを実現する方法が現実にあるのであろうか。

「あなたは先程、少々奇妙なお店と関わっていると言われましたよね」

私は、あの小さなスーパーで生活必需品を買ったりしているのだが。私はここに来て起きた出来事の一つとして彼にそれを伝えていたのであったが。それで、それについて更に詳しく、その女が人間の男性と、精霊界の女性との間に生まれた半精霊半人であることをも話していた。もっとも、それが事実かどうかまではさすがに判らないが。

安徳さんは私の話を聞き終えてから、程なくして、「恐らく、その人間と精霊の間に生まれたハイブリッドな女性は、あなたを困窮から救済することができるかと思われますが」

彼はそんな事を言う。あの叡巫という精霊でもある女性には、そういう能力、霊力もあるということなのか。

「とにかく、あなたはこれからもこの異界に土曜日ごとに、あるいはひょっとして就眠時にも訪れるようにもなって徐々にですがこれまでの自我を失っていくと思われます。それでいて、日常の方のご自身もこれからもおよそ数年ほどは表向き娑婆にい続けるかと思われますが。ですが、次第に、ある種希薄な存在になり、終には此岸から消滅してしまうと、少なくとも私はそんな予測をするのですが」

私は彼の予想を聞き、それも案外良いものかとも思った。事実、自分はここ三十年くらいそんな事ばかりを考え、望んできたのでもあるのだったが。でも、やはり、これまでの記憶などを全て失うというのはそれなりに恐ろしい事でもあると感じてくる。

「もう、あなたはあのすり鉢状の窪地の牽引力で、これからは自由意志などほとんど無くなり、そしてやがては肉体ごと消滅してしまうとも想われます。ですが今回だけは私の拙い法力でお助けいたしましょう。でも、それが有効に機能しますのはたった一度だけですので、そこのところをご了承くださいませ。よろしいですか。そういう次第ですので、少なくとも本日はあのすり鉢状の窪地に引き寄せられることはありません。それでは」

そう言ってから、眼前で印を組み真言を唱え始める。私はそんな彼の申し出に、とにかく同意するしかなく、安徳さんの手前で酷く神妙な思いで佇んでしまっていた

およそ十分で彼の真言は終わり、それから我々は二人してそこの平原からまたあの異界の森に向かい、都合四十分ほどか歩いてようやく森の外へと出る。そこは安徳さんがここに参入した入り口でも

あると。とにかくそこで再開の約束を交わして別れ、私はそれから己のスクーターを停めている辺りを探して、どうにか見つけた。

翌日の日曜日の午前中に、叡巫の雑貨店に赴く。

「いらっしゃいませ」と、彼女は笑顔で迎えてくれる。この店で感じるあの特有の安寧が心を静かに緩やかに被ってゆく。

私はこれまで通りに、生活必需品を買う。レトルトのカレーやライス、それにコーヒーなどを。カレーはなかなか栄養のバランスが良い食品であり、これだけあれば取りあえずは事足りると思うのだが。それからレジに行けば、叡巫は計算をしてから、「お客さん。今、何かお困りではないのですか」と少々生真面目な面持ちで言う。確かにそれは事実ではあるのだが。叡巫は、私の現在の処し難い状況を把握しているのか。

それで、どこか仕方ない思いで今の実情について、幾分臆しながらも簡明に伝えていた。すると彼女は、「そうですか。そちら様のご事情は大体ですが把握できました」と言い、それからまた店の隅の方でコーヒーを点て始める。程なくお盆に載せてこちらに持ってきて、レジの近くにある椅子に座ることを勧める。私が二口ほど啜り終えれば、彼女も椅子に座ってから静かに話し始める。「これまでそちら様に申し上げましたように、私は半精霊の半人ですので、そういう属性と事情からどちらの世界にも参入することができるのです。それでこれからお店を閉めて、先週お話しいたしましたよう

に精霊界にある私の家へとご案内をします」

それから彼女は店のシャッターを降ろしだす。私は買った物を携えて、外に出ていた。

彼女は店仕舞いを済ませると、私を近くにある森へと連れて行く。森の始まりのところに、彼女は店で買ったものを置いておくようにと言う。

森は日本では大変多く、そこには現在でも八百万（やおよろず）の神々が棲んでいる。八百万の神々は森以外にも山や川や、そして海にも棲んでいる。つまり無数に近い神々、精霊、それらは自然の神であるが、山や森や川や海に常にその霊威をもって臨在しているのである。

でも、だんだん都市が発達してくるにつれて、そういう異界の存在、神々や精霊が我々人間の構成する社会に現れることは少なくなったのであった。やがて為政者が宗教を活用し、合理的に解釈できないものを排除する流れになり、結果、二十世紀前半の先進国では眼で見える現実しか問題視されない風潮になってしまった。更にまたあの一神教が政治をも支配し動かして、西欧では不可視の次元をゴッド一色で実に永い間に亘って統轄してきたのであった。だが、それでいて不思議というか、二十世紀後半あたりから東洋思想が西欧の先進国でもその素晴らしさが認められて評価されるようにもなり始め、多くの賛同者を得るようにもなったのであった。私はこうして叡巫に連れられ、彼女の言う精霊の世界に参入したのであるが、これも、事によると二十一世紀的な必然でもあるのかもしれないと感じてくる。

そんなことを思いながら、森の中につけられた細い小道を歩く彼女の後を追ううちに、やがて前方に家のようなものがあるのに気がつく。この辺りはかなり自然が豊かになっている。近付けば中振りの大きさの二階建ての北欧風の家である。色は外壁も屋根も水色である。

「これが私の家、住まいなのですよ」

それから叡巫は私に入るように勧める。辺りは広い庭となっており、樹木もあり、また屋根は草が覆うように蔓延っている。さらに、ここにも一つ灰色っぽい堂宇があるのであった。また、その隣にそれよりも小さな細長い形状の白い塔が建っている。

それから彼女についてその家屋に身を入れれば、室内には数個の光る物が天井や壁に明かりのように点っている。だが一般の人工の照明ではないのである。

「これは明かりの精霊さんなのですよ」

叡巫の談では、ここ精霊界では全てがこういう天然のもので成り立っているのであると。お互いが融和をもって共に存在しているのであると言う。

「私は精霊としてここで生まれて、それからこの家でそちら様の世界での時間に換算して二十年ほど過ごしてきたのですよ。それで二十歳を一つの節目として母の勧めもあって、父が遺したお店を経営することになったのです。ですが、これからはわずかずつですが、精霊の世界からあなた方の住む娑婆に精霊たちがひっそりと移り住み生きるという現実が、そう、銀河系宇宙全体の潮汐から起きてく

るとも思うのです」

彼女によると、叡巫の娑婆への関与も、そういう事の先駆けのようなものでもあると。それは、あの安徳という神秘行者も言っていたことではあるが。

「私はもともと完全な精霊ではありませんので、精霊界の正式な住人となることもできず、また、そちら様方の世界で初めから父と暮らす事も現実にはなかなか出来なかったのです。適わなかったとでも申しますか。ですので、結局私と母が精霊界のここで二十年を共に過ごして、父の死を契機に、私はここと娑婆のあのエルフ屋の両方の世界に存在することになったのですよ」彼女はそんな風に、ご自身の実情を説明する。

二人で話をするうちに、二階に至る階段から一匹の猫が降りてくる。白と茶色の混合で毛は長くてヒマラヤンに似ているが、でも、尾は長めで猫にしては全体的に大柄である。ひょっとしてあのロシア猫のサイベリアンかとも思ったが、どうもそれとも違うらしい。

「その猫は精霊界の猫なのですよ。私と同じく、娑婆の猫さんと、それはサイベリアンでしたが、それと精霊界の雌猫とのハイブリッドなのですよ。ですので、そういう事情で、私たちは同居しているのですよ」なるほど、そういった実情なのかと感じた。

「この猫さんは雄で、浩介（こうすけ）さんといいます。私が、エルフ屋の仕事をするのを機に母が精霊界から連れてきたのです。もともとハイブリッドですので、精霊界の許可を得、母が私の伴侶としたのですよ」

「伴侶なのですか……」

「そうなのです。ですので、私は浩介と楽しく、時に助けあったりして、娑婆と関わるこれまでの約四年間の日々を共に生きてきたのですよ。繰り返すようですが私は純然たる精霊ではありませんので、正式に精霊としてここ精霊界に帰属することも今はまだ出来ず、また娑婆においても、一般の存在の形態によって生きることも適わなかったのですよ。残念なことに」

叡巫はいっときだがどこか哀しげな表情を見せる。が、すぐに笑顔を取り戻して、

「ですけれども、こうしてそちら島崎さんと出遇いまして、私自身ひとつの発展の機会が今与えられたと思うのです。私はこれから精霊として生きるか、また、娑婆で人として生きて活動を続けるかという岐路に立っているのです。そういう自分ですが、島崎さんとの出遇いから、少なくともこれまでよりも私自身が、現実的な行動が出来るようでもあるのですよ。つまり、そちら様にお助け頂いてもいるのですよ」

叡巫はそう言ってから、床の猫を抱き上げて私に差し出す。躊躇しながらも、その精霊界の猫とサイベリアンとの雑種を受け取っていた。それは、とても上品な面立ちの猫で、「はじめまして、僕はコウスケいいます」と、多少たどたどしいが人の言葉で喋るのだった。私は驚愕したが、でも、ここは精霊の世界なので、「はい、自分は人間界から来た島崎といいます」と応じていた。

すると、猫は今度は「ニャーアン」とあの猫特有の言葉を発するのであった。

そんな猫と私の遣り取りを見て、叡巫は穏やかな笑みを湛えて、「島崎さん、この椅子にお座りくださいね」と言う。

それでとにかく、私は勧められるままに木製のその椅子に坐った。

「島崎さん、ここの庭に堂宇がありましたでしょう」と言う。

それは、あの法隆寺の夢殿をも思わす建築物である。私は、実際法隆寺に参詣したことはないが、でも、それのミニアチュールされたものとも思われるのだが。

「あれは聖徳太子様が瞑想されたり、実に永く救世観音様が安置されてきた法隆寺の夢殿（ゆめどの）にも似たものですが、そこで、私は休みの日のうちの何時間かは瞑想したりしているのです。堂宇内には一体の仏像が祀られております。これから、一緒に瞑想しません」と言う。それで私は、彼女について堂宇に入っていった。

『五輪建装』の小川は、どうにも同僚の島崎に不可解なものを感じてしまった。彼は、会社の同期であり、自分より六歳も年上だが気心の知れた間柄である。そんな島崎がこの度東北の方に単身赴任して、会社に報告などのために、ここ田無の西東京支社に現れたのであるが。向こうの生活などについて訊けば、まあどうにかと、言葉少なく語る。無論、同僚の社内では最も親しい自分を忘れた訳ではないらしいが。

だが、彼の様子がどうにも気に掛かったのでその日誘うみたいにして、西武線野方駅前の居酒屋に連れて行ったのだった。その店で取りあえず二人でビールを酌み交わした。

小川は島崎のことを日頃からうらやましく思っていた。小川自身は大学でドイツ文学を専攻し、若い頃にはゆくゆくは作家になりたいという希望をも抱いていたが、またあれはなかなか根気が要るものでもあり、三十代になってからはそういう気持もなくなってしまった。だが、同時期入社の島崎がホラー系という分野で出版しており、ほかにも地方文学賞の佳作になったりしている。小川はもう結婚十年目であり、子供のいない妻との二人暮らしだが、でも、やはりそこは浮世のしがらみなどがあり、一方島崎は仕事が終われば後は自分の好きな文芸に没入できるのである。そんな彼の生活が小川はとてもうらやましいのであったが。もっとも、かつて取り組んだことのある文芸創作というものは、それは大変な根気と労力を費やすものでもあるのだ。だから案外、あれは創作者よりも読み手や編集者の方が愉しさという点においては勝っていると小川は感じているのであるが……。

「どう、あちらでの生活は。何でも会社がワンルームのマンションをあてがってくれたとか。それで島崎さんの生活に、何か得るものがあったかと思うんだけど」と、彼の実情を推し量るみたいにして尋ねれば、「ああ、まあ、何とか仕事はそれなりに遣ってはいるけど。でも、S市支社の係長の山村さんという方が、あんまり気を入れて仕事をしなくてもいいからと親切に言ってくれるので。そんな訳で程々は仕事をしているけど。でも土、日は休みだから会社が持ってきてくれたスクーターに乗っ

て隣の県との境にある森にまで行ったりもしているんだけど」とそこまで言い、いっとき言葉を切ってから、「でも、そこで自分が長年思ってきたことが、曲がりなりにも実現したみたいで」と言う。小川は、そんな島崎の対応に多少なりとも不可解なものをも感じてしまったのだったが、あまり突っ込んだ実情を訊く訳にもいかず、とにかく彼は彼なりにそこの現場で上手く遣っているのだとの感を抱いたのであったが。

S市から四日の予定で帰京して、これまでの仕事の経緯について会社に報告をした。それから、また、作品を書くための資料などを旅行鞄に入れて、再びM郡の現場に戻った。社内で昔から一番親しくてしている信頼できる同僚の小川に、東北での仕事について訊かれたが、でも、あの特異な体験はどうにも他人様に話せる事ではないのである。

私はあれから叡巫の家に誘われ、ハイブリッドの猫などにも引き合わされ、またそこの庭にある堂宇でしばし瞑想して夕方までそこで過ごした。精霊の世界でも日が暮れ始めたのでそこからまた彼女に導かれるようにして、黄昏迫る娑婆の森にと帰還したのであった。

森の手前には、自分がエルフ屋で買った食料品などを入れた手提げ袋が置かれていた。ここの地には、泥棒など悪しき者たちが住み着くことがないのだと感じた。

それから二日後の火曜日の午後に新幹線で東京に帰り、自分の中野区のアパートで眠り、翌水曜日

に田無駅前にある会社にと赴く。一通りの業務に関しての実情を伝えて、その折小川がいたので、彼の申し出に従って夕方から一緒に居酒屋で二時間ほど過ごした。だが、結局、自分のあの特異過ぎる体験を彼に伝えることなど到底できず、差し障りのない事柄だけを話した。

そうして金曜日になったので、午後に新幹線に乗ってまたS市にと向かった。S駅からSI線に乗り換えて、ある小さな駅で降りる。割と大きな漁業で栄えた市のI駅の手前の小さなT駅である。もう夜である。そこから徒歩で大体十数分ほど歩けば、現在自分が居住しているあの古いマンションに着くのだが。この辺りは家屋も少なく夜も結構晩いので、暗い情景の中を独り歩いていく。

と、道の向こうに虚無僧姿の人が立っている。するとこちらに近付いてきて、「どうも、安徳です」と言い、深編笠を取る。街灯の元で見れば、確かにあのお坊さんの安徳さんらしいのである。私は何だか嬉しくなってしまい、とにかく彼を自分の借りているマンションに連れて行くことにした。また、以前あの異界では己の名前を告げてはいなかったので島崎という名であることを伝えていた。

マンションの一室の照明の中で彼の外貌を眺めれば、お坊さんらしい穏和な面立ちである。前回はあの異界での対面であったことから、どこか漠然としてしか彼の雰囲気を感じ取ることは出来なかったのだったが。私は早速コーヒーを点てて、彼に振舞い自分も飲む。

それからおもむろに安徳さんは口を開き、「実はあれから、私はあの異界を色々と探索したのです」と言い、そこの実情を明かすのであった。

それによると、あの異界の森は、やはり私が出遭ってしまった老人が言うように太古の神々が漂着して、永く棲息し続けてきた特殊な場所なのであるのだと。だからあそこの一帯は、神々そのものにもなっているらしいと。また、あのすり鉢状の窪地に至るまでの平原一帯や更にそこから先はもう通常のM郡の土地ではなく、全く別の異次元の世界なのであると推察されていた。ちなみに彼は、もともと禅宗の黄檗宗のお坊さんであることから、M県にある黄檗宗のお寺の御住職が友人で、そこに居住しながら、異界の探訪などをしているのであると。

「まあ、己なりの行法をもって、神秘を体験、いな体現しているのですよ」と言う。

彼が現在でも一応まだ所属している黄檗宗は、もともとは中国の明の高僧の隠元が京都に寺を建立して弘めた宗派なのである。仏教や禅は中国や朝鮮を経由して極東の国の日本に渡ってきたのだが、その中でも黄檗は中国の民族宗教である道教との縁が最も深く、浄土真宗のように阿弥陀如来一辺倒ではなく、幅広く中国の古来の土着神などをも取り入れており、また独特の巫術色があるのである。もっとも、大乗仏教自体がヒンドゥー教やその前の段階のバラモン教の土着神をもその教義に取り込んできているのでもあるが。

が、それから安徳さんは、「私はM県の友人のお寺に居住しながら、山や森などを歩き廻って神秘的な事柄を探しているのですよ。維新前までにはほぼ日常的に異界と我々の娑婆との交流があったと思うのですが、近代化がどんどん促進されてからは、そういうことはほとんどなくなってしまったの

でした。でも、二十一世紀になりましてからあのアセンション・次元上昇が喧伝され、〝幽体離脱〟などがかなり一般化もしてきまして、これは事によると近世の状況と似ているのかとも思うのです。あの時代期は、そういうものが割と通常のものとして捉えられてもいたのですが、とりわけ維新以降は西欧化が過剰に推し進められて、西欧の先進国特有の合理主義が中心に据えられてしまったのでした。ですが、神隠しなどの怪異な出来事も、時々ですが平成の昨今でもあると思われます。まあ、それは、こちら側の人間が異界の方に関わるというものなのですが」

そこまで述べると、安徳さんは多少声を潜めるようにして、「これはあまり言わない方がよろしいのですが、私はあの東日本大震災が起きたことによって、顕界と異界との境目（さかいめ）というかそこの障壁が壊れてしまって、その結果で島崎さんも私もそれ以前にはなかなか参入出来がたい異界との関わりが実現できたと思われるのですが」と言う。

私は、確かにそれはある程度だが事実であると感じた。また、これまでの既存の価値観やら世界観などの一部が昨今では瓦解し始め、代わりに何か新しいものが我々の住み生きる娑婆にも密やかに、どこか自然に構築されていくとも想われるのである。それに明日は土曜日でもある。私は、うっかりというかあの森の堂宇が建つ場所で出遭（であ）った老人の申し出に同意してしまい、それからあの大きなすり鉢状の窪地の中に建立された機前の社の中で禅定をしたのであった。それは確か先々週の事であったと想うのだが。そこからの記憶が途切れていて、気がつけば自分の住居であるマンションに向けて

スクーターを走らせていたのであった。明日のことを考えて安徳さんにその時の実情を伝えていた。先週には彼の法力でそこへと引き寄せられることはなかったのだったが。

「島崎さん、前回申し上げたのですが、あの折には、何とか私の法力でそちらをお助けしたのですが、もうこれからは無理ですね。後は、そう、ご自身の力量でこの窮地を切り抜けてくださいね」と言い、「ですが、島崎さんはエルフ屋という雑貨店を営む精霊と人間の合いの子のような存在、まあハイブリッドですが、その女性の協力でどうにか異界にあるその機前の社の牽引力を断ち切ることが出来るものと私は予想するのですが」と述べられるのであった。

なるほど、そうなのかという思いが過った。仕事でここ東北に来、あのM郡と隣県との境の森で老人と出遭い、結果あの底の深い窪地にある機前の社へと赴きその中で禅定をしたのであるが。また比較的近くにあるエルフ屋で、叡巫という精霊と人間との間に生まれたというハイブリッドの女性と知り合い、しかも、その彼女の住む精霊界の家に招かれ、そこにあるあたかも法隆寺の夢殿を思わす堂宇で瞑想をしたのである。

だが、現実に、彼女にその力があるというのか。が、問題は明日である。私は、スクーターでここに来てからは毎土曜日にあの県境にある森へと赴き、あの老人と約束めいたものをしてしまったので、これからは、徐々にだが意識が今までの自分ではなくなっていくらしいと。そうすると、全くの別人になるというのか。自分は、決して理想ではなかった己の人生でのこれまでの記憶がなくなればそれ

でよいと、雑念がなくなりもう少し幸福になることも出来るのではないのかと実に短絡的に、安易にも受け止めてしまったのであったが。しかし、よくよく考えてみれば、それは恐ろしいことでもあるのだった。もっとも、無意識の領域においてそれを望んでいたのかもしれないが。

そんな気持を手短に安徳さんに伝えれば、「そうですね。私の予想と推察ではあの異界の森には古い、それこそ旧石器時代、古代よりも前の太古からの精霊が棲んでいると想われます。『記紀』が編纂される以前の、いな、中国から道教が伝わる前の縄文期よりも昔の、そういう時代期の精霊、神々があの東北の森に、恐らくですが流れ着いたのであると、そんな風にも考えているのですが。でもそれらは永い、とてつもなく永い間、東北などの中央から離れた地方の森に潜んでもいた訳ですが、でも、だんだんそういう地方の土地にも開発の手が伸びて、それで、あそこは異界と森が重複するような一帯とも思われるのですが、何か、二十一世紀も十数年以上過ぎた今、新たなる形態で私たち娑婆への顕現をも模索しているというか、私はそんなことをも思うのですよ」と、ご自身の意見を述べられる。

確かに、そういう事実はあるのかと思った。それに自分はすでにもうあの叡巫という半精霊半人である存在とも出遇い、精霊界の彼女の家にまで行き、庭にある八角円堂の堂宇で短い時間だが瞑想をしたのである。私が彼女と堂宇に入れば、そこではかなり背丈のある観音菩薩とも思われる立像が祀られていたのであった。全体的な色は濃い茶色であり、それはまるで法隆寺を模しているみたいにあの救世観音（ぐぜかんのん）に似てもいたが、百済観音（くだらかんのん）をも思わせるものでもあった。首の後ろには後光を表す光背

が取り付けられていた。その折に彼女は、「これは家や堂宇と同じく私の母が創り上げたものなのですよ。今はもう母はこの精霊界のここの自分が暮らす地にはおりません。それで、私が寂しくないようにと、ここにこの仏像、精霊界の観音像ともいえますが、これを創って置いていったのです」と言っていた。

私はその時そんな叡巫の言葉に堂宇の中で、それではそちら様の母君（ははぎみ）はもう亡くなられてしまったのですかと、少々間の抜けたみたいな対応をしてしまっていた。すると、「いえ、ここ精霊界では大体二十歳を区切りに、めいめいが独立するという慣わしがあるのですよ。勿論、必要最低限の条件は与えられますが。また、精霊の世界、社会では、個々の精霊の魂の自由性をとても尊重するのであります。私の母はもう精霊界の別の世界にと行き、そこで彼女なりの生を過ごしていますので、これから私と再び会うということは、少なくとも精霊界のここの一帯や顕界ではありません。ですが、母が創り上げました観音像には、母の魂と霊威が封じ込まれているのですよ。ですので、私は毎日あの堂宇で瞑想して、母との心と心の対話をしているのです」と叡巫はそんな風にご自身の事情を語り伝えるのであった。また、その堂宇での瞑想で、日々、我々の世界の安寧をも祈願しているのでもあると。

しばし彼女とのことを想起してしまったが、それはそれとして、明日は土曜日なので一体どういう展開になるかである。考えてみれば、スクーターで現実にあの森に向かわなければ、少なくともあの窪地に呼び寄せられることはないとは思うのだが。

そんな己の気持を安徳さんに伝えれば、「いゃあ、それは無理でありましょう。恐らくですが、それを実行したとしても、もう別自己のような存在がそちらの肉体を動かし、やがてはあの森まで運んでしまうでしょう。赴かせてしまうとでも申しますか。つまり、もう意識の変容が始まってしまっているのですよ。ですが善後策が必要な訳でして、それで先程申し上げましたように、その精霊と人間の合いの子であるという女性の存在にご協力をお願いされては」と言う。

安徳さんはそれから、すでにあの森があなたを捕まえてしまったので、夢においてもあなたを呼び寄せてしまうと言う。ですので、とにかく今夜はひたすら瞑想をされるようにと言い、コーヒーのお礼と、大変おいしいですねとの賛辞を述べられてから帰られるのであった。

私は彼の言った通り、とにかく瞑想をして十一時過ぎに寝床に就いた。

翌朝、やはり私はスクーターに乗ってあの森へと向かっていた。だが、まだ普段の日常の自我意識はかろうじてだが残っていて、それでしばし森の手前に佇んでいた。しかし、程なく、心のある部分が己を動かし始めて、やがて森の中へと向かっていく。そして、小道を辿り続けて、堂宇のある広場に着く。

扉は、今日はひとりでに開く……。そこにはやはりというか全く掛け軸ではない三つの頭を持つ弁財天の神像が、少し奥の壁から離れた位置に佇み臨在している。私はすぐに合掌して、弁財天の真言を唱える。すると、その太古インドの精霊であった大河の女神は、「また私を敬い拝んでくれてあり

がとう。もう、あなたは、ここの森の住人になってしまいました」という言葉を伝えてくる。

私は、そんな弁財天が言った事を今現在では、それを望んではいないと思った。うっかり長年抱いてきた厭世観から、自己の本心とは裏腹にあの老人にこれまでの自分の記憶が消滅することを願ってしまっていたのでもあった。でも、最早全てが手遅れなのか。私は眼の前の弁財天の亜形でもあるその有機的ですらもある神像に、「あのっ――、私は本当は以前にここで老人に申しましたようなこれまでの自分の意識が変容して、消えてしまうという類いのことを望んでいた訳でもないのです。その……、これまで全くと言っていいくらいに人生で良いことはなかったので、それで、老荘思想じゃないですが、娑婆の諸々の労苦から心が解放されて、虚無に同化できれば幸いであるといつも考えていて、それでうっかりあの老人の誘いに乗ってしまったのでした。ですので、今現在は、もうそれは望んではいないのです。そういう次第ですので、できましたら、自我意識を取り戻すといいますか、心を消滅などさせたくはないのですが」と思わず――、まるで一気に叫ぶみたいにして言ってしまっていたのだった。

すると、眼の前の神像はしばしの沈黙の後、程なく、「そうですか。一応あなたのお気持は分かりました。でも、物事の決定には、必ずその結果をよくよく考慮する必要があるものです。ここは多くの神々が流れ着いた森で、通常の森と違ってとりわけ異界との関わりが深くて、太古からの主（おも）に男の神々が集（つど）った土地でもあるのですが、そういう八百万（やおよろず）の神々の霊威が森全体に浸透して、ある集合的

な霊力のようなものを創り上げてしまったのでした。ですので、もうあなたは約束をしてしまったので、それを破棄、あるいは取り消すというのは不可能ですね。すでにあなたは、あの窪地の機前の社で禅定をしています。それによってこの森、これは流れ着いた神々の村落でもあるのですが、これ自体が一つの生命体となっていて、それとの約束があり、結果それに抗うことは今となっては出来ないのですよ」と穏やかな女性の声で言い伝えてくる。

私は弁財天の言葉に、愕然としてしまった。自分は、思えば、これまでの人生での節目に今ひとつ、慎重さに欠けていたと思った。それが災いしてか、理想とかけ離れた人生を歩む羽目になってしまったと。

弁財天は、それは三つの頭でいずれも蛇であるので表情は感じ取れないが、でも、穏和でありどこか自分の気持を受け止めてくれているという印象を受けてしまう。すると、まさしく生きていると感じるその神像は、「ですが、唯一方法があります。あなたがこれからM郡に逗留している間に、何か重いものを自らで作り上げましたならば、それにより、うっかり交わしてしまった約束を無とすることが出来るかもしれませんが」と言う。

「その……、それは可能なのでしょうか」私のそんな問いに、「まあ、分かりませんが。ですがそうすることで、その実現の可能性があるのかもしれませんね。また、あなたにしてみれば、不幸にも出遭ったみたいな老人はとんでもない存在であると思えるのかもしれませんが、ですが彼にしても特に悪意

があったわけでは全くないのです。あの存在も、結局はここの森を構成する一要素でしかなく、たまたまここに参入してしまったあなたが望んでいることを言わば提示するにある種妥当な対象であったのですよ。こう言いましては失礼かもしれませんが、あなたの深層心理が呼び寄せた存在、またその結果とでもいいますか」

私は、ある学者が日本の神々というものについて、それは本来人格神的なものではなく、流動するエネルギー的なものであり、善、悪の両方をも併せ持っていて、秩序だったところは善と捉えられ、一方秩序が乱れてしまった際にはそれは悪、禍神（まがつかみ）、ネガティヴなものと捉え解釈されるものであるが、どちらも神々の属性でありそれそのものでもあると論じられていた。だから古神道の行者や神主様は祝詞を上げる際に、その霊威全体がより秩序だった状態になることを祈願しているのであると。すると自分は、そのネガティヴな側面を選んでもしまったのか。

弁財天は私のそんな思いを感じ取ったのか、「確かに、あの老人は悪ではないのですが、あなたの切なる願いを単純に聞き取ってもしまったのです。その時点においては、それはまぎれもなくあなたの願いでもあったわけなのです。八百万（やおよろず）の究極はともかく、神々自体は賢者、覚者のような高邁（こうまい）な精神や透徹した判断力を持ってはいません。勿論最も優れた八百万の領域は違いますが。そんな事情から奈良時代に始まった神仏習合は、大乗仏教における仏教理念などの方にそういう側面の良さなどを、当時の学者が見出したことによるとも思われるのですが。また人頭蛇身の宇賀神（うがじん）は、大乗仏教に取り

入れられたインドからの渡来神であるサラスヴァティーと習合して宇賀弁財天ともなったのです」

弁財天は私に、ここの森の実情を丁寧に説明してくれる。だが、問題は現在の自分の苦境をどうするかなのである。すると、弁財天の手前で佇む自分の中の意識の一部が、あの窪地に向かっていくのを感じてくる。そしてそれは、弁財天に今ここで体面している私とは別の存在でありながら、同時に自分でもあるという思いをも感じさせるのであった。

「どうやら私の見たところでは、あなたの意識を構成する一部分がもうあの機前の社（やしろ）に囚われてしまっていて、毎土曜日ごとに社に顕在意識の思いとは裏腹に、執着をして向かっていきます。それでありますから、あと数回であなたのその意識は〝虚無〟に同化していき、やがては意識の内の魂そのものがあの窪地の最も下方にある、まだあなたが参詣したことのない社に祀られる神々の一つとなると予想されます。そうなりますともうここ異界の森にあなたの意識は、それこそ何千年も留まることになると」

私は弁財天のその言葉に驚愕さえしたが、一方ではそういうことで案外得がたい悟りを得ることができるものかとも思った。結局、それは心そのものが虚無となることなので、世俗の苦しみから解放され、事によると輪廻をも超克（ちょうこく）できるものであるかと。だから、ここに佇む、まだ顕在意識とのつながりがある自分はそれを望んではいないのだが、でも、やはり別自己的な己はそれを願っていると、そんな風に実に錯綜的にも感じてくるのであった。

「とにかくあなたはこれから、ここM郡での仕事を終えるまでの間に何か助力をしてくれる存在からの支援で、この直面している問題の解決を図られてはいかがですか」と言う。

私は自分に好意的でもある弁財天に次第に親しみをも感じてくるのであった。が、それでも、己の意識がだんだんと何か渾沌とし出してもくる……。

「私はここの異界の森の堂宇に祀られる神像となってから、娑婆から実にまれにですが参入する人たちがいて、それで何か問題が発生してしまったことで窮地に追い込まれた方には手助けなどをしてきました。そんな私ですので、どうにか、ここからあなたを解放して差し上げたいとも思うのですが」

私はそんなやさしい弁財天の言葉に思わず落涙しそうにもなって、「あのっ――、そうでしたら、自分はその機前というか、その状況になることを避けることが出来ますのでしょうか」と、叫ぶみたいに言ってしまっていた。

私の哀願するような口調に、三つの内の中心であるらしい一番大きい真ん中の蛇頭はその表情にどこか沈痛めいたものをも浮かべるようにし、少々私の方に最早ホログラムなどではなくまさに神々そのものである蛇の頭を伸ばし気味にし、「そうですね。それはあなたご自身がこれから展開をする現実を上手く受け止め、丁寧に流れに乗ることです。そして何か幸運があったら、それをしっかり活用することですね」

弁財天がそこまで言うと、急に自分の今の意識に何かが重複する感覚が起こって、それで先程まで

の酷く渾沌とした状況が緩和されたのでもあった。穏やかな融和に似るものをも感じて、弁財天に一礼をする。すると静かに弁財天の神像はまた堂宇の壁際に引き戻され、私も堂宇の外にゆっくりと歩き出て、扉は自動的に閉じていく。私はその折、身軽なものを感じて、あまり抵抗もなくその森を後にしたのであった。それからスクーターを停めていた森の始まりの辺りに着いて、そこから自分の住居にと向かった。何か、あの老人と一緒に窪地の中の社に赴いた時からの就縛が多少だが軽くなったとも感じる。

その夜は、またマンションの一室で原稿を書き、それから夜の瞑想をして寝床に就いた。

翌日の日曜日の午前中に、私はまた叡巫のエルフ屋に赴く。

店に入れば、中年の男性が二人店内にいるのである。私くらいの年代である。食料品などを購入している。この店には食料品のほかにも生活雑貨品なども陳列されている。恐らく近隣の方と思われる。そのうちの一人が、「あの、つかぬ事をお伺いいたしますが、そちら様はここから比較的ですが近いところにある古いマンションに最近越されてきた方では」と言う。それは事実であるので、「はい、そうですが」と言うと、「その……、あとで少しお話が」と、少々声を潜めて言う。それで自分は「はい、分かりました」と応じていた。

そのうち商品の補充のためなのか店の奥に居たらしい叡巫が姿を現して、「いらっしゃいませー」と、いつもの愛想の好い声を掛ける。

先週は、叡巫に連れられてあの庭にある堂宇で瞑想をしたのであったが。今日は彼女からの誘いはなさそうなので、軽く挨拶して「先週はどうも」と伝え述べ、必要な物を買って店を後にして、それから先程の人物と戸外で話をする運びとなったのであった。

彼は、実は私の住んでいるマンション『サンライズハウス』に居住しているのであると。更にエルフ屋で買い物をしていた彼とは別の人物も同じマンションに住んでいるのであるらしい。そういえば山村氏は、あの古いマンションには私以外に二人の居住者がいると言っていたが。私は立ち話もなんなので、とにかく自分の借りている部屋へと誘う。

この地で生活をしている一室に招き入れ、コーヒーを点てて彼に差し出すと、一口飲んでから、程なくその人物はまず自分が谷山という名前で、以前はS市の近郊で長年小さな電気屋を営んでいたことを話すのであった。だが、借金などの困った問題に直面して、挙句数年前に自分の家からかなり遠いあの私が見つけたみたいな三頭弁財天の堂宇のあるあの異界の森の中で首をくくってしまったのであったと。だが、不思議なことに死んでしまったはずの彼は、またその森で静かに生者として目覚めたのであったと。

「そうなんですよ。それで私は、以来あの森から離れたこのマンションで暮らしているわけです。確かに、死んでしまったはずなのですが、なぜか甦ったみたいに言わば再生、復活をして、それからは仕事に就いて、日々を生活するに必要な最低限の賃金だけは得ることが出来たのですよ」

「あの……、仕事といいますと？」私が一度は死んだという彼の職について混乱しながらも尋ねれば、多少言いにくそうな素振りを見せながら、「いえ、気恥ずかしいんですが、その……墓守なんですよ。ここらあたりは昔集落がありまして、ですが現在では倉庫がいくらか建っているくらいで、家屋もほとんどが壊されています。あの震災の影響を蒙りましてね。それで、粗方昔からの古い家も無くなり、そういう事情で私はここの土地に昔から葬られた死人の鎮魂のために、もうかつての村の人々がおりませんので代わりに墓守をしているのですよ」と言う。つまりそういう仕事をしていて、それで給金が入るのであるらしいのであると。

どうにも解せない話とも感じた。それにその給金は一体誰が支払っているのか。役所なのか。あるいはこの一帯の昔からの地主の方が、代表として彼に支払っているとでもいうのか。でも、あまり詮索することに意義はなさそうでもあると感じる。すでに自分が関わっているこの土地の何割かがもう異界であるらしいと、そんな風に感じてもくる。最早全てを合理的に解釈などできず、また一方ではそれでよいのでもあるとさえ思ってしまうのであった。

彼の実情を聞いてから、私は自分が仕事でここの地に来たことを話していた。また、あの雑貨店のエルフ屋について少しだけ触れると、谷山氏は、「そうですね、あれはここらで唯一の雑貨店ですし。私があの県境にある森で死んで、甦ったみたいにまた娑婆で活動している今から三年ほど前からあの店はありましたね。店員はずっとさっきいた若い女性だけですが、多少奇異ではありますよね。ああ

いう類いの店をこういう過疎地で一人で営業するのは、やはり男性であることが望ましいと思うのですが」と言う。どうやら、彼は叡巫の実情は知らないらしい。だが、それにしても、ここに来てから全てが信じられないというか、通常の認識では理解しがたい事ばかりである。しかし、それでいて、今ではもうそれらは、自然と日常的なものにもなってしまっているのである。不思議と……。

が、私は、もう一人の人物がこのマンションの居住者であるということが気になってしまって、「あの、このマンションに住んでいる別の方ですが、その人はまだ壮年みたいなので、会社にでも勤めているんでしょうか?」と訊いてしまっていた。でも、ここの近辺に会社のようなものはなく、遠いところであればバイクや車が必要であるが、マンションの付近にそれらを見ることは出来なかった。バスの便もここいらはかなりまばらであるようでもあるし。

「いゃあ、あの人は」と言い、それから谷山氏は声を潜めて、「実はその……精霊らしいんですよ」と言う。そんなことを聞けば、一般の男女であれば、激しい動揺をするはずなのだが、こういう状況にもなっているので、さほどの違和感はもうなかったが……。

彼の談では、その人物は精霊であるらしいと。だから、我々一般人のように生活のための仕事をする必要性はないらしいのだと。でも、どうして谷山氏はそう断言できるのだろうかと、多少ならずとも疑問に思った。そんな己の疑念を控えめに告げれば、急に前よりも物堅い面持ちをし、「はい。それは一度死んで復活しましてから、ある種の知覚と申しますか、霊感が発達し始めまして、その結果

以前と比べて霊的世界の洞察なりが出来るようにもなったのであります。知覚状態が進化をしてきたとでもいいますか。ですので、私はあの彼が精霊の世界から言わば移住してきたらしいという事が察知できるのです」

谷山氏の説は、なかなかにわかには信じ難いことでもあったが、しかしこれはもう自分自身が直面している現実でもあるとの感が強まってくるのであった。

それから谷山氏は、これからはわずかずつではあるが精霊界の住人がこちらの世界に移住してくると言う。だがそれは、彼の予想では、あまり問題はないものでもあるのだと。

「私はここM県のS市にあるT学院大学で歴史学などを専攻しましたが、例えば新大陸にイギリスから移住者が来て、それを発端としてネイティヴの男女が祖先から受け継いできた大切な大地を奪い尽くし、挙句大量殺人までしたわけです。また、白人どもはアジア諸国やオーストラリア大陸でもその土地を奪い、略奪したわけです。キリスト教化という名目で宗教と武力が合体して、やりたい放題のことをしたのであります。オーストラリアでは、土着のアボリジニーの女性が何の忌憚（きたん）もなく性の玩具（がんぐ）にされてしまったといいます。また、エスキモーと出会った時に白人らは彼らを人間とは到底みなさずに平気で殺し、更にその骨を標本として持ち帰ったりもしたのでした。珍奇なオモシロイ物として。これもキリスト教徒以外は全く人間ではないというおぞましく愚かで実に恐ろしい思想がその根底に頑迷なまでに根付いていることによるものであります。ですので、移民というのはこれまでの

世界の歴史から捉えれば、西欧の連中の場合はほとんどが侵略というか、そこに先祖の代から定住していた人々に甚大すぎるまでの被害を及ぼして、大切にしているものを奪い壊して、そうして神・ゴッドの名の許に平気で殺人をも行うというものでしたが、私の推察では精霊界からの関与はそれとは大きく異なり、共に調和のある平和な世界を作り、創ることを模索、志向するものであります。ですから精霊が私たちの娑婆に関わっても、ひっそりと目立つことなくその土地などに定住して、人々にささやかな幸福を与えるものであると、私はそんな風に想うのであります」と、谷山氏は言う。

確かにそれは全く事実である。キリスト教の信徒の数知れないほどのおぞましい所業は言語道断のものである。一方精霊は古代から時折だが我々の娑婆に関与してきている。だが、異界の存在などと同じく近代化が進むにつれ、あまりこちらの世界にその姿を現すことがなくなってしまったのだが、二十一世紀の地球が新しい領域に参入しようとしている今、異界や精霊界も娑婆、こちらから見てのここ顕界に関与することを願ってもいると、そんなことを感じてしまうのである。現に、私はあの精霊と人間との合いの子である女性と知り合い、精霊界にある彼女の家にも招待されたのであった。それは、どこか穏和でささやかな交流であると思われるが、同様のことが今惑星規模で、世界中の随所で行われ始めてもいるのではと想ってしまう。それは主にアジア諸国などにおいてと。

それから、谷山氏は二杯目のコーヒーを飲み、最後に律儀にも私に向けて手を合わせ、「明日がいい日であると良いですね」と言い帰っていった。なるほど、それは人のみならず精霊、神々、そして

万物の願いであると思った。

来臨

この地に来てから、かれこれ一ヵ月が過ぎた。今週はゴールデンウィークだが、ここは市街地ではないので、通常通りに土曜から土曜まで施工が行われる。三棟の家は日々出来つつある。ここを訪れた当初から気になってもいたのだが、一体誰がここに住むのか。不動産業者や建築会社がわざわざこんなところに建てても買う人がいるとはあまり考えられず、三棟であることから三世帯主の依頼であると思われるが。だが、とにかく、これからは時々だがこの現場に依頼主が現れるとは想うが。

仕事明けから四日目の夜、マンションに帰り着いてから夕食を摂り、少し原稿を書き、瞑想をする。瞑想は、それこそ二十数年前から習慣的に行(おこな)っている。神秘学に関心があることから、勢い生活に取り入れるようになったのであるが。

それから夜も十時を過ぎたので、寝床に就く。

……私は、あの窪地の手前にいる。すると、それは夢の時空の中の意識であるのだが、そこを降りだし、やがてあの途中にある堂宇にと向かっていく。そこにはあの怪異な仏像がある。しかも前回までと比べて、有機的なものすらも感じる。私はそこで合掌し、更にそこから下方にあるあの機前の社にと向かっていく。

早朝眼が覚め、夢で見た事柄を思い起こす。私はまた、あの機前の社にと向かっていったのであった。そこから先の記憶は定かではないのだが……。

気が付いたのだが、だんだんとこれまでの記憶が曖昧になってきているのである。やはり、あの社の影響であるのかと……。すると、ここでの仕事を終えるまでの間に、己の心は何か別のものに変換されてしまうのか。確かにそれは望んだことではあるのだったが、しかし、現実にこれまでの自分の記憶や意識が消滅してしまうことに、もう今では怖れさえも感じる。異界の森の中の堂宇で祀られている三頭弁財天は、助力してくれる存在からの支援を仰いでこの状況を克服することができるのではと言っていたが。それはあのエルフ屋の叡巫であるのか。私はそんなことを思い、その日仕事を終えてから、そのままスクーターでエルフ屋に向かう。もう夜になっている。今日は、妙に仕事が長くなってしまったのだった。

の手前に来れば、お店には照明が点っている。ゆっくりと入れば叡巫があの柔らかな笑みで迎えてくれる。「いらっしゃいませー」と挨拶し、「今日は晩くに来られましたね」と言う。

私は取りあえず数種の食品を買い、レジで計算が終わってから、多少ためらいながらも、「あの……、少しお話があるのですが」と言えば、叡巫は「はい、大体ですが分かりますよ」と生真面目な表情で応じてくれる。彼女は、私のかなり困った今の実情を把握しているのかと思った。考えてみれば、エルフ屋は普段六時に閉店だが、本日はどうしてか六時半を回った今でも開いているのである。ひょっ

としてだが、今日私がここに来ることを予想してでもいたのか。

「どうぞ」と椅子を持ってきて座るように言う。それからまた親切にも狭い台所でコーヒーを点て、私に勧める。それでお礼を述べて少し飲み、それから手短に己の困窮した状況について説明していた。叡巫は私が一通りの事を伝え終えると程なく、「そうでしたか。それは確かに困ったことですね。でも、どうにか解決は出来るかと思われますが」と言う。それから、「まず、その機前の社ですが、あなたは昨夜から、そこへと夢の時空において、自分の意思ではなく引き寄せられるみたいに参入してしまうようになったのですね」

「はい、そうなのですが」

「では、本日これから私の家へと参りましょう」

私は彼女の誘いで、心が沈静されたみたいになった。コーヒーの残りを飲み終えて、外に出、店のシャッターを下ろすまで待ち、それから一緒に精霊界にある叡巫の家に赴く。店から三分ほど歩いて森の中に入る。もう夜で辺りは暗いが、彼女の後に付いていけば、やがて前方に幽かに明かりが見え始め、叡巫の住んでいる北欧風の家に着く。庭園の上ではあの光の精霊が二つ浮遊している。この世界での照明であるらしい。

「どうぞお入りください」との言葉に、私はやや放心気味の思いで家にと入った。中ではあの光の精霊が四つ、中空に浮かぶようにして室内を照らしている。「光さんありがとう」と叡巫は声を掛ける。

私はその有様に、彼女はほかの精霊存在をとても尊重しているのだとの感を強くした。すると、二階から猫があの特有の軽やかな動作をもって降りてくる。

「いらっしゃい島崎さん」と挨拶して、いっとき二本足で立って、会釈するみたいに頭を下げ、そしてまた四本足で佇む。穏和な気を淡々と放っている。この世界は全てが穏やかであると感じた。叡巫は私にテーブルの前に置かれた椅子に座らせて、取っ手の付いた大きな水の入ったガラス容器を携えてきて、やや大振りの透明のコップに注いで私に勧める。精霊界の水は、大変おいしく感じた。私が一息ついてから、叡巫は、「それで、そちら様が今直面している問題ですが、それをどう解決するかですね。でも……」それから叡巫は私を見つめるようにして、「あの、こんなことをお尋ねして失礼かもしれませんが、なぜに、あなたはその異界のご老人にご自分がこれまでの全ての記憶が消滅してしまうことを望んでいるというようなことを伝え、またそうなるという機前の社に入って禅定をされたのですか。いえ、されてしまったのですか」

私は一瞬彼女の言葉に戸惑ってもしまったが、意を決するような思いで言っていた。

「それは……、自分は誕生以来全く良いことなんかありませんでしたので。それでも中年というか四十代になってからは細々とマイナーな形態で小説など発表し、出版もどうにか実現できたのですが。でも、もう五十近いので上手く娑婆から消滅できればと、ここ一年くらいはいつも思っていて、そんな折にその老人と異界の森で出遭ってしまいまして。それでまあ、お話しした次第になったのですよ。

ですが、その機前の社で禅定してから、やはりこれまでの記憶を全てなくしてしまうのは恐ろしいことでもあると感じて、その……、何とか、それを取り消せないかと思いまして」と言っていた。

私のそういう実情と思いを聞き終えると彼女は、「そうですか、それはお困りですね。ですけれども、それを仮にですが取り消すというか、もうそこの社に赴くことをなくしてその約束から解放されたとしても、それではこれまでと変わりなくあなたはまた以前からの制約を受けてしまうのではありませんか」と言う。確かに、それは事実ではあると感じるが……。

「まあ、私も精霊界からこちらに来て、一人でエルフ屋を取り回して、後になってからもう少しああすればよかったとか思ったりすることも多いのですが、でも、仕方ないところもあるかと思うのです」

そこまで言うと少々表情を険しくして叡巫は、「でも島崎さん、あなたがその異界での出来事といいますか、これまでの記憶を消滅させてしまうという窪地のそこにある社の呪縛から自由になりたいのでしたら、私の家の庭にあるあの堂宇で取りあえず瞑想をしてみてください。それからは、私が順次ご指導いたしますので」

すると、それをすれば自分はあの異界の森の影響力がなくなるというのか……。

だがとにかく、私は彼女の勧めで庭の八角円堂の堂宇に入っていった。彼女は「これは瞑想堂といいます」と、その堂宇の名称を告げて、それからあの救世観音とも百済観音ともつかない丈高の仏像の手前に座るように言う。今度は前回に続き二度目であるが、私は「目を閉じて、心を静謐にしてく

ださい」という彼女の声に瞑目する。それから叡巫は自分には耳慣れない経文を唱え始める。すると、次第に、心が渾沌となってくるのであった。

工事はかなり進んで、家屋の完成を思わせるまでになった。私は叡巫の家の庭にある瞑想堂で瞑想を行ううちに、夢であの機前の社に赴くことはなくなったのであった。徐々にだが、異界の森の先にあるすり鉢状の窪地にある社で禅定をしたことの影響力が緩和されてきたのである。不思議と。……だが。

金曜日に山村氏が、「どうです島崎さん、作品の方は」と訊く。まあ仕事を終えた後で、淡々とだが書いてもいるのだが。そんな己の情況を伝えれば、「あと約四週間でここの現場も終わりなのですが、ありがとうございました。助かりましたよ」と律儀に言う。

私は精霊界の叡巫の瞑想堂で瞑想をし、それからは夢でもうすり鉢状の窪地の中の機前の社に赴くことはなくなってしまったのだったが、異界の森の弁財天は、自分の意識の一部がすでにその森の一帯に根付いてしまっていて、いつまでもそこに留まってゆくとも言っていた。現実にそれをどうするかである。

土曜日となった。私はここ三週間ほどあの窪地に引き寄せられることは叡巫の御蔭でもうなかったのだが。

だが、いずれにせよ、私はあの三つの頭を持つ弁財天にもう一度だけは参拝したいと感じて、森にスクーターを走らせて行く。

約一ヵ月あまり前と同様に森の入り口にスクーターを停めて、あの小道を辿っていく。やがて、二十分くらい歩き続けるうちに、あの堂宇が建つ広場にと来る。また扉の前で合掌すれば、静かにその扉が開くのであった。私は誘われるようにそこへと入ってゆく。仄暗い堂宇内に、何か霊妙な光を帯びた三つの頭がある弁財天が臨在している。新たによく見れば、前の掛け軸に描かれていた弁財天の絵図よりもおよそ二回りくらいも大きく、それはほとんど等身大であるのだ。私は畏れつつも厳かな思いをもってその真言を唱えれば、「よくいらっしゃいました」という女性らしい少々甲高い声が届いてくる。

それで私は、「あの、自分は今、精霊界に帰属している半分が人間で、半分が精霊である若い女性との交流があり、その存在の支援で、とにかくあの窪地の影響がなくなってもきたのですが。でも、ここの異界の森に囚われてしまったらしい自分の意識の一部を取り戻したいのですが」と、自分の実情について、まるで報告するみたいに伝えてしまっていた。

弁財天は、「それは分かっております。まずあなたが、現在その半精霊半人の存在の協力でどうにか急場を凌ぐといいますか、窪地の牽引力がある種希薄になって、その問題はとにかく解決したとも思われます。ですが一方、ここの異界の森にも据えられてしまったあなたの意識の一部は、やがては

八百万の神々の集合体でもある森自体に引き寄せられてゆき、結果、ずうっとここの森にあり続けるかと予想されます。そうしますと、あなたの意識は二箇所に存在することになりますね」

「と、言いますと……、自分は一体どうなるのでしょうか？」

「恐らくは、これまで通りに娑婆で活動しますが、これはやはり以前のあなたではもうありません。いえ、そうあること自体が、最早不可避なのであります」

それはあの老人も言っていたことであったが。だが、それはもういかんともし難いことなのか。

「私自身はどうにかあなたをここから解き放って差し上げたいのですが、これはあなたの意思的努力が要求されるのでもあります。幸いと言いますか、あなたは、その半精霊であるという女性からの助力がしっかりあり、それによって、上手くこの森に就縛されてしまったみたいな自己の一部を引き離すことが出来るかとも予測いたしますが。あるいは回収、奪還するとでもいいますか」

なるほど。そうするとこれはやはりあの叡巫の協力が必要であるという訳なのか。

そんな思いを見通してか、弁財天は、「とにかく、その精霊でもあるという女性に助力をお願いしてはと思うのですが」と言う。

私自身も、もうそういう流れになってしまったと感じるのであるが。だが……。

何か、やるせないような思いの私に、「そうですね。その女性は、きっと、あなたの困った状況に解決策を与えてくれると、神霊である私は思うのですが。でも……」

そこまで言うと弁財天はその三つの内の真ん中のほかと比べて一番大きな蛇の頭に多少陰りの色をも見せるようにして、「ですが、なかなか大変ですよね。けれどもこれも時代の潮流でもあると感じます。もっとも、これはかなり特異といますか。そう、ここ日本では近代化以降恐らく初めてと思われます。つまり精霊の世界とあなた方が住む娑婆との交流が活性化してきたと申しますか」

なるほど、それは確かにそうであると思った。それまでの時代期と比べて今二十一世紀は、よりスピリチュアルなものが我々娑婆で生きる男女の生活に浸透してくると。つまりとりわけ終戦以降は西欧化の異常なまでの促進で、あらゆるものが合理化されてしまい、為政者、支配階級にとって都合よく整備されてきたところが多分にあった。だが、例えば日本では一揆などで支配層に民衆が蜂起するといった事があったが、何か、これからは従来のあり方と全く違った形態で多くの男女がこの地球で多様な方式で異世界と関わり、おのおのの霊性を高めて宇宙との合一を模索し、覚醒を実現していく新しき時代期であると、そんなことを感じるのである。これまではそういう心の領域を特定の学問体系や宗教が統轄してきたのであったが、これからは個々人が自ら（みずか）の心をもって宇宙との融和や交歓を遂（と）げる時代期であると感じる。私は現実に今窮地に陥っているのだが、一方では、人間と精霊との交流という得がたい体験をもしているのである。だが……。

「そうですね。確かに困った状況ですが、でも、それを上手くポジティヴな事柄に変換するのが、こういう新しき時代期に生きるあなたやほかの男女の課題かと感じますが。めいめい個的なカルマの集

積で、娑婆に生まれてきているのですから」

そんなことを言い、弁財天はまた静かにその堂宇の奥に引き戻されていった。私は扉が閉まってから三度礼をして、そこを後にする。今では、もう以前のような森全体からの牽引力はなくなってはいるが、とにかくマンションに帰還することにした。

私は毎晩の習いのように神秘学関係の資料を読み、原稿を書く。それから、寝床に就く。

私は、あのすり鉢状の窪地を独り降りている……。やがて、あの少々奇怪な仏像を祀る堂宇に来る。どうやら夢を見ているらしいが、でも、ある種のリアリティーをも感じてくる。私は夢見の中での体で漂うみたいにして、更に下方にある社にと向かっていく。やはりまた、自分は引き寄せられてしまったのか。そんな己の思いをよそに、自分の意識は機前の社に誘い込まれるようにして入っていったのだった。

私は、東北での仕事に従事するうちに、次第にこれまでの記憶のある部分などが曖昧ともなっていくのを感じてくるのであった。これは、あの社で禅定をしたことによるのか。つまり、ある特定の出来事を想起しようとすると、それが前ほど出来にくくなってきたのであった。以前は、一日のうちの何時間かが、大変ネガティヴでもあるのだったが、それらがかなり希薄となってきたのであった。まあ、それはありがたいことでもあったのだが。が、一方ではそれにつれてなのか己の意識そのものがだんだんと渾沌としてくるのだった。そうすると、予想するに、自分は次第にこれまでとは全くの別

人になってゆくのか。そんな危惧の念が過った。そしてそれらは日増しに強くなっていくのであった。

叡巫の塔

日曜の朝、マンションで目覚める。とにかくコーヒーを点て、昨日のことを思い起こしてみる。私はスクーターであの森にと赴き、そして三頭弁財天の社に参拝して、それからマンションに帰ってから瞑想して寝床に就いた。夢で、再び操られるみたいにしてあの窪地の中に建っている機前の社に向かっていった。そして、夢の時空でその社で瞑想をしたらしい。やはり牽引力があったのか。昨日、ほぼ一ヵ月振りにあの異界の森に赴き、弁財天の堂宇に参拝してきたことの影響なのか。だが、自分は、どうしてもあの三頭弁財天に参詣したかったのである。なぜだか、分からないが。でも、あのかなり奇妙な風貌の弁財天は自分に好意を抱いているとも想われ、また己もどこかその神霊に惹かれるところがあったのでもあると、そんな風にも感じてくる。

が、本日は日曜日なので、取りあえず叡巫の待つエルフ屋にと赴く。昼少し前に店に着けば、彼女が戸外で佇んでいる。柔らかな笑みを浮かべ、「島崎さん、おはようございます」と言う。私は、それから店でカレーやレトルトライスなどを買い、レジに持っていく。叡巫は計算を終えてから「島崎さん。ひょっとしてですが、昨夜（ゆうべ）の夢でその窪地の方に引き寄せられませんでした」と訊くみたいに言う。それで私は、手短に昨夜の事情を伝えていた。更に、森の中の堂宇で祀られている、今では最

初の時のような掛け軸ではなく、もう神々そのもののように変貌を遂げている三頭弁財天のことをも伝えていた。彼女は私の実情を聞き、しばし沈黙を通してから、程なく、

「そうですか。その弁財天様はきっと、あなたを助けようとされているのだと思われます。心やさしい神霊と申しますか。ですが、それはそれといたしまして、私は私であなたを窮地から救い出したいと思っているのですが」と言う。

それから少々目線を強めるようにして、「この前ご案内して瞑想をされた堂宇のある庭にもう一つの建物、それは私自身が創り上げた塔なのですが、そこでこれから土曜と日曜に島崎さんに利用して頂いて、ご自身でその掛けられた呪縛から解き放たれるようにしてくださいね」

叡巫の談では、あの瞑想堂の傍に自ら(みずか)が創り建てた塔があるのだと。以前そこで瞑想した際に同じ庭に白い塔があったのだが。それは、彼女が何か人生で困窮した人たちのために役立てようと思って、エルフ屋での仕事の傍らに少しずつ創り上げてきた建物であるのだと言う。

「今年の二月にようやく完成したのですが、もしよろしければですが、それを島崎さんに活用して頂ければ幸いなのですが」

私はそんな叡巫の親切ではあるが、どこか不可解な申し出に多少戸惑いもしたが、でも、とにもかくにもその日から仕事を終えて東京に帰還するまで、週に二度その場を借りて瞑想をすることになった。

それは……、白い円錐形に似たタイやカンボジアなどで見られる東南アジア特有の尖塔(せんとう)をも思わすものであった。高さは三メートルくらいか。

叡巫はその日の夕方に私を彼女の家まで連れて行き、「これは夢見の塔といいまして、夢見、ミラムが活性化されるのです。ですので、今島崎さんは夢において、その問題の機前の社からの影響力をなくするという課題がありますので、お仕事のない日にはこの中で瞑想されて、それで異界からの牽引力を断ち切られてはと思うのですが」と説明をする。

私は、最早こうなってはほかになす術(すべ)もなさそうなので、彼女の言葉通りにとにかく週末と日曜の二日間、その精霊の家の庭にある塔で瞑想をすることにしたのであった。

「最初のうちは私がご指導いたしますから」と、彼女は言う。

夢見、ミラムには、以前からそれについての知識はあった。前世紀末頃に結構夢見を励行していた当時は、まだ自分は三十くらいであり、オカルトブームが勃興していた時代期であった。その頃、ある程度ではあるが、夢の中で展開する出来事をコントロールし、そこから覚醒した意識を感じたりもした。だが、やがてあまり夢見を行うことはなくなり、二十一世紀に入ってからは急に〝幽体離脱〟が流行(はや)りだし、ここ十年あまりは普及化までして、今では一般人でもその名称や基本的な事項については知識があるようにもなった。つまりそれらは、日常から見て異世界に飛翔をする手法でもあるのだが。

体外離脱はまさしく幽体というアストラル体が通常の肉体から抜け出ることであるが、一方夢見は明晰夢を統禦して、異世界から様々な智慧を得たり意識の覚醒などを志向したり、さらには過去のトラウマからの脱却を模索するものでもある。両者はある種類似している部分もあるが、最近確立してきた〝幽体離脱〟は外宇宙を目指すものであり、一方夢見はその点地球的、ネイティヴ的でもあるとまたどこか、自己救済の手立てとも感じる。

十八世紀の神秘家のスウェーデンボルグは生きながら夜の睡眠時に霊界を探索したというが、ある日本の優れたヨーガ行者は霊界というのは地球の大気圏を離れては存在しないと断言している。つまり少なくとも我々地球人が体験できる霊界の層は、地球の大気圏内に限るというのである。そうすると幽体離脱を体験したと言う人たちがアンドロメダ銀河や、もっと遠い彼方の銀河宇宙にまでも飛翔したという報告などとはどうにも辻褄が合わなくなる。だが、それらはいずれも己の自由な魂をもって世界、ひいては多層的な宇宙の深奥を探索し、更には宇宙大の覚醒を志向して実現しようと願う思いの表出であると解釈できるのでもある。

実際これまで人間存在は大宇宙から見て実に卑小な存在でしかなく、西欧思想などでは唯一の創造主が被造物として人間を作り、多くの動植物を使役してそれらを食料とするということが言わば恩典として与えられ、我々人間存在はせいぜいゴッドの下僕や下女でしかなくて服従や隷属を怠れば即奴隷化され、死後地獄に放り込まれるというキリスト教特有の理念において世界が動かされてもきたの

である。が、ヒンドゥー教の聖典『ウパニシャッド』で言うように、己の中にも宇宙や神々が包含されていて、人間をも含めて多くの動植物を自然・ナートゥーラの被造物とも捉え、おのおのの魂に宇宙魂が常に宿っていると考える東洋思想が二十世紀の後半に入った頃から次第に西欧の男女や知識層にも評価されるようにもなってきた。そういう思想の根底には、太古からの精霊崇拝、自然崇拝があり、それらはまさしく〝万物の根源的平等性〟に依拠するものである。キリスト教でいう神、あの醜悪でさえあるゴッドは自然、大宇宙をも支配して全知全能とまでキリスト教会という巨大企業が喧伝してきたが、もともとその原型はエルシャダイという地方の火山の神なのである。それがヤハウェ、エホバと命名され、やがてキリスト教会に言わば捏造されたゴッドに祭り上げられてから、世界を支配するおぞましい道具とまでなったのである。また、あの『旧約聖書』にしても、メソポタミア地方の古いタムムズ神話の焼き直しでしかないのである。

だが、二十世紀の後半あたりから、個々人の魂の自由性を認める東洋思想が西欧諸国でも多くの人々の心を魅了し、日本では、世紀末頃からしきりに一人一宗という宗教観が確立されてきた。もともと我が国には奈良時代期に始まった神仏習合思想から、多くの宗教は共通の根源から派生しているという「一即多、多即一」の原理に則った観念体系があり、そういう他人様が信奉している神々や仏が、己やその周りの同胞が信仰している存在との差がないということを自然と受け止めている東洋の教えこそが、二十一世紀の地球にこれまで得がたかった平和をもたらすものであると思うのである。

私は人間と精霊の合いの子である叡巫という女性と邂逅したが、恐らく、精霊界には精霊界の宗教があるのではと思ってしまうのである。だが、とにかく、私は以前というか、かなり昔に励行していた夢見の行に再び精霊界の住人である叡巫の協力で取り組む運びとなったのである。そんなことを思っている私に、「まず、この夢見の塔で、次の週末からの二日間、朝の早い時間からお独りで瞑想してくださいね」と叡巫は言う。

それで私は叡巫の言う通りに、その場を借りて瞑想することにしたのであった。彼女は朝の七時過ぎに店に入って八時からの開店の準備をするので、私独りでその塔に入るために、そこへと至る方法を教えてくれるのであった。

半分は精霊であるという彼女の家は精霊界にあるが、その世界への入り口はエルフ屋の近くの森に入った先にある。叡巫と一緒の時には彼女についていくと、そのまま家に至るのであるが自分一人でそこへ赴く際には、教えられたように森に入ってから幾らか進んで行けばやがてごく狭い広場に行き着き、そこには小さな石碑が建てられていて、それを巻くようにして時計の針と反対方向に地面を二度辿り廻ると、すぐにそれまで拡がっていた周囲の森の情景がゆるりと一変し、より豊かな自然の中にいることに気が付くのであった。そして、そこからつけられた細道を数分歩きゆけば、やがて彼女の家の手前に来る。……自然と。

叡巫は土、日は夕方までは朝の八時からエルフ屋の仕事があるので、その両日仕事が休みである私

は彼女の許可を得て、独りでその家の庭へと赴き、建てられている塔の中に入って瞑想をすることとなった。二回目までは朝に彼女が一緒に塔の中に入って短い間だが私の瞑想の指導をしてくれたが、三回目からは自分独りで行うようになった。大体午前中の八時から始めて夕方の五時半くらいまで励行する。その塔の内部は淡い緑色であり、やはり上からわずかに光が射している。それは精霊界特有の光の精霊による所作であるらしい。そこではあまり意識しなくても自然と三昧（さんまい）、サマディの状態に入って、程なく静謐な意識状態となっていく。

夕方になった頃、静かな足音を聞き、腰を上げて塔の扉を開ければ、六時に閉店して店から帰ってきた叡巫が佇んでいる。あの柔らかな笑みを浮かべ、「ご苦労様でした。ここで勤行をされると、以前の、そう、かなり昔の大変困った時の記憶も徐々にですが滅却されてゆき、やがてはもうあなたの日常にさほどは影響を及ぼさないようにもなると思われます。ですので、ここM郡の現場でのお仕事が終わる頃には、また新しい視野が開けるかと思いますが」と言う。本日は四度目だが私は、何やらありがたいみたいな気持になってしまっていた。

それから彼女は私を家にと誘ってコーヒーを振舞ってから、「何か変化がありましたか」と訊く。実際叡巫の好意で朝からそこで瞑想してから、少しずつだが過去への妄執が減ってきたことは事実ではあるが。つまりある種、心それ自体が軽やかになってきたというか。

「まあ、そんなには激烈な変化はありませんが。でも、以前と比べて例えば仕事や、それにアパート

に帰ってから作品を書くことにおいてもかなり雑念がなくなったとも感じます。あの南方上座部仏教のヴィパッサナー瞑想のように、前よりはいくらかですが今現在に立脚できるようにもなりましたが」事実そういう好影響はあるのではあったが。

　すると彼女は唐突に「島崎さんはお独りなのでしたよね」と、そんなことを言う。それで「はい、そうですが」と前と同様に言っていた。

　三十年前までは三十にもなれば男性は一般的にはほとんど結婚を考えたもので、それが社会の主流でもあったが、ここ二十数年ほどはそれこそ年ごとにシングル志向の男女が増えてきて、あまりこれまでの社会的通念に囚われない人々が多くなってきているが。

　そんな社会の昨今の風潮を彼女に伝えれば、「はい、私は私なりにあなた方の世界の中の動きや流れを大体ですが把握しております。ですので、そういう傾向はとても良いことでもあると思いますが」と言う。実際、これまでは既存の価値体系に多くの男女が言わば従属、隷属してきた訳であるが、二十一世紀が始まるあたりから、これまでとは異なる世界観をもって生きることを模索している人々が次第に増えてきているのである。また、つい最近までは日常の世界はそれ自体で完全に堅固なものでしかないと、少なくとも世間一般では思われていたのだが、世界は我々のいう娑婆以外にも世界があり、それら異界がだんだんとこちらに関与をしてくるのではと思ってしまう。だからこれからは、世界それ自体が多様であるだけでなく、多元的なものに変化してゆくと思われるのである。

よく前世紀から〝共存共栄〟としきりに言われてもきたが、それらは万物が調和的であることを模索するものであるが、更にそれはあらゆる動植物などの生き物をも含む衆生や、我々人間存在が五官で認知する娑婆の領域に限らず、他の、異界をも包含するものでもあると感じる。だから、叡巫と私の出遇(であ)いは一つのそういう事の発端であるとさえ思われる。私自身、今現実に大変困った局面に追い込まれてもいるのだが、でも、こうして人ではない精霊とのハイブリッドであるという存在に助けられることによって、人間界と精霊界との交流が始まるのではないかと思ってしまう。

だが、とにかく、私はそこで週末の二日間をほとんど瞑想に費やしたのであった。

精霊界での朝から半日ほどの瞑想を終えると、叡巫がエルフ屋から帰ってから私を彼女の家へと誘ってくれる。そこでコーヒーを振舞ってもらうのである。私はそういう週末を過ごすうちに、また、平日、仕事を終えてからは会社が借りてくれたマンションの一室で作品を書いてゆく。

私は若い時分から東洋の教えは万教を同根とする一方、万類の同根、同源をも志向するものではないかと思ってきた。つまり全ての優れた宗教や教え、神秘主義は共通の源(みなもと)から派生したものであると同時に、それはあらゆる生命を大切に敬うという宇宙的なアニミズムであり、あの仏陀の教えも同様であると感じる。自分は五十間近であるが、残り少ない娑婆で過ごす日々に、せめて一作は社会、文学界にささやかでも足跡を残すものを創り上げたいと思っている。そんな思いから、これまで二作、日常世界と非日常世界との交錯を表す作品を創ってどうにか出版してきたのであったが。また、私は

この度の東北への単身赴任で、新たなる作品を書き上げることを企図しているのだが。

私のここM郡での三棟の家屋を立てるという業務も終わり近くなった。だが、私はこの地で仕事をしているうちに、意識に変化が起きてくるのであった。事実叡巫の計らいで、彼女の精霊界にある家の庭に建てられた塔で瞑想をするうちに、次第に多元的な自己を感じてくるのだった。半日ほどそこで瞑想をしていると、やがて、宇宙全体の中で様々な自己の存在を確認してくるのであった。……不思議と。ある惑星では私は鉱物であり、またある惑星では植物であった。更に別の惑星では、自分は魚類であり、悠々とその星の海を泳いでいたのであった。まさしく、無数ともいえる自分の多様な形態における生命を感じてもくるのであった。私はそういう体験をすることによって、それが自分の宇宙の中での現実、リアリティーなのかどうかはともかく、確かに、心がそれ以前と比べて柔軟になったのであった。何か宇宙のより大いなるものに見守られているという、これまで得難かった安定感が徐々に心の中に根付いてきたのであった。

結局都合四度その夢見の塔で瞑想をした私は、もうあの窪地の底にある機前の社に赴くことはなくなったのだった。また、あの異界の森へと向かうことも、現実に仕事が休みの日には朝から叡巫の家の庭の塔の中で瞑想をしているのであるから、無論そこへと赴くことはないのであるが。だが、あと二週間ほどで工事も終わりとなる頃に、私はそれまでと比べて仕事現場の一帯の様子が異なっている

ことに気が付く。何と言うか、周囲の自然がより豊かになっているのである。それに三棟の家がもうほぼ出来つつあるのであるが。本日の午前中に、車で三人の家の依頼主が訪れた。彼らは四十歳前後の風貌である。だが、私は少々奇妙なものを感じもした。つまり、どこか一般の人々とは異なるのである。具体的に何が違うのかというと、どうにも不鮮明なのだが、その雰囲気がとても穏和なのである。アルトを運転してきた大野氏は、「島崎さん、こちらはこの三棟の家を依頼された方々です」と言う。

三人の男性は丁寧に一礼され、私も同様に行う。大野氏はその三人に現在の建築の状況を簡明に説明する。持ち主に当たる三人はほとんど喋らず、ただ、にこやかに応じ二十分くらいでまた大野氏の運転してきたアルトに乗って帰っていった。夕方、ここでの業務が終わる頃に、今度は同じアルトで山村氏が来る。

「もう次の金曜で完成ですね。最後の週には外構を行うことくらいですか」と言う。

私は彼に、昼にここを訪れた三人の男性についてそれとなく訊いてみた。この三棟の持ち主であることは、すでに大野氏から伝えられてはいるが、私はその三人にどこか不可解なものをも感じてしまった。それは、どうにもよく表現できないのだが。そんな思いを山村氏に述べれば、「まあここの土地の人たちは、そちら、島崎さんのような中央の方から来られた人から見れば、違和感があるのかも知れないけど。でも、同じ生き物なのですから」と言う。私はその折、少なからず彼、山村氏の対応やその言葉に解せないものをも感じてしまったが、まあ、ここでの業務ももう終わりに近いので、あま

り気にもとめなかったが。

そうこうするうちに土曜日となり、私はあの叡巫の家にと赴く。確かに、その夢見の塔で朝から夕方まで瞑想をしていると、次第に心が静謐になってくるのであった。

「島崎さんは、インド神秘主義の夢見についてはご存知ですよね」と、土曜日の夕方、彼女の家で叡巫は言う。インドに往古から伝わる『ウパニシャッド』の夢見理論では、人間の心理状態を四つに分けている。覚醒位、夢見位、熟眠位、そして究極の聖なる第四位に至ると。その順序で人は真理に近付いてゆくと捉えている。そこでは目覚めている時よりも、むしろ夢を見ている状態の方を真理に求心的と考えられているのである。

私たちは通常、夢は漠として捉えどころもなく、覚醒時の残滓に過ぎないと思っているところが多分にあるが、インドの夢見理論では夢も現実も共に心という鏡が映し出したものに過ぎないと捉えている。鏡の外側で展開していくのが現実と称されるもので、一方内側の世界が夢であると。いずれも鏡である〝心〟というものを離れては存在しないのであると、少なくともインドの夢見理論では、そう世界を解釈しているのである。だから私たちの覚醒状態は、それはあたかも芝居を見ている観客のようなものでもあり、ありもしない幻影に踊らされては翻弄されているのに、それが幻影であることに気づこうとはしないのであると。そういう覚醒状態は夢と等価であるのに、それが夢の類いに過ぎ

ないという自覚がないために、意識の中では最も低い段階であると考えられている。

実際チベット密教やアボリジニーの夢見理論などと異なり、私たち先進国の人々には、夢はきわめて煩雑で錯綜的なもの、日常生活からの投影の産物としてしか考えられていないところがある。だが、一方、夢は主に東洋の叡智では、より本源的世界へと至る通路とも捉えられてもいる。インドの神秘主義を更に発展させたチベット密教では、夢を現実と不死の世界とをつなぐ架け橋であると解釈している。また、チベット密教に伝えられている「ナローパの六法」では、現実を夢に、そして夢を最後には光そのものに還元していく修行法が体系化されているのである。

そんなことをも思っていれば、叡巫は、「では、そろそろ、あなたの心が安定してきたのを機に、今夜次の段階に移行いたしますね」と言う。彼女は、今日これから夢の中で私と出逢うと。私は、そういう言葉にさすがに躊躇(ちゅうちょ)もしてしまったが、でも、ここでの仕事も終わり近く、もともとスピリチュアル系でもあるので、夢見で何か得がたい体験があればそれは望ましいことであると、比較的安易に捉えてもしまっていた。

また、自分には、すでに己の一部かそれ以上があの異界の森に囚われてもいるので、それを回収するという課題が現実にあるのである。ここの地での仕事を終えて、東京に帰ってもやがては夢において異界の森に毎夜呼び寄せられて、最後にはあの窪地の中の一番下にあるまだ見たことのない社に祭神として半永久的に祀られてゆくと、あの三頭弁財天は言っていた。それはどうにかだが解除された

ところもあるのだが、一方そこの異界の森の一部となる可能性があるのだと。だから、完全ではないが半ば精霊でもある叡巫の協力でその呪縛から己を解き放つ必要性があるのであるが。

だが、そうすると、ずうっとここ三十年ほど己に制約を掛け続けてきた過去の記憶から自由にはなれない訳でもある。思うに、自分がここ東北の地に単身赴任のようにして訪れたのも、何らかの必然があったのかと思ってしまう。何か窺い知ることの出来ない領域での、ある種の意思決定の類いにもよると、どこかそんな風にさえも感じてしまうのである。それに……、ふと思ったのだが、確かに叡巫は私の困った問題の解決に助力をしてくれているが、あの三頭弁財天もそれなりに自分の現実を気遣ってくれているのではと。

私はその日は彼女にお礼を言い、あの森の通り道を辿って、己の住まいへと帰った。

彼女の店エルフ屋で買ったレトルトライスとカレーで夕食とした。食事を終えてから、少し原稿を書き、それから瞑想をする。彼女は、夢で自分と逢うと言っていたのだが。

その夜は、いつもよりも早めに寝床に就いた。

……自分は、あの叡巫の家の庭にいる。そこには、あたかも白い光を放つみたいな叡巫が佇んでいる。これまでの彼女は、割と地味なエプロンとジーンズを穿いた仕事着であったが、ここでの彼女は白いAラインのワンピースを思わすものをまとっていて、軽やかさのあるいでたちである。これまでの雑貨店や彼女の家での時と違ってある種の優雅さを感じさせる。と、まるでテレパシーのように自

分の心に働きかけてくる。――こちらに――、という意を感じ取ったので、彼女の方へと歩み寄っていく。どうやら夢らしいが、でも、かなり時空自体が安定していると感じる。明晰夢か……。

私は、夢とも思(おぼ)しい中で彼女の家の手前に来る。叡巫は何か、光が被うような風情である。あたかもテレパシーのような伝達方法をもって、彼女の意念が届いてくる。これから精霊界に赴くと言う。私はどうやらアストラル体であるらしい。それで、叡巫に付き従うみたいにして、私はそこから更に森の奥の方にと進んでいく。荘厳とさえ思われるように樹木が蔓延る情景が続いて、まるでこれまで眼にしたことのないような植物が繁茂している中を、あたかも幻影の中を辿るように進んでいく……。穏やかだが、数種類もの光彩が入り混じっては映え渡っている。そんな光景を眺めながら、叡巫と私は歩いてゆく。

やがて森は尽きて、前方にあの庭にある白い塔に似た建物が建っているが、叡巫が造ったという夢見の塔には階上はなかったが、それはどうやら階層構造のものらしい。結構高さはあるのである。

彼女は一旦足を止めて私を見つめるようにして、「あれは精霊界の神殿です。実はあの私の家のある一帯は正式な精霊界ではないのです。勿論エルフ屋は通常あなた方でいう娑婆にあるのですが、自分の家や庭は娑婆と精霊界との中間領域にあると言えます」と言う。ここではもう、普段の会話が成り立っている。

彼女の談では、完全に顕界とそこから見ての異界、精霊界が隔てられている場合もあるが、一方両

者の間に混在した領域もあると。現実に叡巫の家の周りは後者であるのだと。

「ですので、島崎さんは通常の肉体のままで私の家まで来ることは出来るのですが、でも、この領域ではもうアストラル体でないと活動は出来ないのですよ」と言う。また、夢見において、彼女も、今ここにいる私も精霊界に参入が出来るのであると。そして、夢は精霊の世界や霊界への架け橋であると言う。だが、ここでの私は、普段仕事に赴く際の割と地味でラフな服装であるのだった。すると彼女は、自分の疑問に答えるように「ここ精霊界はアストラル界と似ているところがあって、それで、日頃の日常の想念に影響を受けてしまうのですよ」と伝えてくる。

どうやらその法則性において、精霊界とアストラル界は類似する部分が多分にあるらしい。だが、私は叡巫に誘い導かれるようにして、白い建物に入っていった。最初の階の中程には仏尊を思わす坐像が安置されている。白に近い灰色である。大きさは一メートルくらいか。建物の壁は薄い緑である。

「これは島崎さんの世界でいう弥勒様でもあるのですよ」と言う。

彼女の説明では、私たちが普段活動している世界である娑婆で尊崇されている多くの神仏像は宇宙の大元（おおもと）からの投影であり、密教の諸尊のように種々雑多になることにも必然と理があるのであると。例えば密教では、大日如来を宇宙の根源とし、そこからほかの如来、菩薩、また、明王に天部が多様に派生していて、そのどれにも究極の実在である大日如来の霊力が封じ込まれているのでもあるとされているのだが。

だからここ精霊界でも、偶像というその霊威を象徴するものが造られ祀るということは割合にあるらしいが、叡巫の説明では、私たちの世界と違うところは神像、仏像というものを媒介として、より身近にその大宇宙の根源と交流することが出来るということでもあると。何というか、神仏、自然界の大元と精霊の世界の全てがより直結しているというか。

叡巫は、「島崎さん、ここの世界では想念によってあらゆる事物が造られてもゆくのですよ。ですので、この神殿も、私の想いによって土台から外装まで造られていったのですよ。勿論一日、二日で出来上がってしまうというのではありませんでしたが」

彼女の説明では、そうやって自然界の素材を活用することで家屋や神殿などが出来上がっていくのであると。

思えば人間は、近代の頃から実に積極的に地球上で開発を進めてきた。だが、開発とは、もともとは止めどもなく氾濫してゆく自然に秩序を与えるものではなかったのか。人間は開発において、中庸さと節度を見失ってしまったのではないか。また、それは畜産業などにも言えると思うのである。本当はこの地球は、多くの植物をも含む生物が調和をもって生きる場であったはずなのである。だが、主に西欧思想によって必要以上に開発が進められてしまって、最早世界は危機的状況であるとさえ思われる。だからこれからは、異界、精霊界の住人が我々の困窮してしまった世界に何らかの関与をする必要があるとも感じる。言うまでもなくそれはポジティヴな事柄においてではあるが。

そんなことを思っていると叡巫が、「島崎さん、ではこれから二階に参りましょう」と言う。それで私はそこに設けられている短い梯子を彼女に続いて登っていく。そこには仏陀を思わす坐像が中央の位置に安置されている。先程目にした弥勒像と同じく白に近い灰色で、高さもほぼ同じくらいである。その仏像はわずかだが白い光を放っている。

「これはあなた方の世界で仏教の開祖である仏陀の像ですが、でも、仏陀は地球のみに限らず、それ以前の宇宙の時間においても過去仏としての仏陀は存在していて、またこれからの未来に於いても、再び仏陀は私たちの銀河系宇宙や、更に別のどこかの銀河宇宙の中の惑星に現れ出ると思うのです。ですので、ここ精霊界でも仏陀をこうして祀っているのですよ」と説明的に言う。

それから叡巫は、「島崎さん、ここに座って瞑想をしてください」と続ける。

それで言われた通りにその仏陀の像のすぐ手前に座って瞑想をすれば、意識がそれまでのアストラル体から更に緩やかに抜け出るようにもなって、……気が付けばどうやら次の階にいるようなのである。私は佇んでいる。

そこでは白い光が淡くだがその階一杯に満ちているのであった。少し前に叡巫が立っている。彼女は白い人形（ひとがた）のようでもあるが、あのエルフ屋や家での叡巫と姿自体はさほど変わりなく思えるが、それは案外、精霊としての彼女の本体であるのかと感じた。

「また瞑想状態に入ってください」という彼女の言葉に、意識を内側に向ける。少ししてから今度は

直観に導かれるように意識を外側に向ければ、私は先程の仏陀が祀られている階に座っている。傍に叡巫が立っている。不思議な感慨が募ってもくる。

「島崎さんは、東洋思想を好まれておりますね」

叡巫のそんな言葉に、万物が調和することをも模索する東洋思想、それは仏教であり我が国古来の古神道であり、シャーマニズムを基調とした中国の民族宗教の道教であり、また東南アジアやチベットの土着の宗教、更にヒンドゥー教などであるが、それらが二十一世紀の地球にこれまで得がたかった平和をもたらすものであると常々自分が感じていることを述べ伝えていた。

叡巫は、「確かにそうですね。宗教は、己の信奉している対象以外の教えの中にも、自分の帰依する存在を包摂している霊威、神聖なる属性が等しく封入されているということを認知できる、そうさせるものこそが本当の優れた教えでありますよね。ですので、私たち精霊界の宗教には、あなた方の世界での東洋の教えと共通するものが多分にあります。事実東洋の地には、また、有史前の地球の様々な場所には大地から沸き立つような神々の霊威があったのですが、それが一神教の勃興で撲滅され、結果、精霊界はあなた方の世界とすっかり隔てられてしまったのでした。ですが、最早ある飽和状態にも達しており、それは地球の意思と要請であるのかもしれませんが、私たち精霊界が約千年振りに、あなた方の世界に明確に関与を始めたのです。これまでにも時折でしたが、精霊界の住人があなた方の世界に顕現したりしていたのですが、でも、それは最小限度でありました。ネアンデルタール人の

時代には、精霊の世界とあなた方の世界との交流がかなりあったらしいのですが邪悪な異星人の関与で、地球自体が相当に理想とはかけ離れた状態にまでされてしまったのでした。ホモサピエンスの時代期に入ってからはネアンデルタール人の時代と比べ、その邪悪なる者が次第に人間の精神を支配し、結果、地球上の実に多くの方々の心を悪しき方向に揺り動かす羽目になってしまって、特に西欧の先進国の男女の集合的無意識にしっかり根を張ってしまったのだと、少なくとも私には思われます。ですが、あまり私自身からは言えないのですが、二十一世紀の今、精霊界それ自体が、わずかずつですが、あなた方の世界に明確に関与をしていくと、そんな風にも思うのです。そしてそれは地球と世界の穏和なる変革の兆しでもあると思います」

叡巫はそう精霊界の実情を伝え終えると、「これからここで儀式をいたします」と言う。

私は思わず「その、何かここで、儀礼めいたことを行うのですか」と訊いていた。

叡巫は、「そうです。まず、あなたはかなりあの森での呪縛から自由となり、後はほとんど自力で、そこからの影響力を断ち切ることが出来ます。ですが、一方、ずっと以前からあなたを就縛してきた過去の悪影響に於ける、ご自身の記憶にまた制約されてしまうことにもなります。ですので、それらの悪しき影響からあなたの心を解き放って差し上げたいと思うのですが」と言う。

私は叡巫のそんな好意的でやさしい申し出に、喜びと安寧を感じたが、だが、同時に一抹ならぬ不安をも抱いてしまった。

「はい、それは大変ありがたいのですが、でも、そうするとやはり自分の記憶のある部分が消えてしまうのでしょうか。いえ、それは、現実にここ三十年近くも望んでいた事でもあるのですが」

叡巫は柔和な笑みを静かに投げかけ、

「はい、大体ですが分かりますよ。島崎さんの危惧や心配、そして怖れも。ですが、私があなたにして差し上げられることは、本来のあなたの良い側面を残し、ですが不幸にも汚され壊されてしまったあなたの心の全体性をも取り戻すことであります」

そこまで言うと、それから彼女は精霊界の悟りについて説明を始めるのであった。

「島崎さんは、空海様の説かれた『十住心論』はご存知ですよね」

それは弘法大師空海が提唱したものであるが、もともと大乗仏教の理論に依拠したものであり、人間の精神、意識というものを十の段階に区分、階層化したものである。第三段階までは一般の人間の意識状態と位置づけられているが、四番目の『唯蘊無我心』から、悟りの階梯が始まるわけである。その『十住心論』では、それから究極の、より高次の段階へと向かうのであるが。

「精霊界では空海様の『十住心論』の第四住心のレヴェルに誰もが至っています。禅で悟りの階梯を説く『十牛図』での己の心の探求を始める〝尋牛〟に当たる精神の段階に皆、誰しもが到達しているのです」

およそあらゆる精霊は誕生をして物心が付く頃には、もうその段階に自然と達しているのであると

叡巫は言う。それで、そこから、更により高いレヴェルへと、おのおのの内在神をもって向かっていくのであると。だが、それは我々の世界でいう上昇志向などではなくて、きわめてアジア的と言うか、チベットやブータンやネパールなどのように、人がその土地の動植物との調和の許に、万物が共に幸福であることをも模索するものなのであるのだと。結局、精霊界では、融和と共存を理想としてそれを具現化することをも希うというのが、あらゆる精霊存在の基本理念であるのだと言う。私は彼女の話を聞き、まさしく合点がゆく思いであった。実際、あの空海の説く第四段階の意識がその社会で最も基層的なレヴェルであれば、勢いそういう高次の意識がある種その社会において普遍化されていくと想われるのであった。また、禅の修道の過程を牧人と牛との関係になぞらえて、十の絵でそれを示し教える『十牛図』の最初の段階である〝尋牛〟は、己という存在の精神を探求する心の旅の発端であるが、これも覚醒した意識の模索でもあると感じる。禅は大乗仏教から生まれたが、もともとは小乗・仏陀の教えである原始仏教を基としているのでもあるし、結局、それは、他の東洋の宗教や神秘主義と併せて、人間や多くの動植物の心の自由性をとても尊重するものでもあると思うのである。

だが、そうすると、精霊界全体の意識のレヴェルは相当に我々人間界と比べて高いと思われるのである。そんなことを考えていると叡巫は、

「ですので、私たち精霊の世界はあなた方の世界のように工業を興して、テクノロジーを発展させたりはしなかったのです。でも、一方天然の素材から生活に必要なものを作り上げるということによっ

て世界を構築してきたのでした。それは想念によるものでもありますが、ここ精霊界には私たちの思いによって事物が出来上がるという作用があるのです。　ですから、公害などということが起きることもなく、またもともと我というものがほとんどありませんので、工業、生産業は自然、ナートゥーラと極めて調和的にそれらは発展してきたのです。勿論現実に必要な物は必要なのですが、過剰に物を作ったりしたりはしないのですよ。常に自然の本源との流れと共に、私たちの世界の構築と成立があると申しますか。また、人間界で構築された学問によるものとは異なりますが、でもここ精霊界には、それ特有の理念からなる知識の集積と、智慧―ｗｉｓｄｏｍがあります。それは直観からくるものを尊重して、そこから物事を体系化していくという手法によるものでもあるのです。繰り返しますが、チベットやラダックの方々やネパールやブータンの国などに見られるように、精霊界の理念は周りに生息している動植物と共に生きることを心掛けるものなのです。それと私なりに、ほぼ四年間、あなた方の世界で活動をして、そちら様の社会では我欲によって物事が動いていると感じるのです。つまり支配、被支配によって地球という惑星を動かしてきたと思うのです。ですが精霊界では、他者の中に己があり、また、己の中に明確に他の存在があるという事を認知しているのです。だから、他者を傷つけたり、支配したりすることなどは全くありません。精霊界では己と他者、これはむろん動植物をも含みますが、更には天、神々という、より宇宙に求心的な領域との〝つながり〟をとても大切にして、それを遵守（じゅんしゅ）することを重んじております」

そんな風に、彼女は精霊界の実情について説明をしてくれる。それから付け加えるみたいにして、これは私たちの世界の各共和国、それはいずれも小国ですが、そこでの本当にわずかな実情でありまして、申し訳ありませんがこれ以上はお伝えすることが出来ませんと、控えめに恐縮しながら言う。私は彼女の言葉に、もう亡くなってしまったが、ある企業の代表であり、著名な経営コンサルタントでもあり、また滅法スピリチュアルに明るくそれを好んでもいた人物が、二十一世紀になってからしきりに、今世紀のこれからは地球が『天の理』によって動いていくと述べていたことを思い起こしていた。それは、これまで地球上で蔓延してきた支配や我欲や妬みや怒りというネガティヴな行為や感情や思いとは無縁な穏和さと共存を志向する理法であると。今、叡巫から伝えられた精霊界の根本理念は、確かにそういう『天の理』に則っているものであるとの印象を受けたのであった。

叡巫は、「それでは、これからあなたの魂の一部を分化いたします」と静かで厳かな口調で言う。私はその言葉に少なからず動揺さえしてしまったが、最早ここは異界でもある、精霊界の、しかも彼女の神殿内であるので、程なく落ち着きを取り戻していた。「そのまま座っていてください」と言ってから、それから彼女はゆっくりと両手を床に平行になるまで挙げ、更に少し上へと挙げ、目を閉じる。私は最初そんな彼女を見つめてもいたが、間もなく、彼女自身が白い光に包まれ始める。私の心に——目を閉じてください——という言葉が届いてくる。

私は彼女の指示に、とにかく瞑目していた。……とても緩やかで、たおやかな流れの中にいる自分

を感じる。それは、悠久の太古から絶えることなくここ地球で在り続けてきたものであると感じてくる。

気が付けば……、私は先程の仏陀の像の安置されている二階にそれまでの姿勢のままで居る。叡巫が眼前で佇んでいる。彼女は柔らかな笑みを浮かべて「これであなたの魂の一部を分化させ、そのひとつをこの私の精霊界の神殿に保存いたしました。ですので、あの異界の森の先にあるすり鉢状の窪地の下の方にある社にあなたの魂が呼び寄せられるということはもうありませんからそれについて危惧を抱く必要などありません。全てに亘ってご安心ください。ですが、これからの日々をあなたなりにより良く、そして力強く生きてくださいね」

そう言い、叡巫は丁寧に一礼し、それから私を階下へと導く。一階の弥勒様の坐像に二人で合掌して、それからその神殿を後にする。神殿の手前で叡巫は、「これからは自力で、日常のあなたの肉体に、ここにおられる意識が帰還、収斂（しゅうれん）いたします」と言う。私はそんな言葉に送られて、精霊の世界からまた夢の時空を通路として意識としての己は自分の肉体に帰ってゆく。

翌日の日曜の朝、居住しているマンションで目覚める。昨夜の夢について考えてみた。

私は夢の時空で叡巫に導かれ、精霊界にあるという彼女の神殿へと赴いたのであった。叡巫はそこで、私の魂の一部を分化して、そこに保存をしたと言う。それによって、私はもうあの窪地に引き寄せられるということはないらしいとその日、とにかくまた彼女の家にと向かう。途中、エルフ屋の前

を通ると叡巫がいる。夢見の塔に赴く前には挨拶的にこれまでも短く立ち寄っていた。叡巫はいつものあの柔らかな笑みで私を迎えてくれる。昨夜の出来事について少しだが尋ねてみようかとも思ったが、私は何だか錯綜したものをも感じていたので控え、必要な物だけを買い彼女に軽く会釈して精霊界の家の庭にあるあの夢見の塔へと向かっていった。

移住

もうすぐ、ここでの仕事が終わる頃となる。私は明日で業務が終わるという木曜日の昼に、山村氏から意外なことを聞かされる羽目となる。つまり先週にここを訪れたと記憶するあの三人の依頼者は実は精霊であるのだと。それら中年の男性は、精霊界の住人であったが、時代の境目において、彼らの帰属している精霊界の上層部の意思決定において、言わば派遣されたのでもあると。そうするとやはり、あの私が現在居住しているマンションの住人の一人も精霊という訳なのか。やはり谷山氏の述べられた事は事実であったのか。だが、眼前で佇む山村氏はそんな事柄を自分に伝えているのでもあるから、彼もひょっとして精霊であるのかと感じてくる。そういう自分の思いを汲み取ってなのか山村氏は、「そうなんですよ。私自身も実は少し特異な形態ではありますが精霊でもあり、それでこの東北の地にそういった精霊として住み、これからはほかの数人の精霊の方々と共にここで、このM県でポジティヴな活動をしていくつもりなのですよ」と言うのであった。

私は彼の話を聞き、でも、『五輪建装』のずっと社員であった彼が精霊でもあるという事に解せないものをも感じてしまった。彼は現実にM県の県庁の所在地であるS市にある支社のれっきとした係長でもあるので、恐らく『五輪建装』に二十年くらいは勤続しているはずなのである。そんな疑念を

抱く私に彼は言う。

「実は精霊界では三十年ほど前から娑婆への関与がわずかずつですが始まっているのですよ。ですので、私は己の個人的事情から、二十歳までは人間界の全く一般の人間でもあったのですが、その……不運にも山で遭難してしまったのでした。そして死んでしまったのですよ」

私は彼の話に不気味なものを感じてしまったが、昼休みであるので、その続きは仕事が終わってから伺うことにした。最終日の前日であることから、その日の業務はいつもより早めに上がった。私はとにかく、山村氏をマンションにと誘い、コーヒーを淹れて、早速話の続きを聞くことにしたのであった。山村氏は彼自身の実情を、コーヒーを一口飲んでから淡々とした口調で語り始めるのであった。それによると彼は大学生の頃、初秋の日の山登りで山道を歩いている時にうっかり足を滑らせてしまって、あっけなく崖下に転落して、それで死んでしまったのであると。それは岩手県の山であったというのだが。

山村氏はそれから淡々とした口調で、「ですが、気が付くと、私は死骸となった己の慣れ親しんできた肉体を真上から見下ろしているのでした。むろんその有様を肉眼ではない意識の視覚をもって知覚した私は、それからその山の洞窟を通って精霊界へと参入したのです。するとそこには杖をついたかなりの老齢と思われる男性がいまして、私がもう死んでしまったことをその山のぬしとも思える人物から告げられたのでした。ですが、娑婆での生に未練があるならばもう一度特異な精霊として甦っ

て生きることもできると言われたのです。もっとも、それには複数の条件を私が呑むということが要求されたのですが。それで、結局、私はその山の精霊らしい人物の霊力によって、死体となった己の肉体に再び意識が入り込んでいって、とにもかくにも息を吹き返して現実に生き返ったのでした。それ以来、私は精霊界との約束を励行することが義務付けられ、そういう実情から自分はこの度三人の男性の精霊が、ここ東北の地に移住する際の橋渡しをも担ったのでした。先週、私は精霊界の幹部でもあるらしいその老人から、それは深夜の夢においてでありますが、これ以上の制約はもうないが、でも、これからもいつも精霊界とのつながりの許に心有る日々を送るようにと言われたのでした」とご自身の体験してきた事柄を伝えられる。

　更に山村氏は、その再生後にも、様々な恩典を精霊界から頂いたのであったと。何となく、二十代の半ばから人生が順調に運んで、『五輪建装』のS支社に入社してからもあまり社会人としての問題もなく、会社に所属してきた二十数年間を大過なく過ごせたのであったのだと言う。

「私は、特に宗教や民俗学に詳しいわけではありませんが、ですが、精霊界は私たちの社会と違って、我欲や我見とは程遠い世界であるようです。我々のここ娑婆では、有史以来常に権力者が民衆を抑圧して、富を独占してきたわけですが、太古の時代には人と動植物がもっと融和的に暮らしていたのだと思うのです。私は精霊界から新たなる命を頂いてから、精霊の世界の実状を知るに及んで、我々ホモサピエンスよりも、彼、彼女たちの方がずっと高邁な精神を持っていると感じてしまったのでした」

私は彼の話を聞き、まったく同感であった。思えばこれまで、地球を我々ホモサピエンスが支配し、開発の名ですっかり汚し、挙句破壊をしてしまった嫌いさえあるのである。

だが、あの神殿で叡巫が言っていたように、それが最早臨界状態に達してしまったので、地球自体が自(みずか)らの身体の浄化の必要を感じて、精霊界の娑婆への関与を意図したのでもあると思われる。私は叡巫に連れられて、精霊界の神殿に赴き、彼女からその世界の実相を伝えられた。思うに、これからは少しずつ、我々の世界に精霊界から精霊が参入してくると。これまでにもここ日本では大正期やそれ以前に、我々の方が異界に招かれるようにして参入したという記録がある。また、不思議な異形の者や、あるいは天狗などが我々の日常に立ち現れたということも時折はあったらしい。あるスピリチュアルリストは京都にある著名な寺が建つそこの山の中で、天狗と思(おぼ)しき怪異なる風貌の存在にしっかり出会ったという。それは二十一世紀の、つい最近のことでもあると。また、ヒトがホモサピエンスとなってから、文明を作り上げて発展させてきたが、どうもそれは邪悪な異星人の意向の下(もと)にあったのではと思われる。だが、いずれにせよ、我々が五官で認知している娑婆への異世界からの関与は、つい数十年前まではさすがに稀有ではあったが、これからは我々も異界に参入し、一方精霊界などからもここ娑婆にある程度積極的に関わってもくるのではと。

実際、特定の国の者が現実に他国に移住してしまうと、政治がらみの問題が起きてもしまうのだが、仁義をもってひっそりと目立つことなく異なる世界の住民が以前とは違う場において生活するという

のであれば、国土やそれまで帰属していた世界の次元自体が異なるにせよ、それがそれぞれから見て異界からの存在であったとしてもさほどの問題もないと予測される。それは我々の世界について言えば、これは予想でしかないのだが、精霊たちが定住して、社会に徐々にポジティヴなものをも送っていくものと、あるいはくれるものと思うのである。だが――。

いずれにせよ明日は金曜日で、ここの現場での業務は終わり、私は翌週の月曜日にはここM郡を後にする予定であるのだが。私は山村氏の実情に愕然としてしまったが、己の一般とはかけ離れた体験などを思えば、何か全てが承服できるものに思えてくる。何と言うか、瞑想において集合的無意識とつながれば、それが自然とも思われてくるのであった。そう、ほとんど違和感などはなく。

それから山村氏はコーヒーを振舞ってくれたことに丁寧にお礼を述べ、同じM県だがここから離れたところにあるご自身の住まいへと帰ると言う。私はかなり躊躇(ちゅうちょ)もしたが、彼にこの先も会社員でありながらもそういった特異な精霊として在り続けていくのかどうかと訊いてしまっていた。

すると山村氏は、「はい、まあ、私は島崎さんと同じく独身でして。それですので、残りの娑婆での日々を精霊界から参入してくる精霊存在を補佐することに取り組もうかと思っているのですよ。もっとも、それほど多くの精霊がこちらに移住してくる訳ではありませんが。少なくともこれから数年くらいの間では。それに私は甦ってから一応以前とほとんど変わらぬ肉体の状態でもあるのです。ですので、一般人と同様に飲食をしたりもするのです」とそんな事などを説明的に言うのであった。

私は、そこに穏和なものを感じた。全てに亘って穏やかで、融和的と言うか。いな、奥ゆかしくもあるというか。それはこれまでの白人、アングロサクソンのアジア諸国への入植とは、あの福音やクリスチャニティという名の許(もと)での支配と略奪とは全く次元が異なるとの感を強くするのであった。事実、大英博物館の美術品や遺跡物などの収蔵物は、そのほとんどが旧植民地からの収奪品であるらしい。

翌日の金曜日、正午少し前に三棟の家屋は完成に至った。職人さんたちは本日は朝の六時から来て、最後の仕上げを行った。それで十二時を回った頃に、私と山村氏は各職人さんに別れの挨拶とお礼を述べ、彼らは車に乗って引き上げていった。私と山村氏がその場に取り残されたみたいにもなったが、十分ほどしてからアルトがこちらに向けて走ってきて、先々週ここを訪れた三人の中年の男が車から降りてくる。運転は大野氏である。前回と同様、とても穏和なものを感じさせる。その雰囲気というか。彼らは皆背広とネクタイという格好なのだが、私に一礼してから、山村氏と小声で言葉を交わしている。現実に来週の後半あたりから、彼らがこの三棟の家屋に住むのであるから、数日中には家具などが運ばれてくるのであろう。叡巫は精霊の国では思念によって事物や物が作られると言っていたが、でも、ここはしっかり娑婆であるから、彼らとて現実にこの世界での暮らしには諸々の生活上の物品を必要とするのではないのかと思われる。

それから三十分くらいで三人の精霊はまた大野氏の車に乗って帰った。私は何だか、大野氏もひょっ

として精霊ではないのかと思って山村氏に訊いてみれば、それはさすがに違うとのことであった。やはり、人であった者が精霊に成るというのはかなり、相当以上に特異であり、それに見合ったカルマがある種必要とされるのかと、そんなことをも思った。

帰還

翌日の土曜日の朝方に、私はまたエルフ屋へと赴く。すると、もう粗方商品がなく、店の中が閑散としているのである。叡巫がいる。私は怪訝な思いを抱いてそれについて訊ねれば、明後日の月曜日の正午で閉店をすると言う。

「私はいろいろ考えたのですが、もうこのお店を閉めることにいたしました」と言い、それから、彼女は語り始める。

「私は前にもお話ししましたが、半分は人間で、半分は精霊でもありますので、あなた方の此岸（せかい）で一般の男女のように活動することもある程度まではできるのですが。でも、それはいつまでも続きません。私はここに来てかれこれ四年ほどになります。これも以前お話ししましたが、あの私の家やお堂や塔が建っている一帯も完全な精霊界ではないのです。そういうことなどから私はもう精霊界に帰還する時が来ました。私なりに多くの体験をし、またごくわずかかもしれませんが自分なりに地域にポジティヴなものを残したかと思うのです。私はここエルフ屋で単純に商品を販売していたのですが、あの東日本震災の後にかなり困窮された土地の方々に私なりにささやかな支援をしてもきました。ボランティアなどで食品や生活用品などを無償で提供もいたしました。あれらの雑貨品や食品は実は精

霊界の工場で作られた品々でもあるのですよ。今現在、島崎さんがこちらに来られた頃には、多くの人々がほかの土地へと移住された後でしたので、私はそろそろお店を畳もうかとも思っていたのでしたが、あなたがこの地に来られましたので、予定よりも少し精霊界に帰還するのを遅らせていたのでした、でも……」

叡巫はそこまで言うとその表情に少し陰りを見せて、「私自身がもともと正統な精霊ではありませんので、一定の時間以上あなた方の世界に関わっておりますと、もう自分は精霊ではなくなってしまうのです。そういう事情ですので、来週の月曜日の昼には正式にこの店を畳みます」と言う。

彼女は、そうした陰徳を積むことによって精霊としての自分の心もより進化することが出来たことを伝える。ここ娑婆で、それを行うことによって、精霊である彼女自身も生きる活力を得たのであると。また人は老いるが、精霊は寿命が大変永く、我々が活動する側の世界の時間換算で言えば一万年にもなると。

昨日、建築が終わったそこの現場に家の持ち主である三人の精霊が再び訪れた。少数だが、ひっそりとここ東北の地に定住していくらしい。そういう現実の展開に怖れもあったが、これから叡巫の言うように世界に穏和な変革が始まってゆくものと感じる。でも、それをポジティヴな結果に至らせるのは、東洋の地に棲む精霊や神々の霊威であり、更には東洋の宗教や神秘主義を奉じる多くの人々の意識、マインドであると思われる。一神教が世界を支配しようとする以前には、多くの自然界の精霊

や神々が、人間や動植物と共に調和をもって生きていたと。ここまで文明が発達し切った地球で急激な変化を起こすのは現実に無理であるが、だが精霊存在が、それこそひっそりと我々の世界に参入し、何かポジティヴなものを供して、社会に良い影響を与えていくものと思われる。それは銀河系宇宙の中の一つの潮流でもあるかと感じる。

そんなことをも思っている私に叡巫は、「私は猫の浩介と一緒に母の待つ精霊の国へと帰ります。自分はもともと半精霊ですので、そんなには長くあなた方の世界に関わることは出来ないのですよ。大体数年くらいは、私のような半精霊でも娑婆で活動することも可能なのですが、でもやはり期限があって、これ以上ここにおりますと私という存在にも次第に一般の男女のように少しずつですが老いが始まります。ですので、これからは正式に精霊の世界の住人になり、そこで本精霊となる道を選びました。精霊の世界に常時い続ければ、何千年も老いることはありません。精霊界での時間の流れは、あなた方の世界とはかなり異なります。それで相当長い歳月にも、物質界の生き物のように歳を取るということはないのですよ。また、わずかに老いや衰えが起きても精霊界の時空間それ自体にそれらを修復していく作用があるのです」

そんな事を聞いて私は何だか叡巫の生活がうらやましくなってしまった。

「でもいいですよね。長い間の生があって。若い姿の時代もかなり長く続くわけですから」

私はどこか単純に彼女や、精霊界の精霊の生活が理想的なものと思ってしまった。エントロピーの

増大の素因がかなり少ないとでもいうか。

　すると叡巫は、あの柔和な表情に、ほんのわずかだが険しいものをも表し、

「でも、それなりに精霊界には大変なところもあるのですよ、現実に。少なくとも私の帰属する小さな共和国では、あなた方の世界のような労働などの必要はありませんが、でも思念による訓練が課せられているのですよ。ですので、一人ひとりが、ひと精霊存在がシャーマン、巫者でもあるのです。私たちの精霊界では誕生以来ある一定の年月が過ぎると瞑想を中心とした修行に入って、それぞれが覚醒した意識を得ていくのです。結果、めいめいがあなた方の世界でいう神通力を得て、精霊界の平和や発展のために日々をポジティヴにあり続けていくのですよ」と言う。

　それから精霊存在は歳を取ると、やがて段々とその存在の生来持っている固有の光りがその姿を被っていくと言う。だから我々の世界で言う肉体の老いはほとんど見られないのであると説明する。年齢と共に被う光彩（こうさい）を別とすれば、成長の頂点に達した時とさほど違わぬ容姿であるという。まあ、それは大変良いことであると感じる。中年期や老年期というものがないらしいのであるから。

　そんな風に叡巫は自身の帰属する社会の実相について話してくれた。また、彼女は今現在まだ半精霊であるので、これからは精霊の国での修行があるのだと。

「ですが、精霊界に滞在しているだけで、もともと精霊界の母から生まれた私でもありますので、次第に、こちらの世界での時間の流れで言いますとおよそ半年くらいで精霊そのものと成っていくかと

思われますが」

だが、私は、彼女の帰属する共和国で多くの精霊が神通力の類いを持っているということに、ある種怖れを感じた。そんな思いをためらいつつも伝えれば、叡巫は、「それはご心配には及びません。精霊界の国の住人、精霊は決してネガティヴなことを思ったりはしません。おのおのの心が、中央でもある精霊界の王、ラージャ様との心と常につながっているのです。精霊界の決まりは、あなた方の世界でいう東洋の宗教と共通するところがとても多いのですよ。仏教で言う慈悲の心や儒教で説かれる五常の徳を遵守することが基本なのです。でも、中国的なものとしては、それはむしろ老荘思想でいう虚無に同化することを志向するというのが、精霊界の主だった理念の一つなのですよ。ですので、私たち精霊は内省を深めて、どこまでも平和を模索しているのです」と言う。

叡巫の話では、精霊界には様々な小国があるが、それらはどれも他国を尊重していると。各精霊の心が中央の精霊王の心とつながっていて、いつも精霊界全体が秩序だっていることを願い、希求していると。また精霊は、その世界での他の動植物や流動する自然との調和や融合をも志していて、自然の中から生まれ、再び自然に帰り、還っていくという法則性を皆認知しているのであると言う。

「三ヵ月という短い間ではありましたが、半精霊半人の私は島崎さんと出遇い、こうして新しい旅立ちをすることも出来ました。私は私なりに島崎さんのお困りの問題などをどうにか解決して差し上げ、ささやかなものでしかありませんでしたが、あなたの再生に貢献できたかと思うのです」

確かに自分は叡巫の助力で、あの森で交わした老人との約束めいたものを取りあえずは無化し、また一時的にではあるがそれまでの記憶を失ってしまう状態から言わば持ち直して、更に叡巫との夢の時空の関わりからこれまでにない視座をも与えられたのであった。また、この地で都合三ヵ月ほど過ごしてきたが、その間に己が仕事で建造に立ち会った三棟の家屋の持ち主も精霊であり、マンションの住人の中年の男性の谷山氏も精霊であると。加えてもう一人のマンションの別の住人も精霊であると。谷山氏は墓守を仕事、生業としていると言っていたが。その彼はあの異界の森の中で一度死んでしまって、が、それから何故か甦ったのであったのだと。あの森は、太古、『記紀』が編纂されるずっと以前から棲んできた旧石器時代の精霊が宿ったものともいう。だから恐らくは、生命力を活性化させる特殊な作用があるのではと感じてしまうのであった。つまり二十一世紀になってから、ここ東北のM郡の過疎地の土地自体に土着の往古の神々の実に永い定住や異界の精霊たちの参入で変化が起こってきているのであると思われる。

考えてみれば、人間はこれまでずっと我々が顕界と捉えている五官で感じ取れる世界のみが唯一であると思い込んで、地球上に闇雲に開発の手を広げてばかりいたのであったが、地球そのものの現実においては、我々の認知する娑婆以外の世界が明確にあったのである。それらが伝説や神話、民間伝承などで西欧では妖精、またアジア諸国では精霊として我々の世界にどこか気まぐれに現れたりしてきたのであったが。有史以来、ホモサピエンスは我が物顔に地球を支配しようとしてきた。そうして

畜産業、工業などで人間中心の世界を積極的に作り上げてきたのであった。そういう先進国の、主に西欧諸国中心の支配によるものとは明らかに違う東、東南アジアの国々では、周りに広がる自然との共生を志向し、大きな都市を造ることよりも周囲に生きる動植物と共に日々をより良く生きることを実現することを願ってきたのである。私は漠然とだが、ここで体験したことは我々日本や、他の近隣の国の東アジアの韓国や中国、また、東南アジア諸国、更にはネパールやチベット、インドなどであまり目立たない形態で、徐々に起こってきていると感じてくるのであった。

実際、二十世紀半ばくらいから西欧諸国においても、多くの男女の心が仏教や道教に惹かれたのはある意味では当然、必然でもあると思われる。東洋の教えはどこまでも寛容、穏和で、中庸に依拠するものであり、攻撃的で支配をも目論むキリスト教の世界観に辟易してきた男女が霊性の目覚めの時代期に、他の思想や宗教などを排斥することなく悟りや心の平安を得る道を指し示すそれら東洋の宗教を心の拠り所、更には支えとするようになったのは、まさしく予定されたことでもあったとさえ感じる。「うお座」から「みずがめ座」の時代期の移行が完了した今現在、これまでとはかなり異なった形態の世界が展開してゆくと想われる。昨今、精密機器が発達し切って、パソコンが異常なまでに普及化した今世紀には、人々の精神が新しい覚醒期に至ろうとしているのではと想われる。紀元前から、孔子、老子、釈迦などの賢人の登場で人類の意識が大きく変革されて、それら賢人や聖人が娑婆という一つのフィールドの中で世界の発展のために〝叡智〟をもって導いてきたのであったが、自分

のこの度の経験はそれらとは大きく異なり、我々から見ての異界との交流である。叡巫は空海の『十住心論』を取り上げて、精霊界の住人は皆第四レヴェル以上にあると述べていた。

また彼女は、精霊界では我々の世界のような体系的な学問ではないが主に直観智による判断と、そこから思考の段階を踏んだ在り方によって、社会や世界で起きる多くの事象を解釈していると言っていた。

叡巫の説明に、思うに、精霊界の住人は誰もが我々の世界で言う哲学者や宗教家でもあるが、だがそれは、己の信奉する対象のみを唯一絶対と狂信し、挙句他者をも盲信させるというおぞましい類いのものでは決してなくて、自己の心が直接、地球の精霊王とつながっているという、そういう高次の認知によるものであると思われる。

そんなことをも思っていれば、叡巫は「私はハイブリッド、合いの子として宇宙の中で誕生して、最後の選択として精霊としてあり続ける道を望みました。精霊存在は地球に生命として発生してからこれまで感情というものが、娑婆の方々と比べればかなり少ないのです。また、私たちの世界では時間の概念を直線的ではなく、道教的な円環をなしているものと捉えております。現実にそういう所作において、私たちの世界は動き、流動をしているのです」

そこまで言うと、叡巫は少々哀しげな面持ちで、「私は折角と申しますか、こうしてあなた方の世界でも生活できまして、それは嬉しい事ではありましたが。でも、自分の誕生それ自体は望んだわけ

ではないのですよ。ですが、自分の人間界の父と精霊界の母がお互いに情熱を感じあい、溢れる情愛によって結果、私が少々変則的でもある生命体として誕生をしてしまって、そうして心ならずもハイブリッドとして生きることとなったのでした」

叡巫はそんなことを言う。まあ、実際、精霊と人間の合いの子であるのだからそういう苦悩が現実にあったのかも知れないが。

だが、それとは別に、ハイブリッドの古き神々があの弁財天が祀られている堂宇の建つ異界の森に生息しているのである。それらは主に男性の神々でもあるらしいが、それらも新しい世界を構築しようとしているのではないかと感じる。それは結局、時代の流れであるかと思う。これまで娑婆では、我々人間や動植物が犇くみたいに棲み生き、一つの生態系を古生代よりももっと古い時代期を発祥として形作ってきたのだったが、二十一世紀の今を境にして、精霊界という異界からの関与が始まってきていると感じてしまう。それは移住でもあるが、イギリス人が十九世紀アメリカ大陸に入植してきたのとは全く違って、精霊界は秩序を失い、生態系が壊れつつある地球の修復のために参入をしてくるのであると思われる。そのために、ハイブリッド的な存在が橋渡しともなり穏和なる社会変革が目立たぬように推進されていくのではと。私と精霊でもある叡巫との出遇いは、その先駆けでもあったのかと感じる。

「私は以前、そちら様に私の母は精霊ですけど、エルフであると申し上げました」

それから彼女は、精霊とエルフ、つまり妖精との違いを簡明に説明する。私もある程度は民俗学などに詳しい方なので大体は把握していたが、それらの違いは研究者によってかなり異なり、また文学や演劇などでも扱われたことから我々の世界には複雑多岐なものとして伝えられてもいるのである。妖精は土着的、あるいは自然界のエネルギーと直結する存在であり、一方精霊はそういう属性をも併せ持ちながらも、知性や悟性においてより優れていると位置づけられてもいるが。叡巫の説明でもほぼ同様であったが、双方が重複したりしているところもあるというが、我々の世界のようなヒエラルキーによって厳然とは区別されてはいないようなのである。また、よく言われたりすることでもあるが、エルフというのは小人、矮小的な存在ではないそうである。

これまでは娑婆においては白人による支配や差別や隷属化などが実に長い間まかり通ってもきたが、精霊界ではそういうネガティヴなことは一切ないのであると。結局中央である精霊王の心とおのおのの精霊、妖精（エルフ）の心が確かにつながってもいるので、勢いポジティヴで融和を志向するものであるという。無論、精霊や妖精は国や民族、また様々な神話や伝承によって異なるが、概ね（おおむ）共通するところもあり、更には動物や植物の精霊も現実にいるのであると。例えば彼女の飼い猫である浩介という猫も、もともとは精霊界の猫と我々の娑婆の猫のサイベリアンとの間に出来たハイブリッドの猫であると言っていた。だが、ハイブリッドとは、我々の世界では同じ種類の間での交合において生まれ出た者を指すのであり、彼女やその猫の誕生は、やはりどう考えても一般的ではなく、相当に特異であ

ると感じてくる。何しろ精霊界の精霊（スピリット）と人間界の人や動物との間で出来たのであるから。だが、いずれにせよ、もうここでの仕事は終わり、この地に滞在するのも後わずかである。あさって、明後日の午後、私はS駅に向かい、そこから新幹線で東京に帰るのである。名残惜しさもあるが、それはやむないことでもあると感じる。

私はそれから彼女に月曜日の夕方には、自分はS駅から新幹線で東京に向かい、ここM郡の土地から去る旨を伝えていた。すると、叡巫は、「はい、それは分かっております。でも、あなたはあの夢見の塔で瞑想をいたしましたので、島崎さんのネガティヴな事柄は、それは全てではありませんが、これからはかなり軽減されてゆくと思われます。ですので、あなた方の生は私たち精霊と比べてかなり短いのですが、大切に、そして大事に日々を送るようにしてください。お願いしましたよ」と言い、丁寧に深く頭を下げるのであった。それで私も、思わず腰を折って一礼していた。

そんな会話を交わしてから、私はまた、これまでの週末からの習い通りに独りでそこの森から彼女の家へと向かうことにした。エルフ屋で閉店のための片付けをしている叡巫に別れを告げてから、本日はあの猫、それはハイブリッドの猫の浩介であるが、彼に導かれてあの森の精霊界への入り口まで歩いてゆく。そこから私と半精霊でもある猫と一緒に、叡巫の家の庭にある夢見の塔にと向かう。途中、猫はいっとき立ち止まって言う。

「島崎さん、ここだけの話ですが、うちの主人の叡巫様は、本当は島崎さんのことを思っているので

すよ」と、実に意外過ぎる事をも、彼特有の少々たどたどしい人の言葉で言い伝えるのであった。それで私は「そうですか」と、如才ない対応をしていた。現実に、彼女は半ばだが精霊存在で、やがては我々人間から見ればだが、不死に近い本精霊に成る存在であるらしいし、一方私はもう五十近く、あと十年も経てばしっかり老齢といわれる年齢である。確かに、叡巫は整った面立ちの清楚な雰囲気の魅力ある女性ではあるが、でも、現実を考慮してみれば、たとえ彼女が私に好意を抱いてくれているとしても、それはほとんど意味がないことである。

そんな嬉しいような思いに、でもどこかやるせなさをも感じつつ、とにかくその夢見の塔で瞑想をする。本日は猫も一緒にそこで瞑想をする。この空間は、とても心を静謐にする作用がある。だから絶えず己の中で起こっている内的対話、それはほぼ全てがネガティヴな記憶によるものなのだが、そういう悪しき拡大再生産が次第に鎮まり、粘着性さえあるそれらが、少なくとも塔の中ではすっかり遠ざかっていくのであった。だが、私はまたあの雑然とした騒々しい東京に帰るので、そこでこの地でどうにか得た悟りを開いた状態を維持できるものかと危惧してしまうのであった。

想えば、自分は十代の頃に父親が二度も病気で倒れて、そういう事情からすっかり人生が狂ってしまった。大学と決別した後に色んな仕事をして、三十代の半ばに『五輪建装』に入社して、五十近い今日までどうにか生き延びてきたのであった。私はどうも若い時分から通俗的な事柄や娯楽などは好きになれなくて、生活上の楽しみといえば宗教学や民俗学の学術書やホラー系の文芸書を読むくらい

であった。そうした暮らし振りから、自分でもホラー色のある作品を書くようにもなったのだったが。だが、常々思っていたことなのだが、一般の世界観では、我々が五官で感じ取る世界とその事象のみが唯一のリアリティーと多くの人々に認知されてきていたのだったが、実際世界では可視の領域以外の実相が展開をしていると思ってしまう。事実、近世の頃までは、日本でもある程度は異界との交流があったのではないのかと。あの三頭弁財天や叡巫が言うように、二十一世紀の現在地球がある種の飽和点をも迎えて、それを再び具現化しようとしているのではと感じる。

叡巫が前にも言っていた事だが、こちら側の世界の秩序を乱さない限りにおいては、精霊界からの参入や移住があってもそれはそれでいいのである。むしろ、我々の世界にはいることそれ自体が害毒であるような人間たちが何と多いことであるかと感じてもしまうのだ。また、考えてみれば、地球を何も我々ホモサピエンスが独占する権利もないし、恐らくはネアンデルタール人が生息していた時代には、我々から見ての異界に存在している精霊と頻繁に交流して、より高次の「共存共栄」が行われていたのではないのかと。

人と精霊の精神の違いは、かなり大きいと感じてしまう。心を作り上げている感情や思いは我々人間社会ではどこまでも主観的なものであるが、精霊の世界ではかなり客観的なものであると思われるのである。また、空海の『十住心論（じゅうじゅうしんろん）』の第四レヴェル以上は、それらは人間界特有の我欲を脱したものであると感じる。

精霊である存在の彼、彼女たちは穏和さと共生を旨として、また無意味な競争原理は初めから持ってはいないのである。更に、個々の精霊の心の中にある〝内在神〟が、大元の精霊王とつながっていて、精霊界全体の平和と安泰のために行動をするという。それはひいては、宇宙全体の安寧にまでも及ぶと思われる。地球は西欧諸国の過剰で度し難い開発の結果、最早崩壊寸前にまで追い詰められ、地球意識の要請により精霊界の王が何人かの精霊を娑婆に遣わして、それによって秩序だった地域社会を作り、その〝場〟からポジティヴな波動を社会や国々に、更には地球全体にと送っていくことを計画しているのではないのかと。瞑想中にそんなことを思っていると、何かテレパシーのように、昨日家屋が建てられた現場に来た三人の精霊からの伝言らしきものが届いてくる。

――まあ、あなた方の世界における白人の入植、侵略とは全く異なって私たちの移住は穏やかで平和を模索するものなのです。ですので、娑婆の方々がほとんど気付かぬうちに次第に社会の中で好循環が起き、新しく変換されていくというものであります。でも、それには多くなくともよいのですが、そういう現実を心有るあなた方の世界の男女が認知することが必要とされているのですよ。また、精霊界の大元、ラージャ様は人格神的な側面を有している超生命体である一方、真言密教で言う大日如来のような純粋エネルギー体とも捉えられている宇宙の根源存在から現れでた存在体なのです。同時に、おのおのの精霊の内に宿りし、内在神でもあるのですよ――と、思念による伝達をするのであった。そしてまた、その塔特有の静けさとなる。本日は、今までの瞑想と比べて、かなり異なると感じ

た。今日は精霊界の猫でもある浩介も一緒であったからなのか。

そういうこれまでとは違う夢見の塔での瞑想を終える頃に、またあの足音がする。

外では、叡巫が佇んでいる。精霊の世界にも、もう黄昏が迫ってきている。叡巫は私にとても丁寧に一礼をし、静かな口調で言う。

「明日はこの家自体をも、もう精霊界に還さなくてはなりませんので、それにはどうしても一日の時間を費やしてしまいますので、大変申し訳ありませんがここでの瞑想も本日で終わりとさせて頂きます」

私は多少残念な思いもあったが、でも、ここM郡での仕事もすでに終わっているので、どのみち来週の初めにはこの土地を離れなくてはならず、これも一つの必然的な流れでもあると感じてくる。

「こうして島崎さんと出遇いまして、私はあなた方の世界に何か意味のあるものを自分なりに遺すことができたかと思うのです。それはささやかですが、確かに、宇宙全体の全てのアカシックレコードを収蔵する寺院にきっと保管されてゆくと思うのです。……永遠に。そしてその事実が、私のこれからの本精霊と成ってからの精霊界での日々や、宇宙全体の中での魂の軌跡に意味を持たせると、少なくとも私は感じます。だから、自分はあなたを支援したところもありますが、でも、同時に私自身、島崎さんに支えられたともいえます」叡巫は、そんなことを私に伝えてくれる。彼女の言葉に、精霊界と顕界という隔てを超えた心の交流と、共存共栄の精神を感じた。

考えても見れば、神々であれ仏尊であり、拝む我々人間存在がいて初めてその存在が確固たるものとなるのであると感じる。だから、ある優れたヨーガ行者は我々と関わる霊界は地球の大気圏を離れては存在しないとまで言っていたが、それは案外事実であると思う。結局、ここ地球では我々の意識、また心によって神々や仏が作り上げられてもいるのである。だから、特定の人格神は、それは宇宙的な視座から見てだが、決して高い領域のものではないと。地球人がもっと覚醒すれば、それらが仏教で言うマーヤー、迷妄にしか過ぎないことに気付くと思われる。

そんなことを思っていると叡巫は、「以前にも申し上げましたように精霊界は無意味なヒエラルキーを持ってはいません。全てが万物の根源的平等性に依拠しておりますので。精霊界の存在の中心は、これはあなた方でいうヒューマノイドタイプの生き物ですが、他の動植物とのあいだにも階層などはありません。ですが、それぞれ個的な属性や、それに伴う個性や能力をもおのおのが持っていますので、社会を効率よく動かしていくための序列はありますが。でも大元の精妙な領域の臨在から、――それは宇宙の根源そのものなのですが、そことの交流が常にありますことから全てのものが一つに融和しあって、あらゆるものがその精妙な次元から派生しているという宇宙的な事実を、そう、自然と認知しているのですよ。つまり私たち精霊の世界は、あなた方の世界とは異なり、より精妙な物質とそこから発生する法則で成り立っているのです」と言う。

私は彼女の談に、理論物理学で言うホログラフィー宇宙モデルの理論を思った。

その理論では、宇宙は二重構造になっており、我々の五官で知覚できる物理的な宇宙の背後に、もう一つの別の不可視の次元の宇宙が存在していると言う。そして「暗在系」と称されるその後者ではあらゆる物質が畳み込まれていて、可視の「明在系」ではそれぞれがバラバラになっていた全ての物が、そこでは一つに融合しているのであるのだと。つまり原子以下の素粒子のレヴェルに着目すれば、あらゆる物質はどこにも存在しておらず、同時にあらゆるところに存在しているともいえると。それは非局所的な〝霧〟のようなものであり、「暗在系」のそこは時間とか空間という概念で定義できない次元であり、物質も精神もエネルギーとして畳み込まれているのであると。それを提唱した物理学者は、更に、我々の物質界の事物などそれらを構成している素粒子は、明在系と見えない暗在系との間を行ったり来たりしているものであると述べていた。それらは、ある意味の有る場・フィールドではそれに従ってまとまりのある形態・ｆｏｒｍａとして凝集をしていて、そうして娑婆、顕界における物質として存在しているのであると捉えているのであったが。

「万物は根源的平等性においてつながっていますが、でも、精霊界ではそこはやはり、おのおのの役割がありますので、例えば妖精は精霊の眷属的存在でもあり、またヒューマノイド型の精霊は、他の生き物である動植物の精霊をも含んで超えています。でも、本当にそこには差というものはありません。それぞれの個性と役割によって精霊界の存立に協力しあい、貢献をしているのですよ。それは物質を心が含み、更に心は魂によって含まれているという法則によるものなのです」

そんな風に叡巫は精霊界の構造を説明する。彼女の説では、およそあらゆる意味で精霊界では融和や共生が実現されているのであると。私はその実情に、精霊界それ自体が高次の意識レヴェルによって成り立っているとの感を改めて抱くのであった。それは恐らくだが、唯識心理学で言う阿頼耶識（アラヤシキ）のレヴェルにあると思われる。唯識心理学の『九識論（くしきろん）』では、人の心の仕組みを九つの段階にと分けているが、その五識と六識までは、五官による働きで記憶と予測を通して物事を判断するとしている。だが、それから先の第七識の末那識（マナシキ）では、深く思索して意識の奥で絶えず活動し続けている心の作用に関する領域であると捉えられている。確かにその次元では高度な精神活動が行われているのであるが、一方では「自分・己」と言うものにしがみつく我執をも併せ持ってしまっているのである。未那識を分析すれば、我痴や我見、我慢、我愛など四つの煩悩があるという。これらの意識レヴェルはそれなりの価値を持ってもいて、その前段階の意識よりは発展しているのだが、でも、例えばこれが宗教においては、私が出会い信じて帰依した神のみを闇雲に絶対視して、他の神々や仏尊を慮（おもんばか）ることを放棄してしまうという現象が起こってしまうのである。いわゆる盲目にしてしまうのであるが、これがほかの世の中の一般的な物事ならば、例えば男女間の恋愛などであればさほどの問題もないのであるが、こと宗教となるとその被害はまさに甚大である。それは有史以来の一神教の所業を見れば明らか過ぎるほどである。

だが、未那識の上の段階である八識の阿頼耶識では、そこに人のあらゆる行為が納められていて、

それらは過去世、現世、そして来世とあたかも数珠のようになってつながり続いていくのである。更にこの領域では、他のあらゆる生命との交流があるとされているという。実際七識の未那識までは、一個人の死によってそれら全てはなくなってしまうが、阿頼耶識では、その個人の体験、記憶、性格をもそのまま保存され、それが来世の種子になっていくのであると。

更に究極の第九識、阿摩羅識（アマラシキ）では無限の広がりとエネルギーを持っており、それはあらゆる生命の源（みなもと）であり、全ての動植物はそこで確かなつながりを持っているのであると解釈されているのである。それは自分の思いでは、まさしくｗｈｏｌｅｎｅｓｓ――完全性であり、宇宙――ｃｏｓｍｏｓの根源であると感じるのである。

そんなことを思っていれば、叡巫は、「島崎さんは『九識論』の阿頼耶識についてはご存知であると思うのですが、私たち精霊界の住人の何割かは常に第八識の阿頼耶識とのつながりと共にあるのですよ。また、前にお話ししましたように空海様の『十住心論』の第四のレヴェルの段階に私たち精霊界のあらゆる生き物の心が到達しているのですよ」と言う。

『十住心論』の第六番目の『他縁大乗心（たえんだいじょうしん）』は、己のためのみではなくて、一切衆生のために働くという慈悲の心に目覚めたレヴェルであり、また、次の第七の『覚心不生心（かくしんふしょうしん）』では一切の実在を否定することで、実在に対する迷妄を断ち切り、ひたすら〝空〟を感じて安楽境を得るレヴェルとなり、更に第八の『一道無為心（いちどうむいしん）』に於ける境地では心の本性は清らかであり、そこでは主体も客体も無く

全てが一つであると悟ったレヴェルとしているのだが。

「島崎さんは『十住心論』に詳しいと思うのですが、そこでの第八と第九の『極無自性心』は『九識論』で説かれる阿頼耶識の領域であると私は思うのです」と叡巫は言う。確かにそれは事実であると自分も思うのではあるが。

「それでありまして、空海様の説かれた最後の究極の段階であります『秘密荘厳心』ですが、これはまさしく『九識論』の究極の第九識である阿摩羅識の次元であると思うのです。ですので、空海様は第九住心までのように精緻な分析を最後の第十住心にはあまりされてはいないのですが、でも、私は、その『秘密荘厳心』は直観において垣間見感じることが出来る宇宙の究極の領域を感じ取ったものであると思うのです」

私は叡巫の語りに西欧の学問体系の主流の考え方である――言語化されないものは、それは存在しない――という認識とそこからくる思考法を思った。これは多分に西欧の学問の基盤でもある『聖書』の――はじめに言葉ありき――というあのセリフの影響を蒙っていると感じてしまう。だが、本当の大宇宙の究極の実相は言語化それ自体をも困難なものであると感じる。だから、弘法大師空海はあの胎蔵界と金剛界の両界曼荼羅で、宇宙の実相とその原理をも表現することを模索し実現をしたのではないかと想うのである。ちなみに我が国の原初信仰である古神道では事挙げせずと言い、ある神道家は、祝詞は声を出さずに唱える方が良いのだと言われる。

以前に叡巫の語りに、精霊界では一人一人がシャーマンでもあると感じたが、シャーマニズムは二十一世紀の今日でも生きた思想としてアジア諸国やシベリアに存続している。シャーマニズムは仏教や道教や儒教や古神道とも、またイスラム教やキリスト教とも結びついて地球上で多様な信仰形態を作り上げてきたのであったが、でも、どの民族やどのシャーマニズムにも共通するのは、〝天〟を神として祀ってきたことである。そして更にシャーマニズムは天を内なる存在とも位置づけ宇宙の内面性としても捉えているのである。昨今、流行りだした感すらある〝内在神〟も、それは神秘家や瞑想家など人によってハイアーセルフとかインナーセルフとか名称はまちまちではあるが、いずれにせよそれは己の魂の深奥であると同時に宇宙の根源をも表すものであると思われる。結局我々の惑星・テラは、中世以降ヨーロッパが中心となって作り上げてきた実に攻撃的な欧米の合理主義の文化などに突き動かされてきたのであったが、それとは明らかに違うアジアのシャーマニズムの文化は穏和さやそこからくる高邁さによって築き上げられ、彩られていると感じるのである。

事実、シャーマニズム文化の担い手は遊牧民族でもあり、日本でも遊行僧や山伏などの山人族にその実践者が多くいたが、物質文明を創造してより便利な生活形態を得ることよりも、自然を破壊することなく尊重して自然の中の神々や精霊と交歓し、自然界が提供してくれるささやかな贈り物に満足し感謝して自然との共存を願うことを目指して沢山の動植物もが互いに融和をもって通じあっているという真理を教えるものである。またシャーマンは此岸にいながらも、確かに天と通じつながってい

て、樹木や岩石や山に、シャーマンは神々や精霊の宮居（みやい）、依代（よりしろ）、磐座（いわくら）を感じているのである。

実際、大乗仏教の中でも、中国、朝鮮、日本など東アジア諸国で発達した「山川草木悉有仏性」という思想は、シャーマニズムの精神を色濃く留めており、それを内在、深化させていると感じるのである。そういうシャーマニズムをも基調とした精霊界の理念を我々の世界に波及させることを、二十一世紀の今精霊界は目的としているのではと思ってしまう。それはホモサピエンスの意識の革命であり、内在神という自己の心をもって宇宙・コスモスと呼応することを模索するものでもあり、更には「天人合一」の境地を希求するものであると。結局、精霊界の智慧は全く差別的な末那識のレヴェルではなく、無差別の阿頼耶識の領域のものであると思われる。我々の娑婆において見られる、ユダヤ・キリスト教的な智はどこまでも差別的な智慧でしかなく、しきりに主張しまくる「愛」もそこからくる他宗教への敵意を併せ持つ偏り切った偽りの愛、それは実は憎しみでもあるが、東洋全般の教えは、それはまさしく広大無辺でもある無差別の智慧であり、宇宙の大いなる慈悲であると感じる。近年幽体離脱を普及化させた御仁が宇宙の根源には無条件の愛が満ちていると述べられていたが、それと通じるものでもあると。

そんなことをも思っていれば叡巫は、「私たちの精霊界では、空海様の到達された境地を目指しております。今まではあなた方の世界と精霊界は明らかに隔てられもいましたが、これからは互いに持っているものを分かちあって、それぞれが宇宙に求心的になることを模索していくことが宇宙的な規模

において求められていると思うのです。そういう時代の境目に、こうして私と、島崎さんが出遇ったのであると思います」

そこまで言うと、叡巫は少し生真面目で物堅い表情を湛え、「島崎さんはご自身の阿頼耶識の中のネガティヴな部分を、日々の瞑想で取り去ることをお考えになられてはと思うのです。私にせよほかの精霊存在にせよ人間の方々も宇宙を舞台とした転生で、色んなカルマを心ならずとも背負わせられてしまうというところがあります。そこで、心の傷を負ってしまったりするのです」

叡巫の言うことは確かに事実であると。昨今の先進国では、かなり恵まれた生活が一般化さえしているのだが、アジアの小さな国々では、貧しさの中で苦しい暮らしを強いられている人々もいると感じる。もっとも、それは先進国側の人間の迷妄であるのかもしれず、小国ではあるがブータンは幸福度が大変高い国であるという。それはどこまでも個々人の感じ方にもよるが自然との共生を模索、実践している国は、さほど物質的に豊かではなくても、現実に幸福な生活を日々送っていると思える。また、これまでは西欧の先進国中心の世界観や、五官で把握するリアリティーのみを唯一絶対の現実との認知が、――それもその特有の西欧の学問体系からきたものであるが、それら自体も次第に揺らぎ始めていると感じるのである。

「サトル・エネルギー」という言葉がかなり社会的に定着してきたが、気や、ヨーガで言うプラーナやアーユルヴェーダで説かれるチャクラの存在が認められてもきているのである。つまり、従来の世

界の捉え方と異なる、新しい枠組み、パラダイムによる世界の解釈に人々が次第に気付き始めてもいるのであると、そんな風にも思われる。何か、新しきよりメタフィジックな流れが近付いてくるのを感じもする。だが、先程彼女が言ったように、多くの魂は、娑婆での生でそれぞれ様々な傷を負ってしまうものであるというのは、それは確かに事実ではあるのだが……。

「現実に生きることで、人はその心に沢山の傷を負ってしまうものです。また、ここ東北でのあの東日本大震災で亡くなられた人たちや、未だ行方不明の方々は、その魂は大変無念な思いでありましたでしょうし、遺族や残された家族の方々の悲しみもそれはひとしおであると思われます。ですが、魂は永遠でもあるのですよ。あなたは夢見の塔での瞑想で宇宙全体の中で様々な生き物として存在している〝生〟をも体感されたと思うのですが、私という存在は、ここの今の私のみではなく、宇宙全体に多様に存在する多くの〝私・自分〟も共に在りあるのです。そしてその大元であり源でもある根源的自己、メタセルフがあって、娑婆で生活している方々は死後そこへと帰還、回帰して、次のこれまでとは異なる惑星での生へと向かうのです。でも、もうそういう必要がなくなれば、最後にはその大元の自分に融合し、更に宇宙意識に収斂していくと。また、私たち精霊も、あなた方と比べますと大変寿命が長いのですが、でもいつかは寂滅に至ります。やがてその魂は、あなた方と同様に宇宙意識に還帰していきます。ですので、おのおのの生、生存での特有の形体・ｆｏｒｍａは全て仮のものなのです。私たち精霊界の物質や波動は、あなた方の世界と異なり精妙でより宇宙的でありますの

で外皮、形体が流動的なのでもあります。ほとんどアストラル体ですので、物質世界のような硬さはさほどはありません。無論それは必要において時に硬度を増したりもしますが。もうご存知でしょうが、ここの土地に三人の精霊の方々が移住されてきましたが、男性であるあの方々はある種の硬さをその身体に持っております。そうでなければ、ここ娑婆では活動は出来ないのですから。これまで精霊界にはあまりなかった可変性をもある程度ですが持ち始めています。島崎さんもお察しのように、二十一世紀の今、徐々にですが、進化をも始めました精霊界の住人があなた方の世界に移住してきます。ですが勿論、それはポジティヴなことをその目的としているのですよ。白人、アングロサクソンがしたような侵略や略奪などではなく、娑婆の心有る方々と共に新しきより秩序だった世界の構築、そして創造のための参入であり、参加でもあるのですよ」

叡巫はそんな風に精霊界の参入における事情を説明してくれる。私は彼女の話を聞きながらマンションの、谷山氏が精霊であると明かした人物のことを思った。その人物は、少なくとも彼の霊能による推察では精霊であり、また、もうすでに三人の精霊が、自分が仕事で建造に立ち会った家に住むというのであるが。だが、精霊である彼らは、そんなに長く我々の世界に定住していけるものであるのかと思った。そんな疑念を彼女に伝えれば、「はい、あの方々は三年くらいはここM郡の地で暮らすことは出来ますが、それ以上の期間は難しいかと思われます。でも、その際の状況や必要に応じて、別の精霊存在が替わるようにこの地に派遣されてくると。ですがやはり、特定の精霊存在があなた方

の世界に長く関与して活動することは困難であるかと予想されますが。まあ、それは精霊界の大元の意思が一つの流動的なものとして随時決定されてゆくことではありますが」

彼女の言うには、ここM郡の一帯はあの県境にある太古の神霊が流れ着いた森の作用が及んで、精霊が住み易い土地となってきているのであると。叡巫はそれ以上は言わなかったが、私が男性の神々が集ったとも聞いたあの弁財天などや異形の神々が棲むという異界の森と、この度M郡に移住してきた精霊は、どこかでつながっているのではと思ってしまうのであった。

それから彼女の家へと招かれ、コーヒーを振舞われる。こうして、この家で二人と一匹で過ごすのも今夜が最後であると。私は少々戸惑いつつも言っていた。

「叡巫さんは先程私に、阿頼耶識の中の自分の中のネガティヴな部分を瞑想において取り去るようにと言われましたが」

叡巫はそんな私の問いに「はい、それはご自身の中にすでにもう巣食ってしまいましたネガティヴな記憶、阿頼耶識に収蔵されてしまったそれらを捨て去り、そういう体験をしなかったというご自身として自らを再統合していくのが最善であると思いまして、僭越ながらそのように申し上げたのですが」

彼女の言うことは、スピリチュアル系のニューエイジャーやセラピストなどがしきりにのたまうことではあるが、でも、その実現は至難でもあると。もっとも、それを望む男女は昨今結構多いようで

もあるらしいが。

「確かに、現実には、すでに起こってしまった出来事を変更するのは不可能ですが、幸いと申しますかあなたは異界の森の中で邂逅されたそこの住人でもあるという老齢の人物の誘いで機前の社で何度か禅定をされています。ですので、その作用で、ある程度ですが阿頼耶識の中が清浄にされているとは思うのです。また、私が創りました夢見の塔でも瞑想されましたので、そういう一連の流れから、どうにかこれまで阿頼耶識に蓄積されてしまったネガティヴなものを排除して捨て去ることが出来るかと思われるのですが。島崎さんはその機前の社での禅定で、一時期かなり記憶が渾沌ともなったと思うのですが、その体験を活用されて、ご自身の意識を再統合されてはと思うのです。過去の事実そのものを変更することはまず不可能ですが、それを経験した際のそれ特有の周波数ではなく、自分の魂が本来理想と望む周波数帯に今現在のご自身の心を置くように極力、意思をして努めれば、アセンションの時代期の作用もあいまって、あなたのお心はこれまでよりもずっと軽やかになってゆくと想われるのです」

私は彼女の話に、太古からの叡智をハワイに継承してきたカフナという呪術師の技法と智慧を元にして、現代で主にヒーリングやセラピーなどに活用されているあの「ホ・オポノポノ」の心というものの構造分析とその理論を思った。それによれば、心、意識は潜在意識と顕在意識に分かれていて、その上に「アウマクア」と称せられる超意識があり、更に上に究極の神的意識があるという。「ホ・

オポノポノ」では、ｉｎｆｉｎｉｔｙと捉えられるその至高の領域と、誕生以来の多くの記憶が蓄えられてきた潜在意識とを交流させて、それによる浄化作用とそこから伝え送られる霊感によって現代人の病んだ心や精神を癒すという手法なのであるが。そういう西欧で確立した心理学と、太古の呪術の秘儀を現代に適用するように折衷させたところはあるが、でも、叡巫の伝えることは現実に、汚され切った己の心の清浄化には有効ではあると思った。

叡巫はかなり物堅い表情をし、「島崎さん、これはネガティヴな記憶から自由になる一つの秘訣ですが、まず常日頃絶え間なく浮かんでくるネガティヴな記憶に引き込まれないようにするのです。過去の記憶が心の端に現れ出てきても、すぐには反応しないで、それに記憶の上で慢性的にも同化してしまってきた自己から、それを自ら引き戻して、より高次の自己がそれを回収するように心掛けるのです。精霊界の私の神殿には、分化したあなたの魂の一部がすでに保存されておりますので、ご自身のお心がそことつながることを日々の瞑想において観想されますと、もう習慣的になってしまっている悪しき記憶との同化を避け、次第にそれらを滅却できるようになると思います」と、どこか諭すみたいな口調で言う。

叡巫はそれから、我々の世界で今でも結構話題を呼んでいる「アセンション・次元上昇」について、それは実に多くの説があるがパーソナル、個的なものと社会的、ソーシャルなものと、更にその後に起きる両方を統合するトータルなものがあって、トータル以外はすでに終わってしまっていると言う。

その二つは、何か社会や娑婆に顕著な目立つ影響を及ぼさなかったが、でも、それを望む霊性の目覚めを志向する男女の内面で、それらアセンションが確かに今から未来に向けて具現化されてゆくと言う。

私はその日、それらのことを伺い、いつもより晩い時間まで彼女の家にお邪魔して、夜に叡巫と猫に見送られて精霊界への出入り口である森から自分が帰属している顕界へと帰還した。

翌日、日曜だが、私はもうあの塔へ赴くことは出来ず、また、閉店も間近のエルフ屋に行くのも何だか気が引けたので、マンションの部屋で旅立ちのための準備をすることにした。

一通り終わってから、建物の外に出れば、谷山氏が佇んでいる。それで挨拶を交わしあってから、ここのこれからの状況について話をする運びとなった。結局、私は多少概括的にだが、己のこれまでの体験を話していた。が、同じ会社の山村氏が精霊であるという事はあえて伏せておいた。

私が伝え終えれば彼は、「まあ、これから徐々に、ここ東北のM郡には精霊が住み始めると思われますが、でも、決して悪い結果にはならないと。だって、彼、彼女らは我々よりもずっと高い意識レヴェルにあるのですから」と、簡明にご自身の意見と予想を述べられ、更に、「私は異界の森で甦ったのですが、恐らくそれは精霊界の霊威があの森にも宿っていて、それによって生き返ったのでもあると感じるのですよ。でも、特にあなたのように精霊界との交流があったのではなく、それに島崎さんが言われた弁財天が祀られている堂宇も私は森の中で見たことがありませんし。ただ、自分の場合

は単純に、もう何年かの生をあの森そのものから与えられたと、少なくとも私はそんな解釈するのですよ」と言うのであった。

谷山氏はこれからも墓守の仕事で、ここの土地で独りで細々と寂滅するまで生活できればそれでいいのだと言われる。S市の郊外にある自分の家には妻と子供もいるらしいが、二人の子供はもう社会人であり、彼自身全く未練はないのであると。谷山氏は穏やかな面持ちで、「前にも申しましたが、私はあの異界の森で甦ってからは、以前ほど通俗的な事や娑婆での諸々の事などに執着がなくなってきて、そんな訳ですので、自分一人が、この地で残りの人生を静かに平和に過ごし送ればそれで大いに満足なのですよ」と言うのであった。恐らくだが、彼は身内では行方不明と捉えられているのであろうが、でも、現実に商売に失敗したということでご家族の方々もさほど熱心には捜されてはいないのではないかとも思う。何か、そう全てが、納まるところに上手く納まっていると感じる。

谷山氏はそれからここのマンションのもう一人の居住人について手短に伝えてくる。大体四十くらいの風貌の男性だが、毎日東日本大震災の被災地の方に電車で出掛けて、お経を読んだりして亡くなられた方々の供養などをしているのであると。私はその話に精霊存在が、僧侶のような役割をも担っているのかと感銘を受けた思いでもあった。

私はそれから、エルフ屋とは反対方向に歩いていった。数分過ぎた時に、向こうに虚無僧姿の人物を眼にする。恐らく安徳さんだと思っていると、深編笠を取れば、やはり彼であった。それで、早速

安徳さんにも、私のここ数日の状況を伝えていた。私の話を聞き終えてから、程なくして、「そうでしたか。では、恐らくですが、これからは精霊の国と私と島崎さんが関わったあの異界の森が、我々の活動する娑婆に影響力を及ぼしてくると思われます。無論それはポジティヴなものでありますが。精霊の国や、神々が永く棲み着いてきたその異界の森や土地自体が神々の集合体になってしまったという現実が明確に我々の世界に関与してくるものと想われます。ですので、これは中南米のように、多様な民族が一つの国で共存するというケースに似ているのかと思われます。そういう単一民族だけではなくて、異なる民族が混淆的に暮らし生きることが新しい文化を創造したように、異なる存在形態の住人や神々、精霊が協同でここ地球に穏和で平和な世界を創る広大無辺なるコンチェルトを奏でていくという、そういう時代期になってきたのであるのではと。これはまさしく、銀河系宇宙の潮流からくる必然でもあると感じます」とご自身の意見を述べられるのであった。そして更に、「私は黄檗の僧侶であったのですが、修験道や古神道、また、東アジアのシャーマニズムにも関心がありまして、己の修行に取り入れたりしてきました。たった一つの方式だけで自然界の深奥や、宇宙の実相を感得、説明するのは不可能でありまして、あの空海殿も真言密教を確立されるまでに、古神道や道教や神仙道など様々な行法を研究してきたのでした。また、あの方は、宇佐八幡宮の祭神をも尊崇しております。ですので、我々日本では、中世以降、神仏混淆思想が確立しておりますが、空海殿は真言密教という形態で、我々の国土に神も仏も共に存立できる優れたるネットワークをあの平安期の時代から密

かに作り上げてきたのではないでしょうか。更に近代になってからも、あの大本の出口王仁三郎殿が教派神道の枠に留まらずに、弥勒信仰をも標榜しています。ですから、中世以降、西欧諸国が世界を支配してきたのでありましたが、でも、これからの二十一世紀は東洋の太古からの宗教や神秘主義が、また、その背後で確かに臨在する自然の神々や精霊の霊威が、地球にポジティヴに浸透し、そして融和を促進してゆくと想われます。また、多くの霊性を目覚めさせることを模索し志向する男女が、既存の世界観から脱却して、宇宙の多元的な実相をも体感していくものと想うのです」

私は安徳さんの意見に、昨今あの〝幽体離脱〟を体験する男女がかなり増え、それら異世界への参入が次第に一つの確立したものにもなっていくのを予期してしまうのであった。

事実行き来しているその異世界に、一定の数の人々が往還して同様の事柄を確認するようにでもなれば、最早それは世界の揺るぎなきリアリティーにもなると。そういう複数のポジティヴなリアリティーを世界の人々が互いに認め共有していくのが、アセンションの時代期と言われている今の世界の理念であり、地球意識の願いでもあるかと感じる。

そんなことを思っている私に、安徳さんは、「では、私は失礼いたします。あと数日で、私も島崎さんと同様に東京に帰り、また向こうで知り合いのお寺に居候でもしながらこんなボヘミアン的な修行僧の生活をこれからも続けていくつもりです。まあ、二十一世紀の市井に住むサドゥーとでも申しますか。縁と機会がありましたら、また、どこかで、そう、そちらがお好きな天祖山などに一緒に登

りたいものですね」とわずかに笑みを見せて言う。

私は彼が、どうして伝えてもいない奥多摩の天祖山を自分が好んでよく登っていることを知っているのか不可解にも感じたが、でも、それはどうしても他人様に明かしたくはない己の秘密ではないので、特に憤りも戸惑いもなかった。本当に大切な事は他人に知られたくはないが、さほど重大ではない事柄は幾らでもオープンになってもいいものと思った。

私は、安徳さんと別れの挨拶を交わしてから、また辺りを漫ろ歩いて、これまでの三ヵ月の体験を想っていた。結局、自分はここ東北の地での単身赴任で叡巫という精霊と人間とのハイブリッドと出遇うという特異な体験をして新しい世界観を得た。もともと自分はスピリチュアル系でもあったので、それはどこか望んだことであったのかもしれないのだが。若い時分には全てが少しも思い通りにならず、数年前から出版が実現したことから、ほんのわずかだが物事が曲がりなりにも成り立つようになったのだったが。しかしもう五十間近であり、今更という感もあるが。だが、とにかく、ここ東北でのそれらの体験がこれからの残り少ない娑婆での日々に活かされれば良いと想うのだが。そんなことを思いながら、私はこの地を去る前日の午後に、辺りを幾分放心したみたいな気持で歩いてみる。

想えば、私はあの異界の森で一人の老人と思いがけなく出遭って、三つの頭の弁財天から始まり、ハイブリッドの精霊の叡巫との関わりが起こってしまった。その結果、自分は神秘をも体現して、新しいリアリティーをも体験したのであったが。また、叡巫の導きで、精霊界の神殿に招かれ、そこで

己の魂の一部が保存されたと彼女は言っていたが。それが一体どういう結果に至るのか、予想は出来ないが、でも、それ自体が、今世紀の世界の多様な流動の一つであるとも感じる。一つの必然とも言うか。また、あの三頭弁才天が異界の森で自分に伝えたように、すり鉢状の窪地の最も下方にある社に自分の魂が祀られるようになるという予定されていたのかもしれない恐ろしくもある現実は、叡巫の協力でどうにか無化されたと、少なくとも今、あまり抵抗なく思えるのである。

山村氏は大学生の時に岩手県の山で崖下に転落して死に、それから洞窟を通って精霊界の老人と思しい人物から生を再び与えられたと言っていたが。思うに、それを私が異界の森で出遭った老人と比較することは現実には出来そうもないが、でも恐らく、私が関わったのはあの異界の森や山自体のぬしのような存在とも感じてしまう。また異界の森の老人はそこの一帯が神々が棲む村落でもあると言っていたが、実際不可視の神々が棲息していて、森それ自体が集合的な神霊と成って、森に縁があった人々に何か良いものを与えていたと思うのである。私は、己の生来の短絡的な性格から、老人の申し出を安直に受けてもしまったのだったが、でも、ある種の危機感から叡巫と出遇い、更に彼女の協力で新しい意識の次元に参入できたとも思うのである。何か全てが、自然界や、神仏から課せられた試練であったような思いすらもしてくる。ある種のイニシエーション、通過儀礼とでもあったというか。ちなみにあの鼻の高い高尾山などに棲んでいるという天狗に関するある民俗学者の考察では、天狗という存在は本来定まった形体を持たないものでもあるのだが、その状況において特有な姿形を

とって人々の前に現れたりするものであると解釈されている。結局自然界の精霊という存在が、その正体を我々人間に知られたくないがために、時に怪異な天狗の姿で、時には仙人のような格好で娑婆に顕現をしているのであると捉えられていたが。

実際古神道や原始アニミズムでは、山や森も川も海もそれらは全て八百万の神々の顕現でもあると捉えている。だから、おのおのに、その人生での困窮やそこから至った死や、ネガティヴな記憶による就縛からの解放などにも、八百万（やおよろず）の御力（みちから）が大いなる助力となったと思うのである。私も山村氏もマンションの住人の谷山氏もそれぞれが自然界の深奥と関わり、めいめいそこから通常では得がたい体験と、そして贈り物を頂いたのだと感じてしまう。

夢の光明化

東京に帰ってから、M県M郡での業務報告をし、また以前のような都内の建築現場に立ち会うような日々が始まった。結局、あそこに精霊界からの移住者が住み着いたのだったが、その後の展開を危惧もしたが、しかし、それも全て〝神仏〟の計画であるとさえ思えてくる。今では、……何の抵抗もなく。

帰京してから十日ほど経った頃、私は久々に長い瞑想をする。実際仕事に追われていると、原稿を書いたり、瞑想をしたりすることはなかなか出来難いものでもある。本日は土曜日であり、田無の西東京支社から昼過ぎに戻り、どうにか午後の時間を瞑想に費やすことが出来たのである。大体三時間ほどの瞑想を終えて、静かな動作で布団に入って瞑目する。やがて、意識が、暗い闇に流れていく。

夢の時空で、私はあの叡巫の白い神殿の近くにいた。……程なく叡巫が現れる。あのAラインの白いワンピースの服装である。でも、これは夢の中なので、彼女も私も共にアストラル体であると想われる。と、彼女は、私に、「こちらに」と言う。それで、神殿に入れば、前回と同様一階にはあの弥勒像が安置されている。叡巫は、「本日、この神殿の三階に上がって頂きます。この前にあなたの一部をこの神殿の三階に保存いたしましたので、繰り返すようですが、もうあの異界の森や窪地にある

社からの牽引力はありません。ですが、この場で手短に説明いたしますが、異界の森の堂宇で祀られていた三頭弁財天様も島崎さんの幸福に寄与しようと想われていたのです。また、あなたが邂逅したご老人の方も、島崎さんの洞察されたように広義の意味での八百万（やおよろず）でもあるのですよ」

彼女は、どうやら、私の思いを見通し、推察をもすでに把握しているのである。

「では、これから三階に行きます。M郡にいらした折にご案内した際は、ごく短い間しか三階にお留めしませんでしたが、今回はそこから宇宙の深奥の領域に参入いたします」

彼女の言葉に畏（おそ）れをも感じたが、だが、とにかく一階の弥勒像に合掌し、それから叡巫に付き従うみたいにして短い梯子を登って二階に上がる。そこの仏陀像にも合掌し、床に結跏趺坐し、彼女の指示で瞑想に入った。眼前の仏陀像は白い光を放っている。程なく、心が静謐になりだし、私は三昧に入って、やがて緩やかにアストラル体から意識が抜けだして、淡い白い光が湛えられた次の階にいる。そこでは、もう自分は意識そのものであり、視野自体も通常と比べ拡がっているのであった。この前の時と同様、傍で叡巫が佇んでいるが、白い光そのものにも見える。光と彼女の姿がつながっているような感すらある。

――あの時とは違って、今ここは阿摩羅識（アマラシキ）の次元と空海様の著された『十住心論』の十番目の『秘密荘厳心（ひみつしょうごんしん）』の段階で説かれる宇宙の根源、空・スンニャターでもあり、幽体離脱の体験者の方々の言われる究極の到達点のナル・ポイントの領域でもあるのですよ――

叡巫のそんな言葉に前方に視線を向ければ、その階の空間に数種の鮮やかな光彩があたかも戸を象(かたど)るみたいにもなって煌(きらめ)き映えている。

――あれは、夢見の最後の段階にと通じ至る場の入り口なのですよ。ここの階では、これから先では夢が光そのものに変換されていきます。もしもあなたが望まれるのでしたら、意識をあの光彩に向けてください。それは、あなたの超意識の決定によるものなのです――

心に届くそんな叡巫の柔らかくやさしい声に、しばしためらいもしたが、意識をそこへと向けてゆく。次第に全てが変換され始めて、緩やかに光の織り成す中に融和していく己を感じてゆく。やがて、そういう想いも、光の中で静かに消え去っていく。最期(さいご)に――、自分の心が光そのものに成っていくのを確かに感じ……。

――合掌――

【著者 プロフィール】

藤田泰彦（ふじた やすひこ）

北海道出身。都内、中野区に在住して 30 年。

古神道、仏教、道教、東アジアのシャーマニズムを信奉し、アニミズムを日々の心のより所にしている。

著書：『蝉神』（2008 年・鳥影社）、『古代神の目覚め』（2014・青山ライフ出版）

異形の神々の森

著者　藤田泰彦

発行日　2019 年 4 月 3 日

発行者　高橋範夫

発行所　青山ライフ出版株式会社

〒 108-0014

東京都港区芝 5-13-11 第 2 二葉ビル 401

TEL：03-6683-8252　FAX：03-6683-8270

http://aoyamalife.co.jp info@aoyamalife.co.jp

© Yasuhiko Fujita 2019 printed in japan

ISBN978-4-86450-326-6

※本書の一部または全部を無断で複写・転載することは禁じられています。